高等学校における教科指導の充実

家　庭　科

指導と評価の一体化

～生徒の主体的な学びを促すために～

栃木県総合教育センター
平成26年３月

ま　え　が　き

現代を生きる私たちは、政治・経済・文化・情報・科学・技術など様々な面において状況が絶えず変化する社会の中にいます。今後も、少子化・高齢化の急速な進行や、グローバル化にともなう国際競争の激化、地球規模での環境の変化等が予想されるとともに、世界的に知識基盤社会へと移行しつつあり、新しい知識・情報や的確な判断力、コミュニケーション能力等を身に付けることの重要性がますます増大していくものと思われます。

そのような中で「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」をもち、あわせて「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」や「たくましく生きるための健康や体力」を備えた人間を育成すること、つまり「生きる力」をもつように子どもたちを教育することが求められています。

高等学校においては、平成25年度入学生より新しい学習指導要領が全面実施となっています。この新学習指導要領では、「生きる力」を育むためには、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成」をバランスよく行うことが重要であるとしています。また、「主体的に学習に取り組む態度」の育成も大切です。このように様々な面でバランスのよい教育を実施するためには、指導を計画的に行うとともに、ＰＤＣＡサイクルに基づく工夫・改善を進めていく必要があります。また、学習の評価についても、計画的に多角的な観点から生徒を評価するとともに、その評価を次の指導の改善につなげる「指導と評価の一体化」を図ることが求められています。

これらの求めに応じるためには、多くの努力と工夫・改善が必要となります。そこで、栃木県総合教育センターでは、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。特に今年度は、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、指導と評価の一体化を図るための授業改善について、国語科、数学科、理科、保健体育科、家庭科の各教科で調査研究に取り組みました。教科指導を充実させるために、本冊子を活用し、生徒の学力向上に向けた取組の成果をあげていただきたいと願っています。

最後になりますが、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成26年３月

栃木県総合教育センター所長
金　井　　正

目　次

Ⅰ　本調査研究の背景 ・・・

Ⅰ　本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、「指導と評価の一体化」等の各教科に求められている課題解決を図るための教科指導の在り方を探ることに重点を置き、国語科、数学科、理科、保健体育科及び家庭科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方及び学習評価の在り方について整理する。

１　学習指導要領改訂の基本的な考え方

(1) 教育基本法の改正から、学習指導要領の改訂までの流れ

ア　教育基本法の改正（平成18年）

「科学技術の進歩・情報化・国際化・少子高齢化・核家族化」「価値観の多様化」「社会全体の規範意識の低下」など、昨今の教育を取り巻く環境の変化を受けて、平成18年に教育基本法が約60年ぶりに改正された。

新しい教育基本法では、「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法の普遍的な理念は大切にしつつ、時代の変化に即した内容を盛り込みながら、

○　知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した人間

○　公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画する国民

○　我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人

の育成を目指している。

イ　学校教育法の改正（平成19年）

教育基本法の改正を受けて、学校教育法をはじめとする教育に関係する諸法令が改正された。平成19年に改正された学校教育法では、新たに「義務教育の目標」が規定された。また、小・中・高等学校等においては、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた（第30条第2項、第49条、第62条等）。

ウ　中央教育審議会答申（平成20年）

新しく明確にされた教育の基本理念を受けて、平成20年１月に中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」が出された。この答申では、知識基盤社会への移行や、グローバル化による国際競争の激化等、大きく社会構造が変化する中で、ますます「生きる力」が重要であるとしている。

また「生きる力」を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素は「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の三つであるとした。

エ　高等学校学習指導要領改訂（平成21年）

以上の法改正及び答申を受けて、平成20年には小・中学校の、平成21年には高等学校・特別支援学校の学習指導要領が改訂された。小・中学校においてはそれぞれ平成23・24年度から一斉実施、高等学校においては原則として平成25年度入学生から年次進行で実施されている。なお、総合的な学習の時間や数学、理科など一部の教科等では先行実施されている。

(2) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

今回の学習指導要領の改訂は、平成20年１月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に基づいている。この答申の中では、学習指導要領改訂の基本的な考え方として、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、

① 「生きる力」という理念の共有
② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
③ 思考力・判断力・表現力等の育成
④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

の６点を挙げており、その中でも、特に、②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要としている。

これらをまとめると、

◇ 大きく変化する社会に生きる中で必要とされる「生きる力」を育むため、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた教育をすること **【生きる力】**

◇ 「確かな学力」を身に付けるためには、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と、それらを活用して「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」をバランスよく行うこと **【習得と活用】**

◇ 「学習意欲」を高め、家庭学習も含めた「学習習慣の確立」を図ること **【学習に取り組む態度】**

などが主なポイントとして挙げられる。

２ 学習評価の在り方

平成22年３月に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下「報告」という。）がとりまとめられた。その中で、「学習評価の意義と学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性」について、次のように述べられている。

> ○ 学習評価は，児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるものである。学習指導要領は，各学校において編成される教育課程の基準として，すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり，指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し，学習評価は，児童生徒の学習状況を検証し，結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。
> ○ また，従前指導と評価の一体化が推進されてきたところであり，今後とも，各学校における学習評価は，学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け，学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である。

特に、「教育水準の維持向上を保障する」という観点で学習評価を見ることは重要であり、単に生徒の成績を付けるために学習評価があるのではないことに留意する必要がある。

(1) 学習評価の基本的な考え方

先ほど述べた「報告」を受けて、同年５月に、文部科学省初等中等教育局長通知「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知)」(以下「改善通知」という。）が出された。

「改善通知」では、「学習評価の改善に関する基本的な考え方」を次のように述べている。

> ○　学習評価を通じて,学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること，学校における教育活動を組織として改善することが重要であること。その上で，新しい学習指導要領の下における学習評価の改善を図っていくためには以下の基本的な考え方に沿って学習評価を行うことが必要であること。
>
> 【1】 きめの細かな指導の充実や児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るため，学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価する，目標に準拠した評価を引き続き着実に実施すること。
>
> 【2】 新しい学習指導要領の趣旨や改善事項等を学習評価において適切に反映すること。
>
> 【3】 学校や設置者の創意工夫を一層生かすこと。

また、「報告」においては、

> ○　学習状況を分析的に見る「評価の観点」については，成績付けのための評価だけでなく，指導の改善に生かす評価においても重要な役割。
>
> ○　そのため，今回，学習指導要領等で定める学力の3つの要素に合わせ，評価の観点を整理することとし，概ね，
>
> 【1】 基礎的・基本的な知識・技能は「知識・理解」「技能」において，
>
> 【2】 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等は「思考・判断・表現」において，
>
> 【3】 主体的に学習に取り組む態度は「関心・意欲・態度」において，
>
> それぞれ評価を行うことと整理。
>
> ○　各教科の評価の観点は上に示した観点を基本としつつ教科の特性に応じて設定。

としており、簡潔に言えば次の３点、

◇　観点別学習状況の評価の実施

◇　目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の実施

◇　指導と評価の一体化

の更なる充実が求められている。

なお、「報告」では、高等学校における学習評価の現状と課題として「(高等学校においては)現在の学習評価の考え方に基づく実践について小・中学校ほど十分な定着は見られない」と指摘し、高等学校においても、評価による指導の改善を図るとともに、評価を通じた教育の質の保障を図るため、観点別学習状況の評価を推進していくことが必要であるとしている。ただし、高等学校においては、各学校の生徒の特性、進路等が多様であることへの配慮も必要としている。

(2) 観点別評価

これまで述べてきたとおり、学力の三要素を適切に評価するために、原則として四つの観点で学習評価を行うことが求められている。

学力の三つの要素	学習評価の観点
○　基礎的・基本的な知識・技能	「知識・理解」 「技能」
○　知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	「思考・判断・表現」
○　主体的に学習に取り組む態度	「関心・意欲・態度」

ただし、上の四つの観点を基本としつつ教科の特性に応じて「各教科の評価の観点」をそれぞれ設定している。

これまで、学校においては「ペーパーテストの点数による評価」が中心で、「知識・理解」への偏重があり、更にはいわゆる「詰め込み型の学習」につながる面もあった。また、経済協力開発機構（OECD）が行う「生徒の学習到達度調査（PISA)」などの国際調査の結果から、日本の児童生徒には「読解力」「表現力」「知識の活用能力」「学習意欲」などの面で課題があると指摘された。これらの反省から、小・中学校においては「思考力・判断力」等のペーパーテストには現れにくい学力を適切に評価するための取組がなされ、観点別評価が着実に実施されている。一方、高等学校においては、指導要録に「観点別学習状況の評価」を記載することとはされておらず、観点別評価が小・中学校に比べると定着していない状況にある。

高等学校においても、ペーパーテストだけでなく、日頃から観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、学習活動の特質、評価の観点、場面などに応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが大切である。

(3) 目標に準拠した評価

以前、小・中学校では児童生徒の成績を集団の中における相対的な位置（順位）により評価する「集団に準拠した評価」（いわゆる相対評価）が行われていた。

平成10年の学習指導要領改訂にともなって学習評価の在り方が見直され、現在のような児童生徒一人一人の学習状況を学習指導要領の定める目標に対する実現状況によって評価する「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）に改められた。右の図１、図２にそれぞれのイメージを示す。

「集団に準拠した評価」においては、「どのような集団においても学業成績の分布はほぼ同じになる」という考え方が根底にある。この考えを基にして上位から何％は「評定：５」のように、順位による評定を行うことになる。しかし、実際には集団によって分布に違いがあり、また児童生徒一人一人の達成度を適切に評価する必要から、「目標に準拠した評価」に改められた。

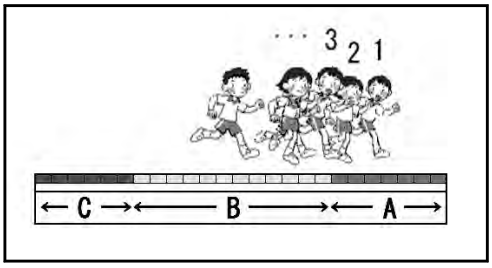


図１　集団に準拠した評価のイメージ

図２　目標に準拠した評価のイメージ

「目標に準拠した評価」においては、「児童生徒一人一人が、学習の目標をどの程度達成しているか」によって評価を行う。そのためには「学習の目標を達成した」とはどのような状況かを各教科の観点別に明確化しておく必要があり、その判断の拠り所とするものを**評価規準**という。評価規準は通常、学習の内容ごとに学習指導要領の定める学習の目標と照らし合わせて「おおむね満足できる状況」を示す。

例えば、理科の科目「物理基礎」の学習内容において、「イ　様々な力とその働き」のうちの「(ｲ)力のつり合い」の目標は、（学習指導要領より）次のように設定できる。

◇目標：　物体に働く力のつり合いを理解する。

この目標が、「達成された状況」とはどういう状況であるかを観点別に具体的に示したものが評価規準であり、例えば、

「関心・意欲・態度」：〇身の回りの物体における力のつり合いを考察しようとしている。
「思考・判断・表現」：〇物体に働く力がつり合う条件について考察している。
〇物体に働く力のつり合いから、未知の力を見いだしている。
「実験・観察の技能」：〇力の三要素に留意して、力をベクトルの矢印で表している。
「知識・理解」　　：〇力は、向きをもつベクトル量であることを理解している。
〇二つ以上の力について、向きを考えて合成している。

などとなる。これらの評価規準は、各学校において、生徒の実態等を考慮して学習指導計画とともに設定することになる。

なお、評価規準の語尾については、「～しているか。」（疑問形）や「～することができる。」（可能表現）などを用いる例が散見されるが、評価規準は「おおむね満足できる状況」を示すものであるから、原則として「～している。」などとするのが望ましい。ただし、「関心・意欲・態度」の観点のように、「～しようとしている」でおおむね満足できる場合や、教科や内容の特性によっては「～できる」という表現を用いる場合もあり得る。

授業時には、設定した評価規準に照らし合わせて、

Ａ：「十分満足できる」　Ｂ：「おおむね満足できる」　Ｃ：「努力を要する」

のいずれになるかを判断する。その際に、判断の基準とするものを「評価基準」と言うことがある。例えば、「10問の評価問題中、８問以上を正解した場合をＡ、６～７問正解した場合をＢ」としたり、「物体に働く力がつり合う条件について考察していればＢ、物体の運動状態と関連づけて働く力のつり合いを考察している場合をＡ」としたりするなどの基準が考えられる。いずれの場合でもＢに達しない状況をＣとする。

ここで、「評価規準」と「評価基準」という二つの語を使い分けているので注意したい。これらの違いは、前ページの図２において次のように例えると分かりやすい。

評価規準（目標を達成した状況を明確化したもの）　ものさしの種類
評価基準（評価を出す段階における判断の基準）　ものさしの目盛

以上のように、各単元（題材）毎に「観点別学習状況の評価」を行い、最終的にはそれを評定へと総括する。

なお、「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料　～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～」（国立教育政策研究所教育課程研究センター平成24年７月）には、各教科ごとの評価規準の設定例や総括の仕方等がまとめられているので、参考にするとよい。

(4) 指導と評価の一体化

既に述べたように、学習評価の目的は、単に生徒の成績を付けるためにあるのではなく、教育の質を保障する役割がある。とりわけ、学習評価の結果から、個に応じた指導を行ったり、学習指導の在り方を見直したりすること、つまり「指導と評価の一体化」が求められている。

学習評価を単に学習指導の結果としてとらえるのではなく、評価を通じて指導の改善を行ったり、組織的な見直しをしたりするなど、指導と評価を一体的に行うことが重要である。そのためには、「成績を付けるための評価」だけでなく「指導に生かす評価」を行い、それを学習指導に係るＰＤＣＡサイクルに組み込むことが大切である。具体的には、

① 「指導計画」を立案する際に「評価計画」を立てる。

② その際に、評価の観点のバランスに留意する。

③ また、総括の資料とする評価（成績を付けるための評価）だけでなく、「指導に生かす評価」を盛り込むよう留意する。

④ 評価の結果から、指導上の成果や課題を検証し、次の指導に生かす。

⑤ 個々の達成状況の把握から、達成度が不十分な生徒に対して指導の手立てを講じる。

などがポイントとなる。

これらの取組により、次のようなメリットがあると考えられる。

○ あらかじめ学習内容の指導計画とともに評価の観点を生徒に示すことにより、生徒にポイントを押さえた学習をさせるとともに、学習意欲の向上を図ることができる。

○ 指導計画とともに評価の観点を明確にすることにより、特定の観点に偏ることなく、バランスの取れた指導をすることができる。

○ ペーパーテスト、ノート、レポート、発問等の様々な評価方法の中から、評価の目的・場面等に応じて適切なものを選択することができる。

○ 個々の達成状況をこまめに確認することにより、きめ細かい指導をすることができる。

○ 評価が計画的・客観的になり、信頼性が高まるとともに、教育水準の保障に寄与する。

ここに挙げたもののほかにも、「指導と評価の一体化」によって、様々な効果を期待することができる。以下では、各教科における指導と評価の一体化の在り方と、実践事例を紹介する。

Ⅱ　家庭科における指導と評価

1　家庭科における指導と評価

(1) 共通教科「家庭」の目標

高等学校学習指導（平成 21 年改訂）の定めている、共通教科「家庭」の目標は以下のとおりである。

人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ,家族・家庭の意義,家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに,生活に必要な知識と技術を習得させ,男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。

この目標は､これまでの学習指導要領が定めていたものとほぼ同じであるが､｢生涯にわたる｣発達の視点及び「主体的に」生活を創造する視点が盛り込まれた。

(2) 共通教科「家庭」における観点別評価について

今回の学習指導要領改訂の趣旨を具現化するために、特に以下の点に留意した指導の充実が求められている。

①理論とともに、実験･実習を通して生活における実践力を身に付ける。
②「何が問題なのか｣、「自分はどうするのか｣、「社会の一員としてどのように行動したらよいか」などについて考え、実践につなげるとともに、問題解決能力、意思決定能力を身に付ける。
③言語活動の充実を図り、思考力・判断力・表現力を身に付ける。

そのためには、観点別評価を行い、各分野における実施状況をみると同時に、教師の指導計画・指導方法等が適切であったかを反省し、学習指導の改善に生かすことにつなげる必要がある。評価の場面や方法を工夫したり、生徒の学習意欲を高める評価を工夫したりするなど、簡便で効果的な評価方法を研究することが重要である。

共通教科「家庭」の観点別評価は次の４観点で行うこととされている。

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
家庭や地域の生活について関心をもち,その充実向上を目指して主体的に取り組むとともに,実践的な態度を身に付けている。	家庭や地域の生活について課題を見いだし,その解決を目指して思考を深め,適切に判断し工夫し創造する能力を身に付けている。	家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的・基本的な技術を身に付けている。	家庭生活の意義や役割を理解し,家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的･基本的な知識を身に付けている。

ア「関心・意欲・態度」

この観点は、「家庭や地域の生活について関心をもち,その充実向上を目指して主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身に付ける」ことを評価する。そのためには、生徒が主体的に取り組むことができる題材の設定や指導方法を工夫するとともに、学習したことを実生活で活用しようとする態度をワークシートやレポート等を通して効率的に評価することが必要である。

イ「思考・判断・表現」

従前の「思考・判断」から観点の趣旨を改めた。この観点は、課題を発見する力、課題解決に向けて工夫したり創造したりする力、分かりやすい資料を作成したり発表したりするといった表現力について評価する。そのためには、言語活動を一層重視して指導することが必要である。

ウ「技能」

この観点は、衣食住、保育、福祉、消費生活などの各分野において身に付けた技術を評価したり、各分野に関する情報を調査及び収集・整理したりする力について評価する。そのためには、客観性の高い評価ができるような工夫が必要である。

エ「知識・理解」

この観点は、衣食住、保育、福祉、消費生活などの各分野において必要な基礎的・基本的な事項を理解し、知識を身に付けているかを評価する。

(3) 基本的な評価の進め方

① 単元または題材の目標を設定する。

② 評価規準を設定する。

③ 評価規準を「指導と評価の計画」に位置付ける。

④ 総括の資料とする評価だけでなく、指導に生かす評価も盛り込む。

⑤ 観点ごとに総括する。

(4) 指導と評価において特に工夫改善が求められている事項

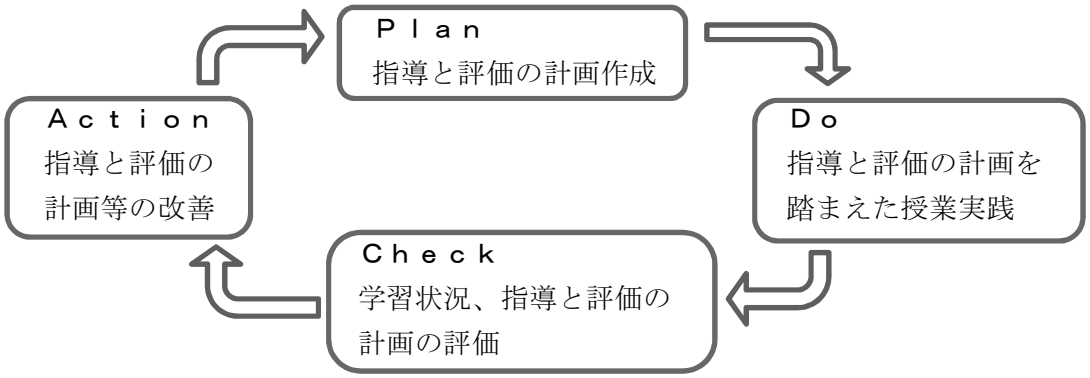
ア 評価方法と評価時期

評価の観点や評価規準、評価の場面や生徒の発達段階に応じて、観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択する。加えて、生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を工夫する。なお、ペーパーテストは、客観性が高い評価方法であるが、偏重しないように留意する。

イ 指導と評価の一体化

ねらいを達成するための指導を充実するためには、指導計画とともに評価計画を作成し、学習状況を適切に評価するとともに、教師が指導の過程や評価方法を見直して指導の工夫改善を行う必要がある。

各学校においては、指導計画と評価計画を作成（Ｐｌａｎ）し、この指導と評価の計画を踏まえた授業を実施（Ｄｏ）し、生徒の学習状況の評価とともに、それを踏まえた指導と評価の計画の評価（Ｃｈｅｃｋ）を行い、それらの評価を踏まえて授業の充実や次の指導と評価の計画の改善（Ａｃｔｉｏｎ）を行うことが大切である。学習指導と学習評価にかかるＰＤＣＡサイクルを確立し、学習指導と学習評価の一体的な取組を通じて、生徒一人一人に学習指導要領に示された指導内容を定着させることが求められている。



ウ 評価の総括

題材または単元によって重視する観点や評価規準があれば、評価計画作成の段階から評価回数を多くしたり、重み付けをしたりする。また、観点の趣旨にふさわしい評価方法を適切に選択し組み合わせるなどにより多元的に評価することが必要である。

〈引用・参考文献〉

『高等学校学習指導要領解説　家庭編』文部科学省　　平成 22 年５月

『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校　共通教科「家庭」）
～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』
国立教育施策研究所教育課程センター　平成 24 年７月

『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校　専門教科「家庭」）
～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』
国立教育施策研究所教育課程センター　平成 25 年３月

望月昌代「新時代の家庭に関する学科の活性化に向けて（その８）」『産業と教育２月号』（ｐ26～29）
公益財団法人 産業教育振興中央会　平成 25 年

望月昌代「高等学校家庭科の改善に向けて（24）」『中等教育資料９月号』（ｐ64～65）文部科学省
学事出版（株）　平成 24 年

望月昌代「高等学校家庭科の改善に向けて（25）」『中等教育資料 12 月号』（ｐ68～69）文部科学省
学事出版（株）　平成 24 年

望月昌代「高等学校家庭科の改善に向けて（26）」『中等教育資料１月号』（ｐ64～65）文部科学省
学事出版（株）　平成 25 年

筒井恭子編著『中学校技術・家庭科　家庭分野の授業づくりと評価』　明治図書出版（株）　平成 24 年４月

２　指導と評価の一体化を図った実践例

本調査研究では、共通教科における科目「家庭基礎」、「家庭総合」と専門教科における科目「フードデザイン」において指導と評価の一体化に関する実践を行った。各事例の概要を以下に示す。

事例１　**科目「家庭基礎」における指導と評価の工夫**

～　単元「経済生活をつくる」～

本事例では、科目「家庭基礎」の単元「経済生活をつくる」を取り上げた。ここでは、消費経済に関する事柄を単なる知識として生徒に理解させるだけでは不十分である。消費者問題を自分のこととして学び、実生活に役立てることを目指した指導と評価を試みた。

事例２　**科目「家庭総合」における指導と評価の工夫**

～　単元「高齢者の生活と福祉」～

本事例では、科目「家庭総合」の単元「高齢者の生活と福祉」を取り上げた。その中の「高齢者の心身の特徴と生活」において、さまざまな学習活動を用いて、生徒同士が学び合い、高齢期や高齢者への理解を深めることを目指した指導と評価を試みた。

事例３　**科目「フードデザイン」における指導と評価の工夫**

～　単元「食事の意義と役割」～

本事例では、科目「フードデザイン」の単元「食事の意義と役割」を取り上げた。その中の「食を取り巻く現状」と「家庭や地域における食育推進活動」において、現代の食生活の現状と課題を自分や家族の食生活と関連付けて考えさせた。その上で、次世代の子どもたちに「食」の大切さを伝えていく能力と態度を育むことを目指した指導と評価を試みた。

事例１　科目「家庭基礎」における指導と評価の工夫

～　単元「経済生活をつくる」　～

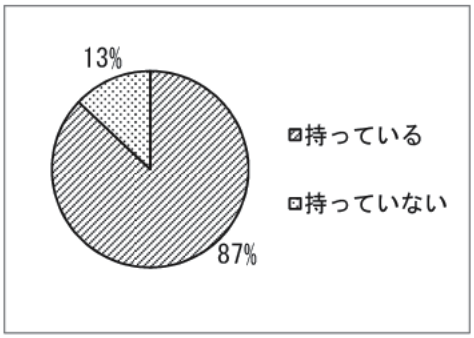
１　生徒の実態把握

これから授業で扱う内容について、生徒たちの基礎的な知識や経験及び家庭科の授業への関心についてアンケート調査を行い、その実態を把握した。対象は、普通科第１学年の生徒 159 名である。

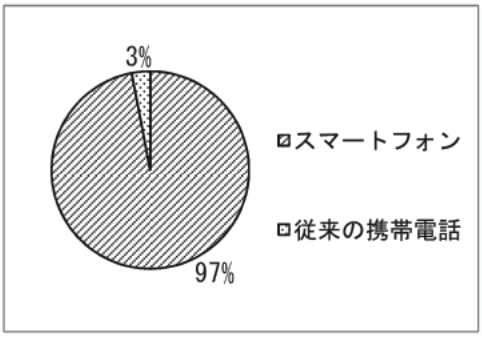
質問１「**携帯電話の所持**」については、87％の生徒が「**持っている**」と回答した【図１】。所持している「**携帯電話の種類**」としては、97％が「**スマートフォン**」と回答した【図２】。

質問２「**携帯電話でのトラブルなどの経験**」については、57％の生徒が「**トラブルなし**」と回答したが、34％の生徒が「**チェーンメールがまわってきた**」、18％の生徒が「**SNS やゲームサイトで知り合った人とやりとりしたことがある**」と回答した【図３】。

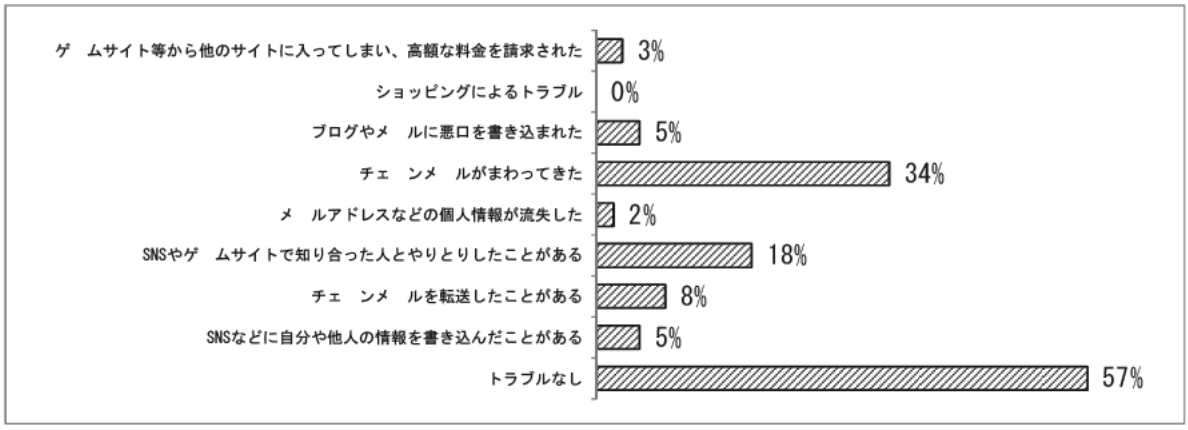
質問３「**商品を購入するときに考慮すること**」については、「**価格**」が 84％で最も多く、「**本当に必要かどうか**」が 78％で価格を重視しながらも購入に慎重な姿勢がうかがえた【図４】。



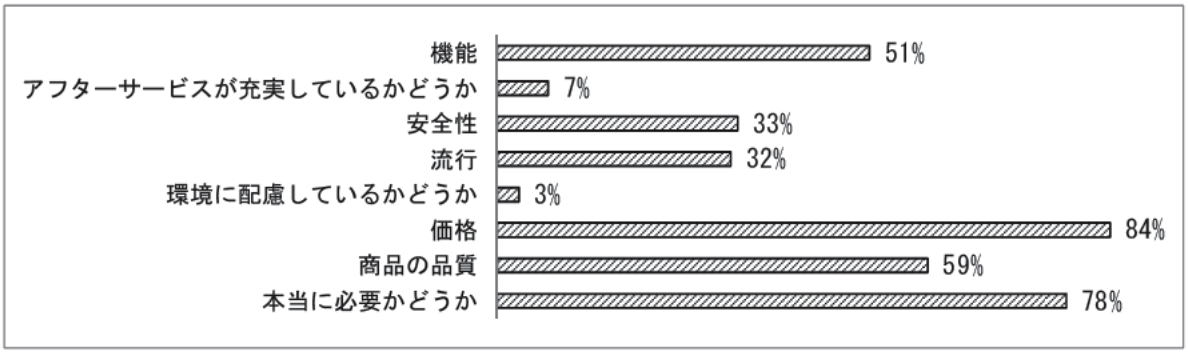
【図１】携帯電話の所持



【図２】携帯電話の種類



【図３】携帯電話でのトラブルなどの経験



【図４】商品を購入するときに考慮すること（複数回答）

２　本事例の概要

科目「家庭基礎」においては、「人の一生と家族・家庭及び福祉，衣食住，消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ，家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに，生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。」ことが目標となっている。

その中の「消費生活と生涯を見通した経済の計画」では、家計と経済の仕組み及び経済計画の重要性、現代の経済社会や消費生活の課題をおさえながら、消費者としての意思決定の重要性を認識し、消費者の権利と責任についてしっかり理解することが必要である。

そこで、生活の中で活用する視点を明確にした実践的・体験的な学習活動を意図的・計画的に取り入れ、その評価を適切な場面で生徒の実態に応じた判断基準をもって行った。これらを通して、授業内容を身近な事柄として捉えやすくし、他者の意見を踏まえながら自らの考えを深められるようにした。そして、評価に基づく個に応じた指導を行うことにより、学んだことをこれからの生活に役立てようとする態度を育むことを目指した。

３　授業実践　単元名：経済生活をつくる

(1)　単元の目標　　使用教科書（「家庭基礎　豊かな生活をともにつくる」大修館書店）

消費生活の現状と課題や消費者の権利と責任について理解させ、適切な意思決定に基づいて行動できるようにするとともに、生涯を見通した生活における経済の管理や計画について考えることができるようにする。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
・消費者問題に関心をもち、実態を知ろうとしている。 ・どのような消費行動をとるべきか考えようとしている。	・消費者トラブルに遭う原因や、トラブルに遭わないためにどう行動すべきか考えている。 ・消費行動に関する意思決定を行い、意思決定の理由をまとめたり、発表したりしている。	・批判的思考により、情報を整理している。 ・ライフステージに応じた経済計画を立てることができる。	・クレジットカードの仕組みや消費者信用の概要と仕組み、利用上の注意点を理解している。 ・消費者を救済する制度や法律について理解している。 ・ライフステージに応じた経済計画の必要性を理解している。

(3) 単元の指導計画と評価計画（10 時間）

時間	学習内容 ねらい	評価				
		関	思	技	知	評価規準
1	ケータイの使い方、大丈夫？ ・携帯電話によるネット上での契約トラブルを踏まえ、トラブルに遭わないためにどのように行動したらよいかを考える。	○	○			・高額な請求にならないためには、どのような行動をとればよいか考えている。 ・インターネットを利用するときの留意点を考えようとしている。

2	これってアヤシクない？ ・インターネットショッピング等における留意点とトラブルへの対応法を知る。また、トラブルを未然に防ぐ行動について考える。	○	○			・なぜ、チケット詐欺に遭ったのか原因を考えまとめている。 ・チケット詐欺被害のロールプレイングを通して、これからの自分の行動について考えようとしている。
3	契約って何？ ・消費者を救済する制度や法律を理解する。				○	・消費者を救済する制度や法律を理解している。
4 ・ 5	クレジットの仕組みと注意点 ・キャッシュレス化の実態を知るとともに、その陰にある危険性と注意点を理解する。	○			○	・キャッシュレス化の実態について知ろうとしている。 ・消費者信用には多重債務に陥る危険性があることやそうならないための注意点を理解している。
6 ・ 7	カレーを作るための買い物をしよう ・現代の消費生活の特徴、消費者の価値観およびそれを取り巻く社会環境について知る。 ・食の選択と環境との関連を学び、消費者として取り組むべき課題について考える。	○	○ ○			・限られた予算の中で、どのような食品を選択するか考えている。 ・食品の選択について、考えをまとめたり発表したりしている。 ・今後食品を購入するときに、どのようなことに気を付けるか考えている。
8	消費者の権利と責任について調べよう ・消費者の権利と責任について理解する。 ・クリティカル・シンキングにより商品の情報を整理する。			○	○	・「消費者の８つの権利と５つの責任」について理解している。 ・クリティカル・シンキングにより商品の情報を整理することができる。
9	家庭の経済生活をみつめよう ・家計の収入と支出の種類を理解する。 ・家計と社会とのかかわりを考える。	○			○	・家計の収入の種類と支出の種類を理解している。 ・高校３年間にかかる費用を計算し、家計と社会との関わりを考えようとしている。
10	人生のマネープラン ・ライフスタイルとライフステージを考慮した経済計画の必要性を理解し、個に応じた経済計画を立てる。 ・消費者問題に関心をもつ。	○		○	○	・ライフスタイルとライフステージを考慮した経済計画の必要性を理解している。 ・自分や家族の望むライフスタイルを実現するためにライフステージに応じた経済計画を立てることができる。 ・消費者問題に関心をもち、意欲的に課題に取り組んでいる。

(4) 授業の実際

視聴覚教材を利用してイメージを描きやすくしたり、疑似体験をしたりするなどの場面設定を行った１・２時間目及び６～８時間目を報告する。概要は以下のとおりである。

ア　１時間目の授業　「ケータイの使い方、大丈夫？」

アンケートの結果から、携帯電話を９割近くの生徒が所持し、インターネットにすぐ接続できる環境をもつことが分かった。また、栃木県消費生活センターによると若者（19 歳以下）の消費者トラブルによる相談件数の第１位は、放送・コンテンツ等（電波や衛星放送を利用した放送サービス及び電話回線やインターネットを使って情報を得るサービス）である。本校の生徒も思わぬ落とし穴に足を踏み入れる可能性は高い。消費経済分野の導入として、生徒にとって身近な問題であるインターネットによるトラブルを取り上げることとした。

ねらい　携帯電話によるネット上での契約トラブルを踏まえ、トラブルに遭わないためにどのように行動したらよいかを考える。

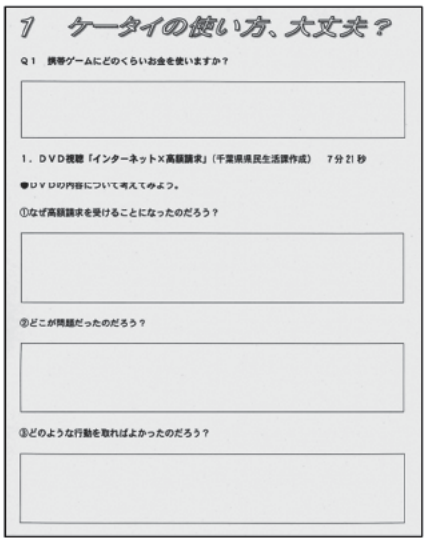
段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○事前アンケートの結果を示す。 ○本時の学習課題を確認する。	○アンケート結果から、携帯電話に関するトラブルが身近なものであることを知らせる。
展開	○DVD 視聴「インターネット×高額請求」（千葉県県民生活課作成）7 分 20 秒 ①なぜ高額になってしまったのか？ ②高額請求にならないためにはどうすればよいか。 【ペアワーク】 ○個人情報の書き込みについて ○フィルタリング機能について	○机間指導をして、個人の意見がまとまったところで、周りの人と意見交換するように指示する。 ○高額請求になった原因はどこにあるのかを考えるよう促す。 **評価規準①**　高額な請求にならないために、どのような行動をとればよいかを考えている。［思考・判断・表現］（ワークシート） ○個人情報の書き込み等について具体例を挙げながら、自分だったらどう行動するか考えるように促す。 **評価規準②**　インターネットを利用するときの留意点を考えようとしている。［関心・意欲・態度］（ワークシート）
まとめ	○本時の学習内容をまとめる。	

(ｱ) 指導と評価の様子

a　展開①

携帯電話の使い方を振り返りながら、インターネットに関するトラブルを踏まえ、トラブルの一つである高額請求にならないための行動について考えた。そのために、DVD「インターネット×高額請求」を視聴した。その後、ワークシートに自分の考えを記入し、その後ペアワークで意見交換を行った【図５】。

評価規準①
高額な請求にならないために、どのような行動をとればよいかを考えている。
［思考・判断･表現］（ワークシート）


１　ケータイの使い方、大丈夫？

Q１　携帯ゲームにどのくらいお金を使いますか？

１．ＤＶＤ視聴「インターネット×高額請求」（千葉県県民生活課作成）　７分２１秒

●ＤＶＤの内容について考えてみよう。

①なぜ高額請求を受けることになったのだろう？

②どこが問題だったのだろう？

③どのような行動を取ればよかったのだろう？

【図５】展開①　ワークシート

〈生徒の様子〉

生徒は、高額な請求となった原因を考えることはできていた。

DVDを視聴したことにより、生徒は自分のことに置き換えて、問題を捉えることができた。そのため、高額な請求となった原因についてはワークシートに考えを記入することができた。そこで、生徒の意見を引き出しながら、多くの生徒が利用している無料ゲームアプリの仕組みについて補足説明を加えた。その後、高額な請求にならないための行動について考えるよう指示した。

〈個別の支援〉

自分の意見がまとまらない生徒には、周囲の友達の意見を聞いてみるよう促した。

高額な請求にならないための行動についての考えを、ワークシートの記述で評価した。全員自分なりの行動を記入することができていたため、B（おおむね満足できる）と判断した。

b　展開②

懸賞の応募や各種サービスへの登録の際、個人情報を書き込む。そのことについてどう思うかワークシートに記入させた【図６】。また、その登録により新たな広告メールが届く、出会い系サイトにつながるなどの不当請求やワンクリック請求につながる危険性があることを知らせた。その上で、フィルタリング機能は中学生や高校生に必要かどうか、またその理由について考えさせた。

評価規準②

インターネットを利用するときの留意点を考えようとしている。

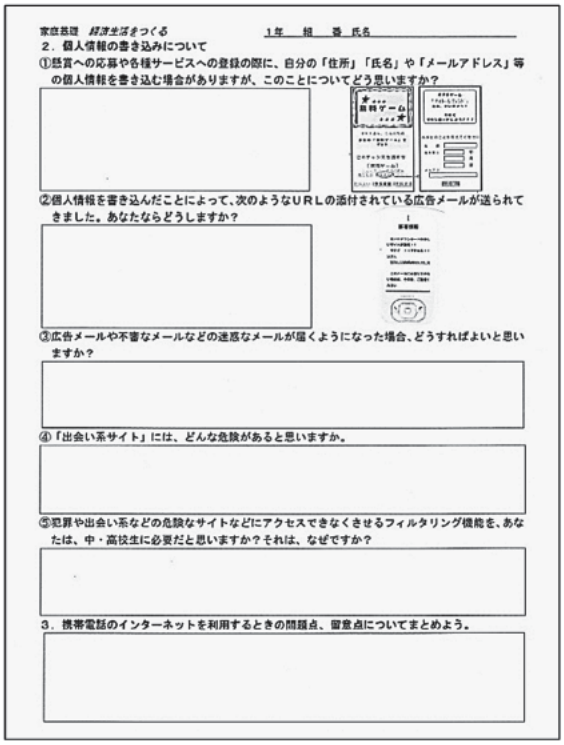
［関心・意欲・態度］（ワークシート）

個人情報登録による危険性を伝えた。

〈生徒の様子〉

情報の書き込みについての、自分の考えを記入することができた。また、フィルタリング機能の必要性についても考えることができた。

実践校においては、インターネットを利用するときの留意点について、自分の考えをまとめることができたものをB（おおむね満足）と判断した。これからの自身の生活の中で生かそうとする視点が明記されているものをA（十分満足できる）と判断した。


家庭基礎　*経済生活をつくる*　　1年　組　番　氏名

2．個人情報の書き込みについて

①懸賞への応募や各種サービスへの登録の際に、自分の「住所」「氏名」や「メールアドレス」等の個人情報を書き込む場合がありますが、このことについてどう思いますか？

②個人情報を書き込んだことによって、次のようなＵＲＬの添付されている広告メールが送られてきました。あなたならどうしますか？

③広告メールや不審なメールなどの迷惑なメールが届くようになった場合、どうすればよいと思いますか？

④「出会い系サイト」には、どんな危険があると思いますか。

⑤犯罪や出会い系などの危険なサイトなどにアクセスできなくさせるフィルタリング機能を、あなたは、中・高校生に必要だと思いますか？それは、なぜですか？

3．携帯電話のインターネットを利用するときの問題点、留意点についてまとめよう。

【図６】展開②　ワークシート

〖利用上の留意点に関する生徒の記述〗

・自分の身を守るためにフィルタリング機能を活用することは賢明である。　（Bと判断）

・サイトが有害かどうかの判断において、中学生はまだ未熟なためフィルタリングが有効だ。でも、高校生は自分で判断する力を付けることも大切なので、フィルタリングは必要ない。個人情報の管理をしっかりと行い、自覚と責任をもってインターネットを利用することが大切だ。　（Bと判断）

・スマートフォンの使い方や個人情報の管理について特に注意をしていなかった。今回の授業で多くの情報を知り、自分なりに考えることができたことは大変有効なことだった。これからは、自分や他の人の権利を侵さないように、十分注意をしながら使用していきたい。

（Ａと判断）

(ｲ) 成果と課題

生徒にとって身近な携帯電話に関するDVDは、興味・関心を高めるために有効だった。そのため、その後の考察をスムーズに行うことができた。

イ　２時間目の授業　「これってアヤシクない？」

２時間目は、インターネットショッピングのトラブルについて取り上げた。トラブルの事例については、前時の様子を踏まえてDVDを視聴することとした。

ねらい　インターネットショッピングや個人間取引における留意点とトラブルに遭ってしまった時の対応法を知る。また、トラブルを未然に防ぐ行動について考える。

段階	学習活動	指導上の留意点 評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習課題を確認する。	
展開	○DVD視聴「ネットショッピングの落とし穴」（消費者庁作成）7分03秒 ○「コンサートチケットの購入」 携帯電話の掲示板を利用して、コンサートチケットを購入する高校生の事例 ○代表の２グループが前に出て演じる。 【ロールプレイング】	○ネットショッピングでは、申し込みボタンをクリックし承諾の通知が来た時点で契約が成立し、消費者の都合で一方的にやめることはできないことを知らせる。 ○４人１グループで、配役を決めさせる。 ○台本には、コンサートチケットのアーティスト名を加えるなど自由にアレンジをしてもよいことを知らせる。 **評価規準③**　なぜ、チケット詐欺に遭ったのか原因を考え、まとめている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート） **評価規準④**　チケット詐欺被害のロールプレイングを通して、これからの自分の行動について考えようとしている。 ［関心・意欲・態度］（観察、表現）
まとめ	○本時の学習内容のまとめをする。	○最寄りの消費生活センターの連絡先を知らせる。

(ｱ) 指導と評価の様子

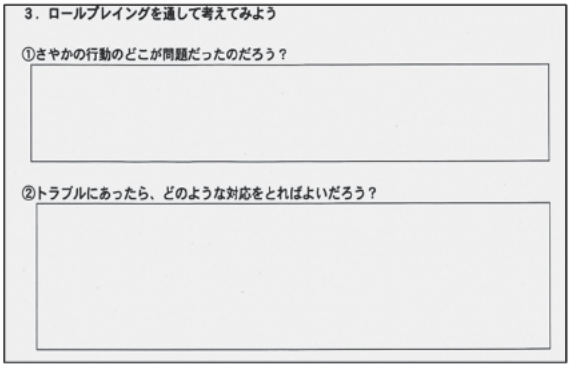
ａ　展開③

視聴したDVDと類似した内容の「チケット詐欺」の事例を用いて、４人グループでロールプレイングを行った。その後、教師が準備した台本の内容と視聴したDVDを振り返りながら、個々の考えをワークシートに記入させた。

評価規準③
なぜ、チケット詐欺に遭ったのか原因を考え、まとめている。
［思考・判断・表現］（ワークシート）

⇩

実践校においては、ワークシートに詐欺被害に遭った原因として、「相手の連絡先を確認しておかなかったこと」、「本人が冷静さに欠けていたこと」、「支払方法の確認が甘かったこと」などの意見を書き込むことができた生徒をＢ（おおむね満足できる）と判断した【図７】。記入できていない生徒には、DVD の内容を思い出して考え記入するように助言した。


3．ロールプレイングを通して考えてみよう

①さやかの行動のどこが問題だったのだろう？

②トラブルにあったら、どのような対応をとればよいだろう？

【図７】展開③、④　ワークシート

ｂ　展開④

グループごとに意欲的にロールプレイングに取り組めた。台本に、**展開③**で考えた問題となる行動やトラブルに遭ってしまった時の対応を入れてアレンジするように伝えた。

評価規準④

チケット詐欺被害のロールプレイングを通して、これからの自分の行動について考えようとしている。　［関心・意欲・態度］（観察、表現）

⇩

時間の都合もあり、よくできている二つのグループを代表とし前に出て演じてもらった。この二つのグループの台本には、**展開③**で考えた内容が入れられ、さらにこれから詐欺に遭わないためにどのような行動をとるとよいか、具体例をいくつも入れたアレンジがしてあった。このため、Ａ（十分満足できる）と判断した。これ以外のグループは、**展開③**で考えた内容を入れたアレンジができていた。これをＢ（おおむね満足できる）と判断した。

⇩

〈生徒の様子〉

代表の発表者たちはいずれも恥ずかしがってしまい棒読みで台本を読むだけに終わり、演じるところまで到達することができなかった。

このことから、前に出て発表することに慣れていない生徒の実態が浮かび上がった。

(ｲ) 成果と課題

DVD の視聴は、本時のねらいを生徒に具体的に捉えさせるために有効だった。

ロールプレイングの発表を取り入れたが、発表することに慣れていない生徒の実態が浮かび上がった。また、事前練習時間も短かったため、もう少し時間が必要であったと感じた。

（ロールプレイングを発表している生徒）

ウ　６・７時間目の授業　「カレーライスを作るための買い物をしよう」

６・７時間目は実践的・体験的な活動として、グループワークによる買い物疑似体験を取り入れた。また、２時間目の授業により課題となって浮き上がった発表を取り入れることとした。

ねらい　・現代の消費生活の特徴、消費者の価値観およびそれを取り巻く社会環境について知る。
・食の選択と環境との関連を学び、消費者として取り組むべき課題について考える。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］(評価方法)
導入	○チョコレートを選ぶ基準について考える。 価格・味・見た目？	○チョコレートのパッケージを提示する。 ○普段の自分の消費行動を振り返らせる。

展開	○グループごとにカレーライスを作る材料を買う。 予算は1,300 円。家族５人分の材料を買う。 牛肉（国産・外国産・国産ひき肉）・豚肉（国産・外国産・国産ひき肉）・鶏肉（国産）・じゃがいも・にんじん・玉ねぎ・カレールウ・シーフードミックス・にんにく・しょうが ○グループごとに選択した材料と選択理由、費用を発表する。 ○同じ献立でも、考え方の違いによって選択する食品も異なることに気付く。 ○自分たちの選んだ材料から１品選んでフードマイレージと CO_2排出量を計算する。 ○フェアトレードについて、前時のチョコレート選びからカカオ農園で働く子どもの現実を伝える。　【グループワーク】	○カレーライスを作るための買い物をすることを告げる。材料の購入にあたってはグループで話し合って決めることを知らせる。 ○材料を準備（プリントアウトしたもの）する。 ○ワークシートに選択の理由を書かせる。 **評価規準⑤**　限られた予算の中で、どのような食品を選択するか、考えている。 ［関心・意欲・態度］（観察） ○ワークシートに書く材料名は、産地や重量も書き写すように指示する。 **評価規準⑥**　食品の選択について、考えをまとめたり発表したりしている。 ［思考・判断・表現］（観察、発表） ○日本の食料自給率は 40%であることを告げ、地産地消が環境にも負荷を与えないことを知らせる。 ○フェアトレードチョコレートを提示する。 **評価規準⑦**　今後食品を購入するときに、どのようなことに気を付けるか考えている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート）
まとめ	○本時の学習を振り返る。	

⑺　指導と評価の様子

a　展開⑤

６時間目に、買い物疑似体験を３～４人のグループワークで行った。生徒にとって身近な食べ物である「カレーライス」を作るための材料を購入することにした。グループごとにオリジナルカレーを５食分作ることとし、そのための材料を予算 1,300 円以内で購入することにした。具体的な体験となるように、産地名、食品重量が書き込まれた食材カードをグループごとに準備した。

評価規準⑤
限られた予算の中で、どのような食品を選択するか、考えている。
［関心・意欲・態度］（ワークシート、観察）

⇩

まず、ワークシートに自分の考えを記入させた。その後グループとなり自分の意見をもとに話し合わせた。その際、一人の意見だけで決めてしまわないように伝えた。

⇩

〈生徒の様子〉
それぞれの意見を出し合いながら、自分たちの作りたいカレーにテーマをもたせ、材料及び内容を検討するグループも出ていた。

実践校においては、ワークシートに自分の考えが記入できているかとグループでの話合いの観察（発言の様子）で評価した。ワークシートに自分の考えを記入した上で、話合いに参加しているものをＢ（おおむね満足できる）と判断した。さらに、ワークシートに自分の考えが記入してあり、グループによる話合いの中でカレーにテーマをもたせようと意欲的に発言している生徒が数名いた。この生徒をＡ（十分満足できる）と判断した。

〖カレーのテーマ例〗

・「高級カレー」… 奮発して黒毛和牛を入れる。野菜は単品で使い切る量だけを買う。
・「安くておいしいカレー」…お肉、野菜たっぷりのボリュームカレーにする。肉は豚肉を使用。野菜は袋に３～４個入ったものを購入する。
・「風邪予防カレー」・・・風邪予防のため、しょうが、にんにくをたっぷり使用する。

（どの食材にするか話し合う様子）

ｂ　展開⑥

評価規準⑥

食品の選択について、考えをまとめたり発表したりしている。

［思考・判断・表現］（観察、発表）

⇩

各グループにおいて、どのような意図をもって食品を選択したかをそれぞれに発表させた。ここでは、２時間目の「これってアヤシクない？」の授業の中で、発表慣れしていない生徒の実態が明らかになったため、グループごとに前に出て発表する形式をとった。発表内容は、テーマ、選択した食材、その選択の理由、費用とした。評価は、発表内容（テーマ、食材の選択理由、費用）及び発表態度（声量）の四つを観点とし、各２点で８点満点とした。実践校においては、合計６点以上をＡ、３点以上～５点以下をＢ、２点以下をＣと判断した**【図８】**。

	テーマ	選択理由	費用	発表態度（声量）	得点	評価
１班	○	○	×	○	6	A
２班	○	○	○	△	7	A
３班	×	△	○	△	4	B
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

【図８】評価表（○２点　△１点　×０点）

（生徒全員が発表を行う）

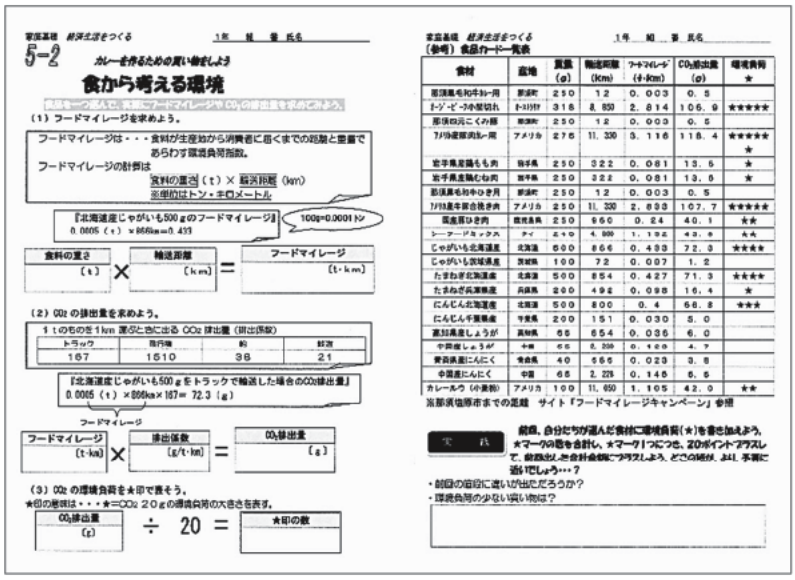
〖生徒が選んだ食材の傾向〗

・肉については国産、外国産のこだわりがなく、量が多い物を選んでいた。
・じゃがいも、にんじん、玉ねぎなどの野菜は、袋入り（３～４個入り）を選ぶ班が多かった。しかし、単品で購入し、無駄をなくそうと考えた班もあった。
・にんにくやしょうがなどの香味野菜を選択した班は少数であった。

c　展開⑦

７時間目は、６時間目に選んだ食材のフードマイレージとCO_2排出量、及びCO_2の環境負荷を★印にして表す作業を行った。生徒に、〔参考〕食品カード一覧を配布し、確認させた。また、各自１品を選び出し、実際に自分でフードマイレージを計算させ、確認もさせた【図９】。

ここで、６時間目の導入で発問したチョコレートを選ぶ基準を思い出させた。『チョコレートの真実』（キャロル・オフ著）を紹介し、本授業の導入に用いたチョコレートのパッケージを見せ、フェアトレードマークのついた商品を探させた。マークがついていなくても、企業独自の取り組みで発展途上国を支援するものもあることを補足説明した。


家庭基礎　経済生活をつくる　1年　組　番　氏名

5-2　カレーを作るための買い物をしよう

食から考える環境

（1）フードマイレージを求めよう。

フードマイレージは・・・食料が生産地から消費者に届くまでの距離と重量であらわす環境負荷指数。

フードマイレージの計算は

食料の重さ（t）× 輸送距離（km）

※単位はトン・キロメートル

『北海道産じゃがいも500ｇのフードマイレージ』

0.0005（t）×866km=0.433

100g=0.0001トン

食料の重さ（t）× 輸送距離（km）= フードマイレージ（t・km）

（2）CO_2の排出量を求めよう。

１tのものを1km運ぶときに出るCO_2排出量（排出係数）

トラック	飛行機	船	鉄道
167	1510	36	21

『北海道産じゃがいも500ｇをトラックで輸送した場合のCO_2排出量』

0.0005（t）×866km×167= 72.3（g）

フードマイレージ（t・km）× 排出係数（g/t・km）= CO_2排出量（g）

（3）CO_2の環境負荷を★印で表そう。

★印の数は・・・★=CO_2 20ｇの環境負荷の大きさを表す。

CO_2排出量（g）÷ 20 = ★印の数

家庭基礎　経済生活をつくる　1年　組　番　氏名

（参考）食品カード一覧表

食材	産地	重量（g）	輸送距離（km）	フードマイレージ（t・km）	CO_2排出量（g）	環境負荷★
那須豚もも肉キャベツ用	栃木県	250	12	0.003	0.5	
ローズビーフ小間切れ	栃木県	318	8,850	2.814	106.9	★★★★★
那須ロゼにくみ豚	栃木県	250	12	0.003	0.5	
アメリカ産豚肉カレー用	アメリカ	275	11,330	3.116	118.4	★★★★★★
岩手県産鶏もも肉	岩手県	250	322	0.081	13.5	★
岩手県産鶏むね肉	岩手県	250	322	0.081	13.5	★
那須鶏ささみ中ひき肉	栃木県	250	12	0.003	0.5	
アメリカ産牛肉合挽き肉	アメリカ	250	11,330	2.833	107.7	★★★★★
霞産豚ひき肉	霞浦市	250	960	0.24	40.1	★★
シーフードミックス	タイ	240	4,500	1.152	43.8	★★
じゃがいも北海道産	北海道	600	866	0.433	72.3	★★★★
じゃがいも茨城県産	茨城県	100	72	0.007	1.2	
たまねぎ北海道産	北海道	500	854	0.427	71.3	★★★★
たまねぎ兵庫県産	兵庫県	200	492	0.098	16.4	★
にんじん北海道産	北海道	500	800	0.4	66.8	★★★
にんじん千葉県産	千葉県	200	151	0.030	5.0	
高知県産しょうが	高知県	65	654	0.036	6.0	
中国産しょうが	中国	65	8,200	0.533	4.7	
愛媛県産にんにく	愛媛県	40	565	0.023	3.8	
中国産にんにく	中国	65	2,275	0.148	6.5	
カレールウ（小麦粉）	アメリカ	100	11,650	1.165	42.0	★★

※那須塩原市までの距離　サイト『フードマイレージキャンペーン』参照

実践　前回、自分たちが選んだ食材に環境負荷（★）を書き加えよう。★マークの数を合計し、★マーク1つにつき、20ポイントプラスして、前回出した合計点数にプラスしよう。どこの産地が、より、多くの点を出せたでしょう・・・？

・前回の産地に近いのは出せただろうか？

・環境負荷の少ない食品は？

【図９】展開⑦　ワークシート

評価規準⑦

今後食品を購入するときに、どのようなことに気を付けるか考えている。

［思考・判断・表現］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

生徒たちは、フードマイレージの計算を通して、食品が店頭に並ぶまでに環境に負荷がかかることを実感した。また、日本の食料自給率の低さも確認した。

そこで、環境負荷の少ない食生活は、「地産地消」であること、そしてそれは日本の農業を守ることにもつながることを説明した。

さらに、『チョコレートの真実』（キャロル・オフ著）の話を参考に、今後消費者として、どのような消費行動をとるのかそれぞれ考えをまとめるように指示した。

生徒の意見としては、「これまでは見た目や価格を見て購入していたが、これからは生産地や原材料も見て購入するようにしたい。また、少しでも環境に良いものを購入したい。」といった意見が多く出た。実践校においては、これからの消費行動について気を付けることが具体的に二つ以上記入されているものをＡと判断した。一つのものをＢと判断した。

（イ）成果と課題

今回の授業では、発表に際して評価表を用いること、評価には四つの観点〈テーマ、食材の選択理由、費用、発表態度（声量）〉があることを事前に説明した。これにより、前回の発表と比べて、生徒も前向きに取り組む態度を示した。次の機会には、生徒にも同じ評価表を利用させて相互評価を行わせたい。

（フードマイレージを計算する様子）

エ　８時間目の授業　「消費者の権利と責任について調べよう」

消費者としての権利と責任を具体的に意識させるために、「消費者の５つの責任」の中の一つとなっているクリティカル・シンキング（批判的思考）により情報を整理する体験を取り入れた。

ねらい　・消費者の権利と責任について理解する。
　　・クリティカル・シンキング（批判的思考）により商品の情報を整理する。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習課題を確認する。	
展開	○「消費者の８つの権利と５つの責任」についてワークシートに書き込む。 ○企業のＷｅｂページや商品の広告をクリティカル・シンキングにより検討する。	○「消費者の８つの権利と５つの責任」について具体的事例を挙げながら説明する。 ○消費者が何を選び、買うかという購買行動は、選挙における投票行動と同様の意思表示であることを知らせる。 ○情報をうのみにするのではなく、あらゆる角度から検討し、判断することを伝える。 **評価規準⑧** クリティカル・シンキングにより商品の情報を整理することができる。［技能］（ワークシート）
まとめ	○本時の学習を振り返る。	

(ｱ) 指導と評価の様子

ａ　展開⑧

生徒に、気になっている商品を一つ挙げさせ、その商品をクリティカル・シンキングにより検討させた。なお、実施については、Ｗｅｂページの閲覧をしたい生徒がいることも考慮して、週末課題として取り組ませた**【図 10】**。

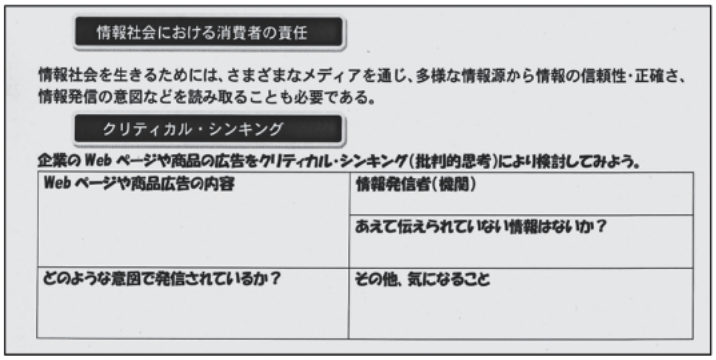
評価規準⑧
クリティカル・シンキングにより商品の情報を整理することができる。
［技能］（ワークシート）

⇩

クリティカル・シンキング（批判的思考）は、「消費者の５つの責任」の中の一つにもなっている。批判的思考とは、「相手の落ち度を指摘しけなす攻撃的なクレーマーになることではない。テレビ CM や雑誌などの商品広告をうのみにせず、あらゆる角度から検討し、判断するということである。」ということを生徒たちに伝えた。また、ワークシート**【図 10】**の記入を週末課題とすることを伝えた。

⇩

実践校においては、後日ワークシートを提出させ、商品に関する情報をクリティカル・シンキングにより読み取り、商品の広告と表示内容に関して、消費者としての受け取り方にズレが生じているものを指摘しているものをＢと判断した。その中で、今後の課題学習につながるような気になる点まで記入できているものをＡと判断し、記入内容をクラス全体に紹介した。商品広告と表示内容に関して、消費者としての受け取り方のズレを指摘できていない生徒をＣと判断し、再度説明をして再提出させた。



情報社会における消費者の責任

情報社会を生きるためには、さまざまなメディアを通じ、多様な情報源から情報の信頼性・正確さ、情報発信の意図などを読み取ることも必要である。

クリティカル・シンキング

企業の Web ページや商品の広告をクリティカル・シンキング(批判的思考)により検討してみよう。

Web ページや商品広告の内容	情報発信者(機関)
	あえて伝えられていない情報はないか？
どのような意図で発信されているか？	その他、気になること

【図 10】展開⑧ワークシート

〖生徒の記入例〗

Web ページや商品広告の内容	情報発信者(機関)	どのような意図で発信されているか？	あえて伝えられていない情報はないか？	その他、気になること
T○○ D○○の CD レンタルが送料別で無料	T○○	CD をレンタルさせるため	すべての CD が無料とは書いていない。	特になし
本製品はお客様アンケートで８割以上のお客様に満足していただいています。信頼と実績のある製品です。	家電製品会社	たくさん買ってもらうため	満足していない理由	特になし
３種のベリー(ｶｼｽ･ﾗｽﾞﾍﾞﾘｰ･ﾌﾞﾙｰﾍﾞﾘｰ)にアサイーをプラスした甘酸っぱい２層のグミです。	××食品	若者に好まれているベリーを使うことで、若い年代向けの売り上げ UP を狙っていると思う。	３種のベリーといいながら原材料にはブルーベリーの記載がなかった。	アサイーの効果
「△ オレンジ」は、ビタミンCをたっぷり含んだ爽やかなオレンジ・フレーバーの炭酸飲料です。 旬に摘まれたまるごと果実から抽出した“フルーツエキス”を配合しています。	◇・コーラ	おいしそうで、飲んだら楽しくなるような感じ	果汁は０％	果汁０％なのに、オレンジの味がするのはなぜか？

(ｲ) 成果と課題

生徒はこの週末課題に、どのように取り組み、何を記入すればよいのかが分かりにくかったようであった。そのため、課題の回収に時間がかかってしまった。今後は具体的な記入例を提示していきたい。

4 生徒の変容把握

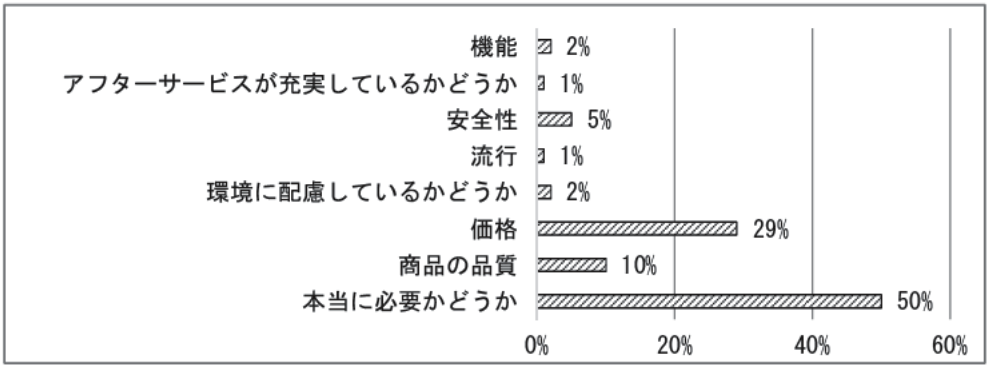
10 時間が終了した段階で事後アンケートを実施した。事前アンケートとほぼ同じ形式で行った。**「商品を購入するときに考慮すること」**に関しては、授業開始前には**「価格」**と回答した生徒が 84％と最も多かった。しかし終了後には、**「本当に必要かどうか」**が 50％で最も多くなり、**「価格」**29％を上回った。前回の質問が複数回答だったため単純比較はできないが、生徒の購買行動に対する考えがより慎重になったと思われる【図 11】。

次に、四つの学習項目についての理解度に変化があるかを調べた。**「インターネットショッピングの注意点」**【図 12】については、授業後 65％の生徒が**「よく理解している」**と回答し、**「おおむね理解している」**と合わせると 99％、ほぼ全員の生徒が理解できた結果となった。ＤＶＤなどの視聴覚

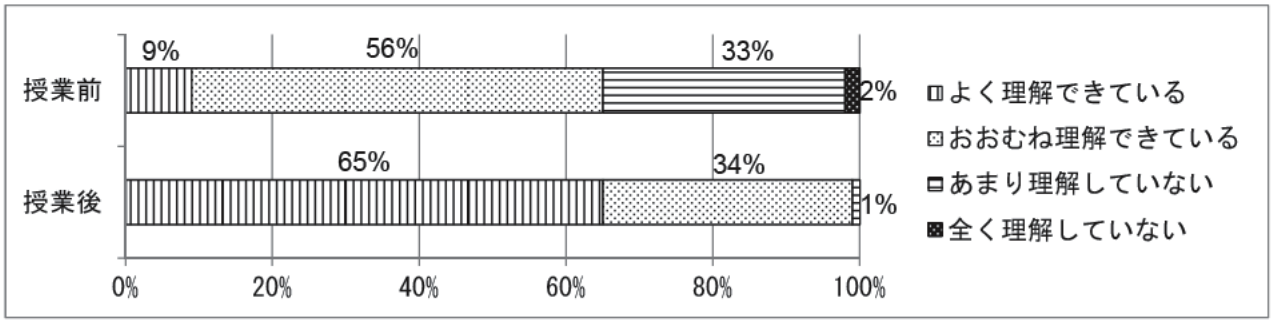
教材やロールプレイングなどを取り入れたことが有効だったと思われる。

授業後のアンケートにおいて、**「よく理解している」**、**「おおむね理解している」**と回答した生徒の割合を質問別にみてみると、**「クレジットカードの仕組み」【図 13】**では 95%、**「食品の選択が環境に及ぼす影響について」【図 14】**では 95%、**「消費者の権利と責任について」【図 15】**では 92%となっていた。

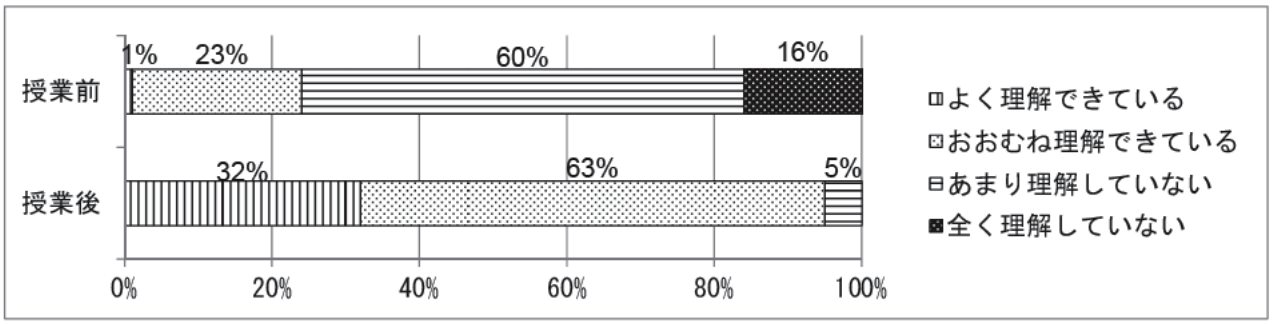
今回の授業においては、ペアワークやグループワークを取り入れることによって、多様な意見を聞き、物事を多角的に判断する場面をつくり出した。また、疑似体験などを用いて具体的に考え、自ら判断する場面も取り入れた。そして、その都度評価をして生徒にフィードバックした。これらの指導と評価の工夫によって、**「授業への取組」【図 16】**において、授業後に**「主体的に取り組めている」「どちらかといえば主体的に取り組めている」**生徒が 98%となり、生徒の主体的な学びを促したと考えられる。



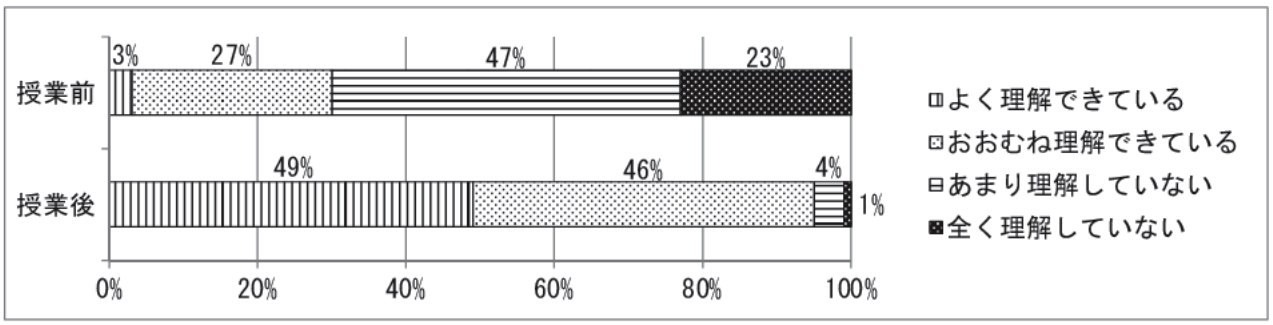
【図 11】商品購入のときに考慮すること（最も当てはまるもの一つ）



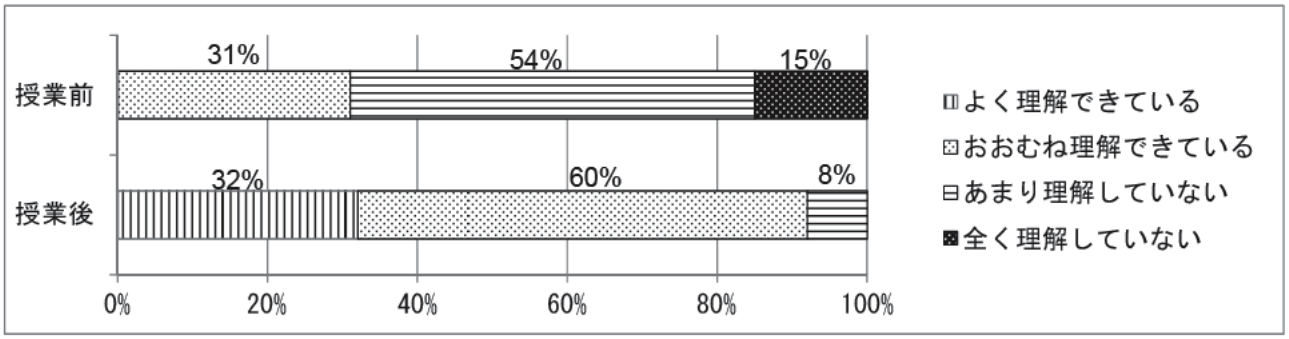
【図 12】インターネットショッピングの注意点



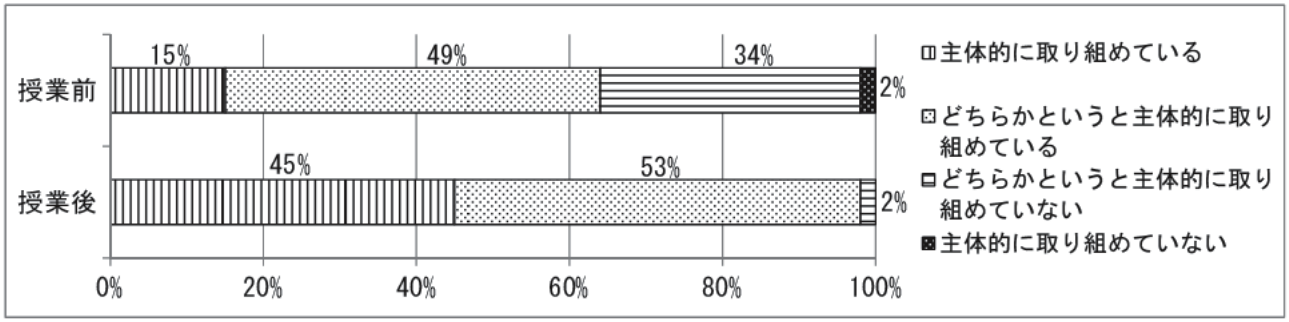
【図 13】クレジットカードの仕組み



【図 14】食品の選択が環境に及ぼす影響について



【図 15】消費者の権利と責任について



【図 16】授業への取組

〖記述による生徒の感想（抜粋）〗

【インターネットショッピングの学習に関して】

・インターネットショッピングをよく利用することがあるので、今回の授業を通して危険性を知ることができてよかった。

・自分の実体験で、チケットを買うためにクレジットで買おうとしたら失敗したことや、ネットで買った服がいま一つ気に入らなかったことがあり、改めてネットショッピングに関してはよく理解してから利用しようと思った。

・ネットショッピングやクレジットカードなど理解しているつもりだったが、知らないことはたくさんあった。

・クレジットカードの仕組みがよく分かった。

【買い物疑似体験の学習に関して】 ・授業後に物を買うとき、裏側の表示を確認してどこの国で生産されたものかを確認するようになった。また、会計後におつりをきちんと確認するようにもなり、実際におつりが間違っていることに気付いて返金してもらえたこともあった。 ・カレーの材料選びの授業では、いろいろ考えながら買うものを決めたけど、普段考えずに購入している自分に気付くことができ、よい体験ができた。 ・カレーの材料選びの授業では、普通の生活に即していて具体的に考えることができ楽しかった。 ・食の選択が環境に影響を及ぼすとは思っていなかった。 ・「フェアトレードマーク」を初めて知った。 ・生活するうえで大切なことをたくさん学ぶことができてよかった。
【グループワーク、発表等に関して】 ・みんなそれぞれ違う意見をもっているので、周りの人と意見交換できてよかった。 ・グループごとに意見が違うので、面白かった。 ・一人でみんなの前に出て発表するのは嫌だけど、グループで発表することはよかった。 ・授業前と授業後で、生活に関しての自分の意識の変化が大きかった。

5　まとめ

(1)　成果

本事例では、情報社会に生きる生徒たちが、消費者問題を自分のこととして学び、実生活に役立てることのできる指導を試みた。そのために、視聴覚教材やロールプレイングなどを意図的・計画的に取り入れた。また、本時のねらいに即して評価場面を明確にし、その評価方法を工夫した。これらを通して、生徒に授業内容を身近な事柄として捉えやすくし、他者の意見を踏まえながら自らの考えを深められるようにした。そして、評価に基づく個に応じた指導を行うことにより、学んだことをこれからの生活に役立てようとする態度を育むことを目指した。

生徒による事後アンケート結果から、本事例の指導と評価の工夫においては、次のような成果があったと考える。

① 本時のねらいに即して評価場面を明確にしたことで、適切なタイミングで生徒に声掛けをすることが容易となり、個に応じた指導も行いやすくなった。これにより、生徒たちの理解が十分に図られ、一人一人の生徒が、自信をもって学習に臨むことができた。このため、主体的に授業に取り組む態度を育むことができたと考える。

② 教師からの一方向的な授業ではなく、生徒自らが考え他者と意見交換を行う活動を意図的に取り入れたことにより、初めは、自分で考える・自分の考えを述べるという活動にとまどい、ぎこちなかった生徒たちだったが、単元の終わり頃には、教師が声を掛ける前に生徒たち自ら考え始められるように変化した。これにより、主体的に学習に取り組む態度を定着させることができたと考える。

(2)　課題

① 情報社会は常に変化するものである。今の生徒にとって旬の教材も同じく変化していくため、教材研究は常に継続していく必要がある。

② 評価場面では、理解不足の生徒への声掛けはすぐに行えた。しかし、理解の早い生徒を引き上げる準備が不十分であった。さらに評価の研究が必要である。

③ 生徒は、主体的に授業を受ける態勢が整った。この生徒たちに対して、これからも継続的に指導と評価を工夫し、さらに意欲を高めることが重要である。

事例２　科目「家庭総合」における指導と評価の工夫
～　単元「高齢者の生活と福祉」　～

１　生徒の実態把握

(1)　アンケートによる調査

これから授業で扱う内容についての生徒たちの基礎的な知識と経験及びこの分野への関心について、アンケートによる調査を行い、その実態を把握した。対象は、家庭系の専門学科で衣生活分野について学んでいる第１学年の 41 名である。

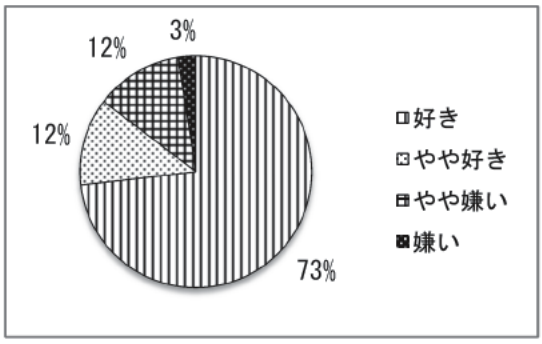
質問１**「家庭科の授業が好き」**については、85％の生徒が「好き」「やや好き」**【図１】**と答え、家庭科の授業に対して興味関心が高いことが分かった。

質問２**「高齢者分野の学習への興味・関心」**については、66％が「ない」「あまりない」と答え、関心の低いことが分かった**【図２】**。

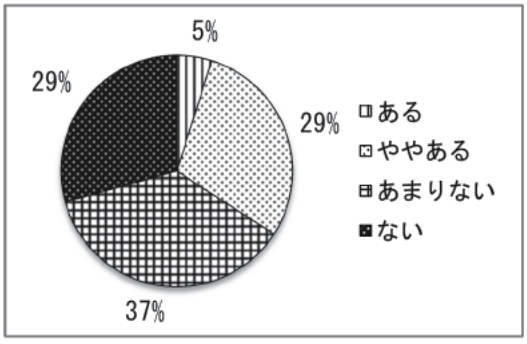
質問３**「高齢者と接する機会」**については、43％が「時々ある」であり**【図３】**、その機会はお盆やお正月などであると答えた。

質問４**「祖父母との同居」**については、37％が同居であった**【図４】**。そこで、祖父母と同居している人に「会話の頻度」について質問したところ、「週に２～３回」が 30％程度いた。同居していても生活時間が合わず、祖父母との関係が希薄である家庭環境も垣間見ることができた。

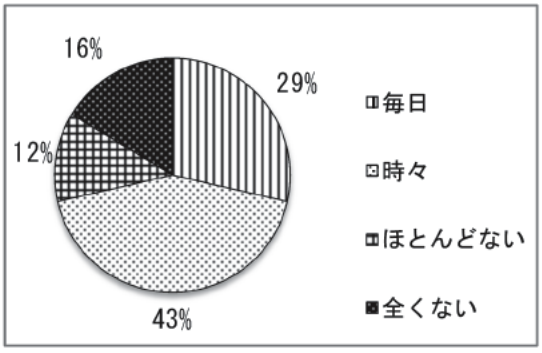
質問５**「高齢者に対してのイメージ」**については、複数回答の記述式で答えさせた。記入された内容を**「プラスイメージ」「マイナスイメージ」「どちらでもない」**に分類した。プラスイメージは 32％であり、マイナスイメージを大きく下回った。また、イメージした「単語数」を集計したところ、１～４個の生徒がほとんどで、高齢者に対してイメージを抱けていないという実態が分かった。



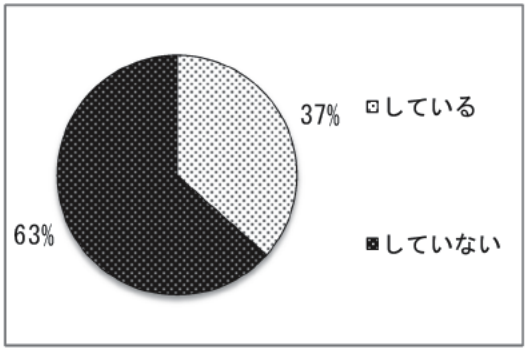
【図１】家庭科の授業が好き



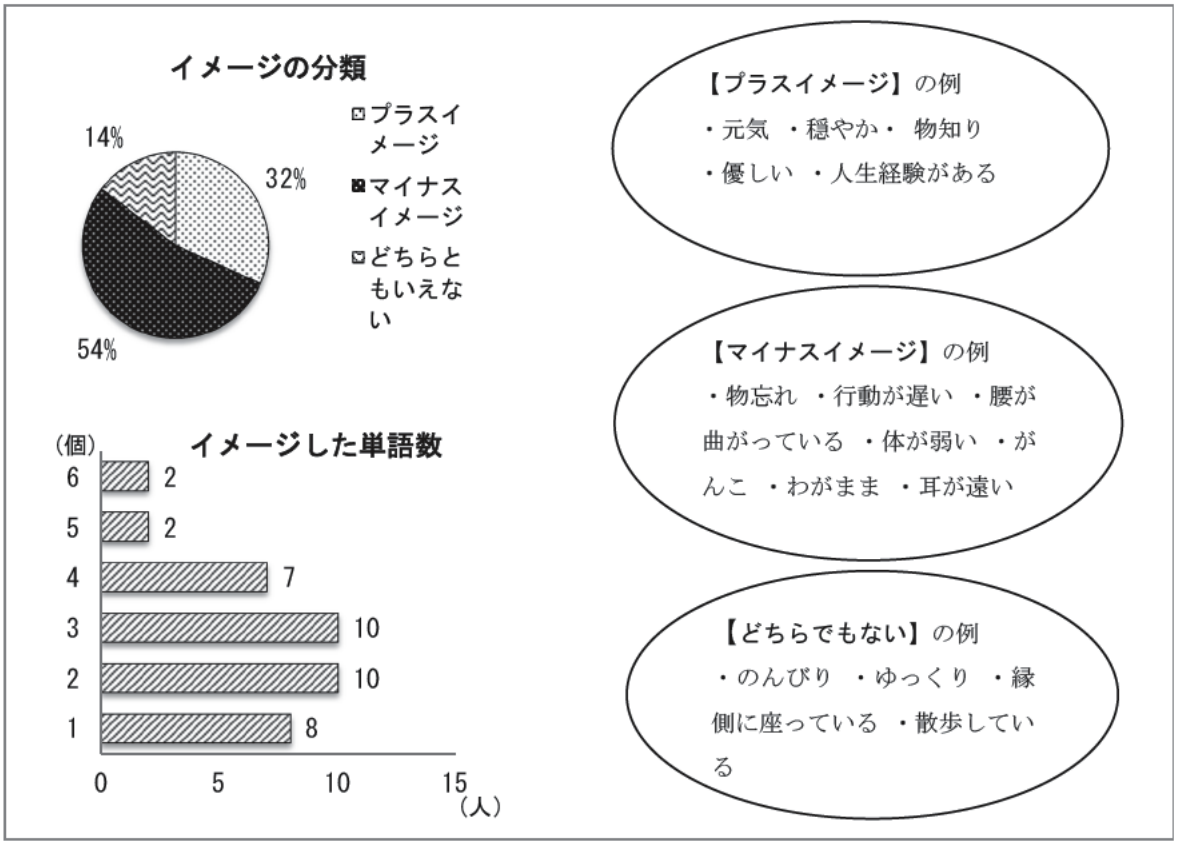
【図２】高齢者分野の学習への興味・関心



【図３】高齢者と接する機会



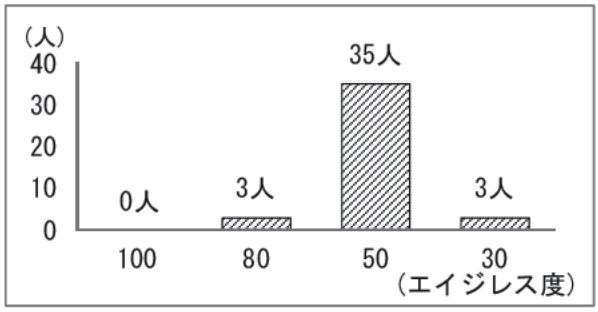
【図４】祖父母との同居



【図５】高齢者に対してのイメージ（授業前）

(2) エイジレステストによる調査

高齢者や老いに対する誤った先入観や偏見を診断する「エイジレステスト」（「エイジズム」法政大学出版局に基づく）を実施した。これにより、生徒の高齢者に対する知識や考え方の理解度をはかり参考とした。問題数は 30 問で、正答数 25～30 個が「エイジレス度 100」、20～24 個が「エイジレス度 80」、10～19 個が「エイジレス度 50」、９個以下が「エイジレス度 30」である。ほとんどの生徒がエイジレス度 50 となった【図６】。



【図６】エイジレステストの結果

２　本事例の概要

長寿国日本は 2007 年以降、超高齢社会となっている。この高齢化率はこれからも進み、かつて経験したことのない社会を迎えることになる。しかし、このことは高校生にとっては身近に感じにくい。なぜなら、核家族世帯が多くなり、高齢者と接する機会も少ないため、高齢期や高齢者を遠い存在として捉えているからである。そのため、授業で扱っても、自分たちにはまだ関係のないこととなり、興味関心が低いことが課題である。

そこで本事例では「家庭総合」における高齢者分野に関して調査研究を行った。高齢者の心身の特

徴と生活について、グループ学習や体験学習、課題解決型学習などを通して具体的に学び合い、高齢期や高齢者への理解を深めることを目指した。そして、家庭や地域社会で高齢者と関わり、支えていくための能力や態度を養いたい。また、将来自分たちが迎える高齢期に向けて、どのような準備が必要かを考えさせ、生涯を見通す力を養いたい。

３　授業実践　単元名：高齢者の生活と福祉

(1) 単元の目標　　使用教科書（「家庭総合　明日の生活を築く」開隆堂）

高齢者の心身の特徴や高齢社会の現状及び福祉などについて理解させ、高齢者の生活の課題や家族、地域及び社会の果たす役割について認識させるとともに、高齢者の自立生活を支えるための支援の方法や高齢者と関わることの重要性について考えさせる。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
・さまざまな体験的な活動に、取り組もうとしている。 ・高齢者を取り巻く課題について関心をもち、肯定的な見方をもって高齢者と関わろうとしている。	・高齢者の暮らし方を理解し、抱える課題について考えたり、まとめたりしている。 ・高齢者が自立した生活を送ることについて考えをまとめ、表現している。	・高齢者の生活についての情報を整理している。 ・高齢期に適した献立を、安全、衛生に配慮して調理することができる。	・高齢者の心身の特徴の概要を理解した上で、高齢期を肯定的に捉えることを理解している。 ・日本の高齢者の特徴とその背景、高齢者福祉の現状と課題について理解している。

(3) 単元の指導計画（11 時間）

時間	学習内容 ねらい	評価				
		関	思	技	知	評価規準
1	高齢者の心身の特徴 ・生涯を見通して高齢期を捉えるとともに、高齢者の身体的、心理的特徴について理解する。	○			○	・高齢期の課題に関心をもち、自分が高齢者になった時をイメージしている。 ・高齢者の心身の特徴について理解している。
2	高齢者疑似体験 ・高齢者の心理について考えを深め、介助される時の気持ちや介助する側の配慮を理解する。				○	・高齢者疑似体験を通して、介助される側の気持ちや、介助する側の配慮を理解している。
3・4・5	共に食べる ・高齢期の食について理解し、異なる年齢の人々と会食する意義を考える。		○ ○	○		・高齢者に必要な栄養について理解し、献立を工夫している。 ・グループで協力しながら、計画どおりに調理することができる。 ・年齢の異なる人々と共に食卓を囲むことの意義について考えている。

6 ・ 7 ・ 8 ・ 9	高齢者の生活と課題 ・高齢者へのインタビューから、生活上の課題に気付く。 ・ユニバーサルデザインやバリアフリーという視点から課題の解決方法を考える。	○	○ ○	○		・高齢者へのインタビューに取り組み、高齢者を身近に感じている。 ・高齢者の生活上の課題を解決するために役に立つ道具を考え、表現している。 ・計画どおりに、道具を作ることができる。 ・道具の意図や工夫点などについて、アピールしている。
10	人間の尊厳とケア ・尊厳を持って生きるということを理解する。 ・高齢者のための国連原則から、ケアを考える。		○		○	・個人の存在に尊厳をもって生活することの大切を理解する。 ・高齢者とのコミュニケーションを図ることの重要性について具体的に考えている。
11	高齢社会の課題と福祉 ・高齢者介護の現状と、課題について考える。 ・高齢者福祉について知る。		○		○	・ロールプレイングを通して、高齢者と家族の関係や高齢社会の問題について、考えをまとめたり、発表したりすることができる。 ・高齢者福祉の基本的な理念と高齢者福祉サービスについて理解している。

(4) 授業の実際

本事例では、特に生徒の体験的な活動を重視した３～５時間目および６～９時間目を報告する。評価において、グループポイント制とポートフォリオを取り入れた。グループワークでは、１クラスを８班に分けて実施した。

ア　グループポイント制およびポートフォリオを活用した評価

(ｱ) グループポイント制による評価

本単元では、グループワークによる実習を多く取り入れた授業を行った。その際、グループワークの成果を**「グループポイント」**と名付け、グループごとに見える形で評価した。グループポイント制は２時間目および３～５時間目、６～９時間目の３回導入した。評価項目は、４観点をできるだけ意識したものとし、生徒にとって分かりやすく意欲の向上につながる内容となるよう心掛けて設定した。

【グループポイントのルール】
・持ち点 10 点　　評価項目ごとにプラスとマイナスポイントが生じる。
・評価項目はあらかじめ生徒に示し、評価したポイントは次時に伝える。
・授業の様子や、個人のワークシートについてもグループポイントの対象とする。
・生徒同士の相互評価も取り入れ、グループポイントを加算する。

(ｲ) ポートフォリオを活用した評価

本単元において、ポートフォリオを作成した。生徒のポートフォリオに蓄積されていく具体的な成果物は、ワークシート、グループワークでの下書き、写真、自己評価表、パンフレット等である。これらの成果物は学習過程で生み出されるため、メモ程度のものから、失敗したものまでも含まれる。

このポートフォリオから、結果だけでは表せない生徒の思考過程や学習への姿勢を評価

したいと考えた。

イ　３時間目の授業　「共に食べる①」

ねらい　・世代ごとに必要な栄養や食事のポイントについて理解する。
　　・高齢者のいる食卓に合った献立の工夫ができる。

段階	学習活動	指導上の留意点 評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	○前時で行ったヨーグルトを用いた高齢者疑似体験を振り返り、高齢者の食についての関心を引き出す。
展開	○自分の家族の食事形態について確認する。 ○年代ごとに必要な栄養や食事のポイントについて理解する。 ○高齢者のいる家庭の食卓を想定し、ハンバーグステーキの献立のアレンジを考える。 【グループワーク】	○高校生と親世代、祖父母と三世代での食事をしている生徒を指名し、その様子を発表させる。 ○年代ごとに必要な栄養や食事のポイントを教科書や資料等を使用して説明する。 ○グループごとに話合いをして、ハンバーグステーキを条件に従いアレンジするように指示する。 **評価規準①**　高齢者に必要な栄養について理解し、献立を工夫している。 ［思考・判断・表現］（ワークシート、観察）
まとめ	○次時の学習内容の概要をつかむ。	○次時の調理について、日程や準備する材料を確認する。

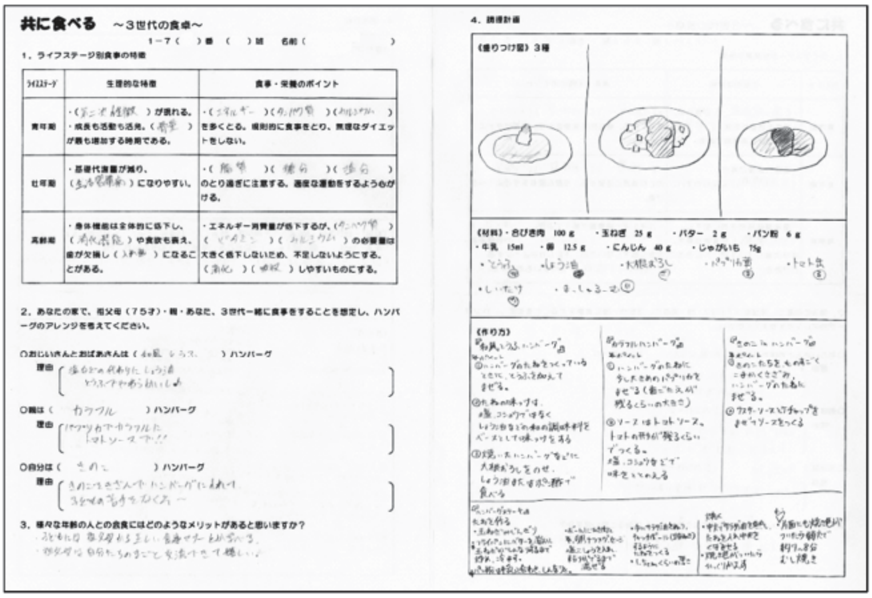
(ｱ)　指導と評価の様子

ａ　展開①

この授業では、生徒と親、祖父母（高齢者）三世代の家庭の食卓を想定して、グループワークによる献立作成を行った。またここでは、高齢者向けの食事を準備するだけではなく、一緒に食べるという視点も大切にしたいと考えた。メニューはハンバーグステーキに統一し、それぞれの年代に合わせてアレンジを加えるという条件で考えさせた【図７】。

【設定課題】
あなたの家で祖父母（75 歳）・親（45 歳）・自分（16 歳）の三世代が一緒に食事をすることを想定し、ハンバーグステーキのアレンジを考える。
【条件】
・各世代の生理的な特徴や栄養や食事のポイントに留意し、３種類のハンバーグステーキを調理すること。
・材料は合びき肉・玉ねぎ・パン粉等、基本的な材料は一括で購入する。その他のアレンジに必要な材料は各班で準備すること。
・付け合わせは、にんじんとじゃがいもを使用すること。

（話合いの様子）



【図７】調理計画表

評価規準①

高齢者に必要な栄養について理解し、献立を工夫している。

［思考・判断・表現］（ワークシート、観察）

⇩

ワークシートの「１.ライフステージ別食事の特徴」を踏まえて、グループになって「２.ハンバーグのアレンジ」を考えるように伝えた【図８】。

⇩

グループでの話合いをもとに、各自でワークシートに記入するように伝えた。

⇩

実践校においては、ワークシートへの記入内容で評価した。

アレンジの理由を、「消化がよいから」や「嗜好に合うから」などの表現で、記入しているものをＢと判断した。また、Ｂに加えて、栄養素名を挙げるなどして、具体的に栄養面について記入してあるものをＡと判断した。

⇩〈生徒の様子〉

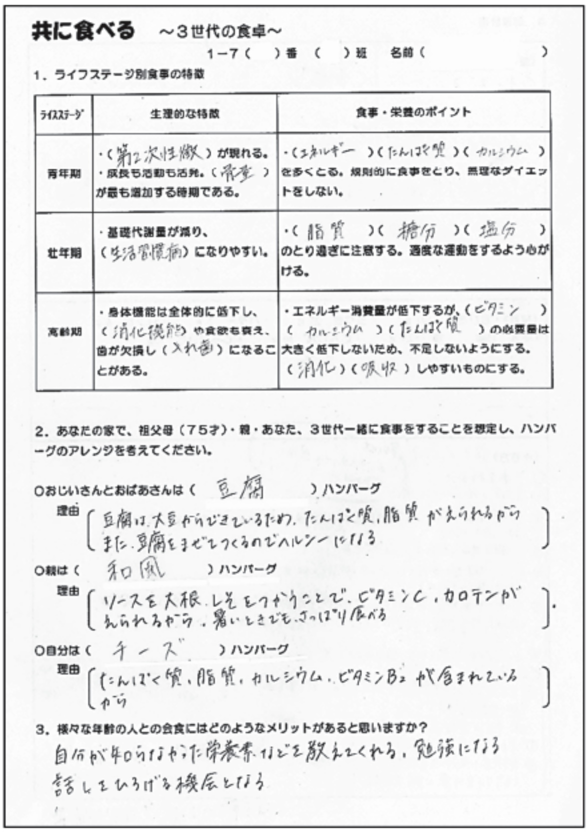
自分の考えを記入できないものがいた。Ｃと判断した。

⇩〈個別の支援〉

グループで相談しながら記入するように促した。

⇩

全員が理由を記入することができた。



共に食べる　～３世代の食卓～

１−７（　）番（　）班　名前（　　　）

１．ライフステージ別食事の特徴

ライフステージ	生理的な特徴	食事・栄養のポイント
青年期	・（第２次性徴）が現れる。・成長も活動も活発。（骨量）が最も増加する時期である。	・（エネルギー）（たんぱく質）（カルシウム）を多くとる。規則的に食事をとり、無理なダイエットをしない。
壮年期	・基礎代謝量が減り、（生活習慣病）になりやすい。	・（脂質）（糖分）（塩分）のとり過ぎに注意する。適度な運動をするよう心がける。
高齢期	・身体機能は全体的に低下し、（消化機能）や食欲も衰え、歯が欠損し（入れ歯）になることがある。	・エネルギー消費量が低下するが、（ビタミン）（カルシウム）（たんぱく質）の必要量は大きく低下しないため、不足しないようにする。（消化）（吸収）しやすいものにする。

２．あなたの家で、祖父母（７５才）・親・あなた、３世代一緒に食事をすることを想定し、ハンバーグのアレンジを考えてください。

○おじいさんとおばあさんは（豆腐）ハンバーグ

理由［豆腐は大豆からできているため、たんぱく質、脂質が えられるから　また、豆腐をまぜてつくるのでヘルシーになる］

○親は（和風）ハンバーグ

理由［ソースを大根、しそをつかうことで、ビタミンC、カロテンが えられるから。暑いときでもさっぱり食べる］

○自分は（チーズ）ハンバーグ

理由［たんぱく質、脂質、カルシウム、ビタミンB₂ が含まれているから］

３．様々な年齢の人との会食にはどのようなメリットがあると思いますか？

自分が知らなかった栄養素などを教えてくれる。勉強になる

話しをひろげる機会となる

【図８】展開①　ワークシート

(ｲ) 成果と課題

グループワークによる学習は、多くの生徒の学習意欲を高めるとともに、高齢者を身近な存在として捉えるためにも有効であったと感じた。引き続きグループワークを取り入れたい。しかし中には、発言が乏しく受け身的な態度の生徒もいた。今後はメンバーに役割を与えるなどの手立てを講じ、発言しやすくなるような工夫が必要であると考える。

ウ　４・５時間目の授業　「共に食べる②」

ねらい　・高齢者向けの食事を準備する技能を身に付けるとともに、世代を超えて会食する意義を考える。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	○本時の目的や、調理から発表までの流れを説明する。
展開	○【実習】ハンバーグステーキ 【グループワーク】 ○グループごとに発表する。	○調理計画表をもとに、安全・衛生面に気を付けながら調理するよう確認する。 **評価規準②**　グループで協力しながら、計画どおりに調理することができる。　［技能］（観察） ○ハンバーグステーキのアレンジの意図と工夫点を中心に発表させる。また、他のグループの発表を聞きながら、気付いたことをメモするよう促す。
まとめ	○異なる年代の人との会食ついて考える。また、本当のおいしさとは？会食の意義を考える。	○心身の変化と共に嗜好や食事内容が変わってくるが、工夫次第で異なる年代の人々が会食を楽しむことができることを気付かせる。 **評価規準③**　年齢の異なる人々と共に食卓を囲むことの意義について考えている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート）

(ｱ) 指導と評価の様子

a　展開②

前時の調理計画をもとに、調理実習を行った。次に、出来上がったものを、高齢者世代・親世代・自分と各一皿ずつ並べさせ、グループごとに発表をさせた。発表時には献立名を黒板に書かせ、その献立にした理由を述べさせた。

評価規準②
グループで協力しながら、計画どおりに調理することができる。　［技能］（観察）

⇩

実践校においては、実習中の様子と出来上がった料理から評価した。
グループのメンバーと協力し、安全面、衛生面に配慮して計画どおりに調理をすることができたものをＢと判断した。また、安全面、衛生面に配慮した調理ができていないものをＣと判断した。

⇩ 〈個別の支援〉

Ｂと判断したものには、温かいものは温かく食すことができるように、調理時間の調整や手順に気を配るように助言した。

⇩ 〈Ｃと判断した生徒の様子〉

調理作業を見ているだけの生徒がいた。

⇩

安全面や衛生面に配慮しながら、計画どおりに効率よく調理することができたものをAと判断した。

⇩〈個別の支援〉

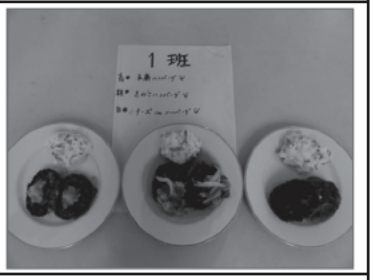
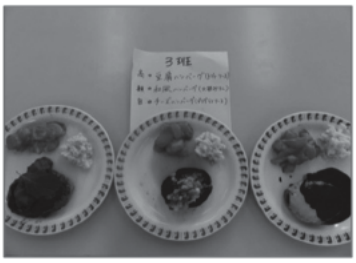
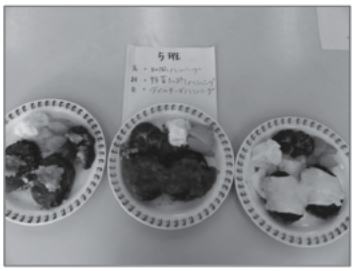
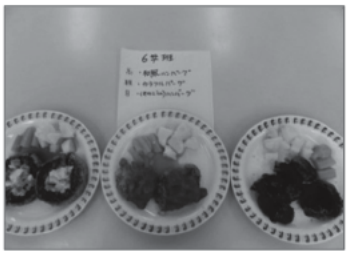
器具や材料の扱い方について確認し、器具類の洗浄や盛り付けの皿の準備など自分から仕事を見つけて動くように促した。

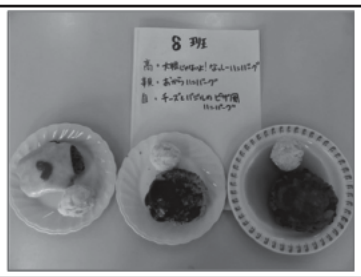
⇩

グループのメンバーとして、安全・衛生にも気を付けて調理に関わることができた。

以下に生徒たちが考案した献立と工夫点及び出来上がった料理を示す。

【生徒の献立例】〈献立欄：（高）は祖父母 75 歳、（親）は 45 歳、（自）は自分 16 歳　を表す。〉

班	献立名	工夫点	実際の調理
1	(高)豆腐ハンバーグ、ポテトサラダ (親)きのこハンバーグ、ポテトサラダ (自)チーズ in ハンバーグ、ポテトサラダ	・豆腐を入れることで良質のたんぱく質が摂取でき、消化しやすい。 ・大根おろしを添え、健康に配慮する。 ・カルシウムを摂取する。	
2	(高)魚ハンバーグ、野菜炒め、ブロッコリー (親)豆腐ハンバーグ、粉ふきいも、ブロッコリー (自)鶏肉ハンバーグ、人参、コーン、ブロッコリー	・小魚を使用し、カルシウムを摂取し骨粗しょう症を防ぐ。 ・摂取カロリーを抑える。 ・タンパク質が多い割に脂質が少なめで、ダイエットに良い。	
3	(高)豆腐ハンバーグ、人参のグラッセ、マッシュポテト (親)和風ハンバーグ、人参のグラッセ、マッシュポテト (自)チーズハンバーグ、人参のグラッセ、マッシュポテト	・ヘルシーで栄養があり、高齢者の嗜好に合うと思うから。 ・大根、しそを使い、さっぱりとしていて消化吸収を助ける。 ・成長期のカルシウムを摂取するため。	
5	(高)和風ハンバーグ、マッシュポテト、人参、ブロッコリー (親)野菜たっぷりハンバーグ、マッシュポテト、人参、ブロッコリー (自)ダブルチーズハンバーグ、マッシュポテト、人参、ブロッコリー	・ひじきを入れ、カルシウムとミネラルを摂取し、柔らかく仕上げる。 ・不足しがちな野菜を補い、健康に配慮する。 ・乳製品とカルシウムとエネルギーが摂取できる。子どもの嗜好に合う。	
6	(高)和風豆腐ハンバーグ、人参のグラッセ、粉ふきいも (親)カラフルハンバーグ、人参のグラッセ、粉ふきいも (自)きのこ in ハンバーグ、人参のグラッセ、粉ふきいも	・しょうゆ味やポン酢で味付けし、高齢者の好みの味にする。 ・野菜をたくさん摂取でき、色どりも良くなるためパプリカを使用する。 ・きのこを刻んで入れて、好き嫌いをなくす。	

8	(高)なっしーハンバーグ、 ポテトサラダ (親)おからハンバーグ、 ポテトサラダ (自)ピザ風ハンバーグ、 ポテトサラダ	・味をマイルドにするため、すりおろした「なし」を入れたソースにする。 ・コレステロールを抑え、生活習慣病を防ぐ。 ・エネルギー、タンパク質、カルシウムを摂る。	

b　展開③

まとめとして、異なる年代の方との会食についての意義を考えさせ、ワークシートに記入させた。

評価規準③

年齢の異なる人々と共に食卓を囲むことの意義について考えている。

［思考・判断・表現］（ワークシート）

⇩

実践校においては、調理計画の時点で用いたワークシート【図８】の「３.様々な年齢の人との会食にはどのようなメリットがあると思いますか？」の回答内容と調理実習後の同一質問への回答内容で評価した。

「昔の話を聞くことができる」や「お互いにコミュニケーションが図れる」など、自分のこととして捉え記入してあるものをＢと判断した。また、Ｂに加えて、高齢者の立場での考えや高齢者の心理などを含めて、多面的に捉えて記入してあるものをＡと判断した。記入できていないものはＣと判断した。

⇩　〈個別の支援〉

記入できていなかった生徒には、ワークシートに考えていく上でのヒントとなるコメントを書き込み返却した。

⇩　〈生徒の様子〉

生徒はコメントを参考に再度考え、記入をした。

ワークシートを再提出させたことにより、全員Ｂ以上となった。

会食の意義について、実習前は、簡単な回答が多かった。しかし、実習後は記入量が増え、内容もより具体的なものが多くなった。実習前には未記入者が 26 名いたが、実習後には未記入者は４名と減った。記述の中に「楽しい」や「伝わる」といった単語が増え、コミュニケーションをとることによって得られる心理的なメリットを挙げる生徒が多く見られた。実習を通して、より身近なこととして高齢者との関わりを考えている様子がうかがえた。以下に、ワークシートへの記入例を示す。

【会食について（実習前）の例】
- 昔の話を聞くことができる。
- 人数が増えて楽しくなる。
- 食事のマナーを教えてもらえる。
- 会話をして、コミュニケーションがとれる。
- 未記入……26 名

【会食について（実習後）の例】
・ハンバーグの中身などについての会話も増え、お腹も心も満たされると思う。
・世代ごとの食の好みを知ることができる。また、料理のレシピなどを受け継いでゆくことができる。
・若い人たちは、いろいろな話を聞くことができて勉強になる。高齢の人たちは、話をすることで老化の予防になると思う。
・お互いの興味のある話題を知ることができて、仲が良くなり、食も進むと思う。
・未記入……４名

(ｲ) 生徒による自己評価及び授業の感想

３～５時間目の最後に、自己評価を行わせた。評価は、Ａ：良くできた、Ｂ：できた、Ｃ：あまりできなかった、Ｄ：できなかった　の４段階とした。生徒の負担を考慮し、評価項目は数を少なくした。

項　目	評価（人数）				関心意欲態度	思考判断表現	技能	知識理解
	A	B	C	D				
意欲的に授業に参加できたか。	33	8	0	0	○			
ライフステージごとの栄養の特徴が理解できたか。	26	15	0	0				○
注意点に従って献立を工夫し、調理ができたか。	28	13	0	0		○	○	
高齢者の方と関わる機会をつくろうと思ったか。	21	18	2	0	○			

全項目Ａをつけた生徒が 16 名であった。やや甘い評価結果といえるが、おおむね意欲をもち授業に取り組めたと考えられる。質問「高齢者の方と関わる機会をつくろうと思ったか。」については、他の項目よりＡを付けた人数が少なかった。

授業の感想を以下に示す。

【３～５時間目の授業についての感想～自由記述～（例）】
・栄養の違いを考えながら料理をしたのは初めてだった。参考になった。
・ハンバーグごとに、付け合わせの種類、調理方法、栄養バランス、味付けを変えることができ、調理に対する自信をつけることができた。
・実際に家で、おばあちゃんに作ってみようと思った。
・材料が余ってしまったり、作りすぎたりして、３種類作るのはとても難しかった。
・味や歯応えや見た目など、三世代それぞれのことを考えて調理するのは大変だったけれど、楽しかった。

(ｳ) 成果と課題

・生徒たちは、３時間目に行ったグループワークでの実習で、調理に対しての意欲が高まっていた。そのため、本時において、多くの生徒が積極的に調理実習に参加していた。
・３種類のハンバーグステーキ作りは、生徒たちのもつ技術のレベルを踏まえると、少しハードルの高い課題設定であった。しかしこの課題設定が、生徒たちの意欲をより引き出す要因になったと考える。
・高齢者向けのアレンジを「和風ハンバーグ」や「豆腐ハンバーグ」とするグループが多か

った。相互の学びを深めるために、メニューが重複しないよう、事前に調整した方がよかった。

・各グループ３種類のハンバーグを調理したため、仕上がりの時間にバラツキがあった。そのため、成果発表の時間設定が難しかった。

・生徒の自己評価から、調理実習まではＡ評価であるが、それを実際の生活に生かそうとする意欲を、十分に高めるところまでは至っていないことが分かった。今後の授業で、実際の生活に生かそうとする意欲を高めるような指導と評価の工夫を考える必要があると感じた。

エ　６時間目「高齢者の生活と課題①」

ねらい　高齢者インタビューを通して、高齢者と接する機会をもつとともに、生活上の課題に気付く。また、その解決策について考える。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	○高齢者が使う道具について、知っているものを聞く。資料集を用いて、介護用具を例示する。
展開	○高齢者インタビューの課題を通して気付いたことを話し合う。高齢者の生活上の課題を見付ける。 【グループワーク】	○グループ内で、それぞれの高齢者インタビューの内容を発表し合うように指示する。また、その中から生活上の課題を見付け、衣・食・住・その他の分野に分類させる。 **評価規準④**　高齢者インタビューに取り組み、高齢者を身近に感じている。 ［関心・意欲・態度］（インタビューの内容、観察）
	○バリアフリーやユニバーサルデザインという観点から、高齢者の生活に役立つものを考える。 【グループワーク】	○自分たちが気付いた課題を解決するための道具を、柔軟な発想を生かして考えさせる。 **評価規準⑤**　高齢者の生活上の課題を解決するために役に立つ道具を考え、表現している。 ［思考・判断・表現］（ワークシート・観察）
まとめ	○次時の学習内容の概要をつかむ。	○計画したものを作るための材料を確認する。

(7) 指導と評価の様子

ａ　展開④

この単元の１時間目に課題として高齢者インタビューを課し、約２週間後の本時に合わせて持参させた**【図９】**。

○インタビューの対象

生徒の祖父母。対面で行うことを原則とする。

ただし、距離や家庭状況によっては電話も可。

○祖父母へのインタビューが難しい場合

近所に住む高齢者（身近な人）。

聞き取る内容が同じでも、インタビューする側の意欲や工夫で多くの話が引き出せることを伝えた。この課題の期間中に敬老の日があった。そのため、生徒は祖父母に会いに行ったり、プレゼントを購入したり、コミュニケーションを図る良いタイミングとな

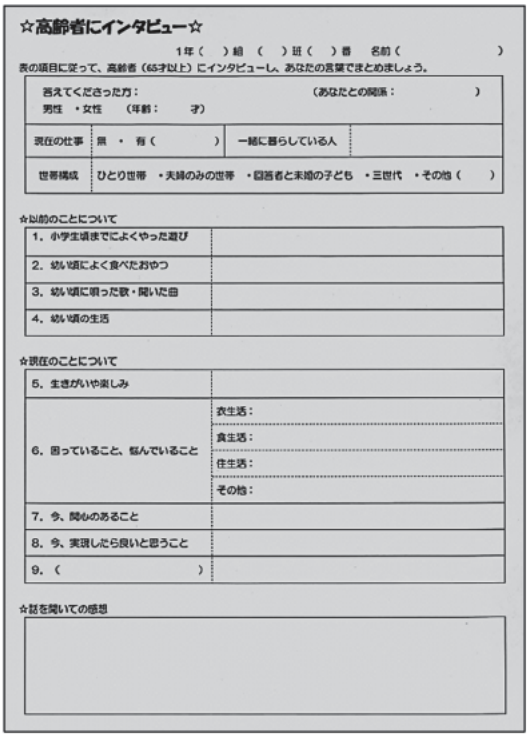
った。

評価規準④

高齢者インタビューに取り組み、高齢者を身近に感じている。

［関心・意欲・態度］（インタビューの内容、観察）

実践校においては、高齢者インタビューの記入内容及び話合いにおける発言等の様子により評価した。インタビューの各項目について聞き取った内容をまとめ、それをもとに、グループでの話合いで発言しているものをＢと判断した。聞き取った内容から、さらに具体的な事柄について高齢者に質問し、その内容をまとめるとともに、グループでの話合いに積極的に関わっているものをＡと判断した。身近にインタビューできる高齢者を見付けることができず、ワークシートにまとめられていないものをＣと判断した。



☆高齢者にインタビュー☆

1年（　）組（　）班（　）番　名前（　　）

表の項目に従って、高齢者（65才以上）にインタビューし、あなたの言葉でまとめましょう。

答えてくださった方： 男性　・女性　（年齢：　　才）		（あなたとの関係：　　）	
現在の仕事	無　・　有（　　）	一緒に暮らしている人	
世帯構成	ひとり世帯　・夫婦のみの世帯　・配偶者と未婚の子ども　・三世代　・その他（　　）		

☆以前のことについて

1．小学生頃までによくやった遊び	
2．幼い頃によく食べたおやつ	
3．幼い頃に唄った歌・聞いた曲	
4．幼い頃の生活	

☆現在のことについて

5．生きがいや楽しみ	
6．困っていること、悩んでいること	衣生活： 食生活： 住生活： その他：
7．今、関心のあること	
8．今、実現したら良いと思うこと	
9．（　　）	

☆話を聞いての感想

【図９】展開④　ワークシート

〈個別の支援〉

Ｃの生徒には、話合いで得られた情報を参考に、自分が高齢者だったらどのように考えるかを整理して記入するように指示をした。

高齢者の生活をイメージできることを目的とし、自分なりの言葉でまとめられればＢと判断した。

ｂ　展開⑤

インタビューの結果から、高齢者が抱えている課題をグループごとに整理し、衣・食・住・その他に分類した。その課題の中から、バリアフリーやユニバーサルデザインを踏まえて、問題点を解決するための手立て（具体的な道具）を考えさせた。

評価規準⑤

高齢者の生活上の課題を解決するために役に立つ道具を考え、表現している。

［思考・判断・表現］（ワークシート、観察）

〈生徒の様子〉

生徒たちは問題点を見付け出すところまではスムーズに進んだが、なかなか道具の考案に結びつかず、苦労していた。そこで、例として高齢者のために作られた既存の道具を提示したが、その概念に捉われ、似たようなものしか思いつかない様子であった。

〈全員への補足説明〉

そこで、ここでは生徒たち自身に新しい道具を考案してもらいたいという教師の思いと、実現は困難そうでも未来志向的な道具が良いということを伝えた。

〈生徒の様子〉

生徒たちは柔軟な発想で次々と道具を考え始めた。

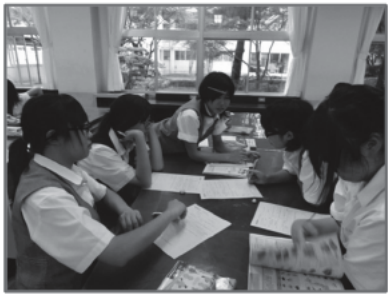
前時の反省から、グループごとに製作する道具や分野が重複しないよう、机間指導をしながら計画案を見てあらかじめ調整をした。そして、すべてのグループがオリジナルの計画を立てることができた。

実践校においては、ワークシートへの記入内容【図 10】及びグループでの話合いにおける発言等の様子により評価した。各自が持ち寄った高齢者インタビューの結果から、協議を通して、高齢者が抱えている課題を見いだし、その課題を解決するのに役立つ道具を考え、計画書にまとめられたものをＢと判断した。さらに、課題を解決するために、高齢者の身体の状況、ライフスタイル、家族構成など、多方面から検討して、計画書にまとめられたものをＡと判断した。

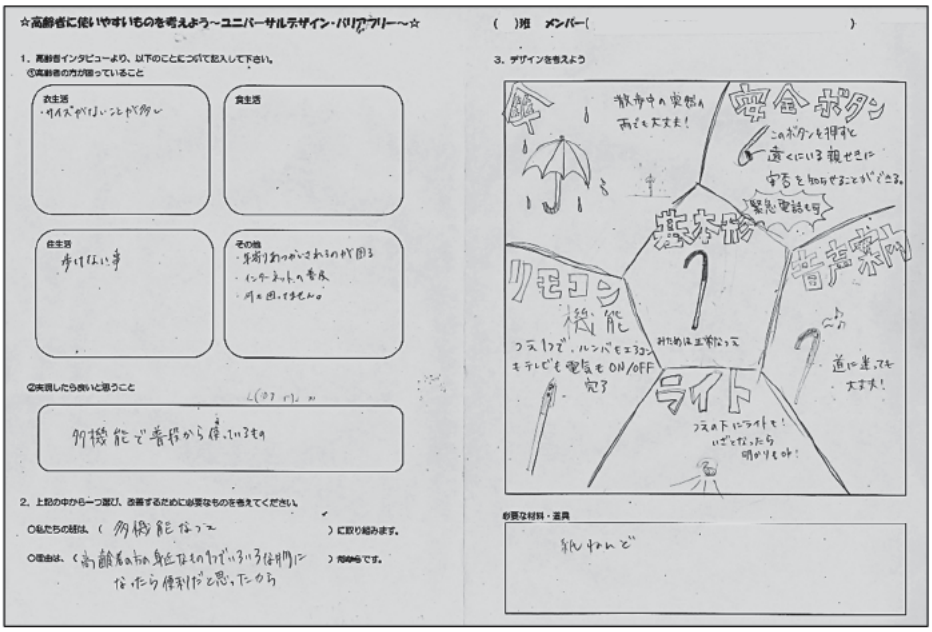
高齢者が抱えている課題を見付け道具は考えられたが、その製作理由を明確に記入できていないものをＣと判断した。

〈個別の支援〉

Ｃの生徒には、「なぜそれが必要なのか」「なぜそうするのか」「それにどういう効果があるのか」等、教師が具体的に質問をして、生徒に考えるヒントを与えた。これにより、理由を具体的に記入することができ、全員をＢに引き上げることができた。



（計画中の様子）



【図 10】展開⑤　ワークシート

(ｲ) 成果と課題

グループワークで高齢者の生活上の課題と解決策を考えさせた。生徒は、課題解決に向けて意欲的に話合い活動に取り組んだ。

オ　７・８・９時間目「高齢者の生活と課題②」

ねらい　・高齢者の生活上の課題を解決する道具を製作する。
　　・成果を発表することで、プレゼンテーション能力を高める。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準[観点]（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	○前時の計画表を返却し、本時の製作から発表までの流れを説明する。
展開	○【実習】不織布や、画用紙等を用いて模型を製作する。 【グループワーク】 ○プレゼンテーション資料を作成し、発表する。　【グループワーク】	○平面で考えたものを実際に立体にしてみることによって、より身近に実感させる。 **評価規準⑥**　計画どおりに、道具を作ることができる。 ［技能］（作品、観察） ○グループごとに発表し、評価表を用いて相互評価をさせる。 **評価規準⑦**　道具の意図や工夫点などについて、アピールしている。 ［思考・判断・表現］（プレゼンテーション）
まとめ	○ワークシートに記入し、振り返る。 ○高齢者にとって生活しやすい環境づくりについて考える。	○目的や計画と、実行結果を比較することで、自己評価をさせる。

⑺ 指導と評価の様子

a　展開⑥

前時で作成した計画書をもとに、実際に模型を製作した。金属や木などを加工するのは難しいため、イメージとして、他の素材で代用することも可とした。

計画の段階で平面に書いたものを立体にするのは難しく、試行錯誤しながら作業に取り組んだ。実物を作ることによって、高齢者にとって使いやすいサイズを想像し、角度や重さなどを考えるきっかけとなり、実感を伴いながら高齢者について考えていた。

評価規準⑥
計画どおりに、道具を作ることができる。　［技能］（作品、観察）

⇩

４・５時間目【実習】の反省を生かし、作業をせずに見ているだけの生徒がいないよう、班長を中心に、作業開始前にグループ内での役割分担をするように伝えた。

⇩

実践校においては、完成した作品及びその製作過程における活動の様子から評価をした。計画表どおりにメンバーと協力して道具を作ることができたものをＢと判断した。

大きさや角度、デザインなどに関して、高齢者が実際に使用することを考え、計画に変更を加えながらよりよいものを作ろうとメンバーをリードし、道具を発展させているものをＡと判断した。全てのグループで、道具を完成させることができ、全員が与えられた役割で作業をすることができていたので、Ｃはいなかった。

b　展開⑦

道具が出来上がったら資料を作成し、プレゼンテーションの準備をさせた。プレゼンテーションについては、自分たちの作品を相手に分かりやすく伝えられるように、見せ

方を工夫したり、易しい言葉を使うように指示した。

プレゼンテーションを聞く側には、製品やプレゼンテーションの感想を書くよう指示し、相互評価をさせた。

評価規準⑦

道具の意図や工夫点などについて、アピールしている。

［思考・判断・表現］（プレゼンテーション、資料）

⇩

実践校においては、プレゼンテーション時の発言等の様子および作成した資料から個別に評価をした。

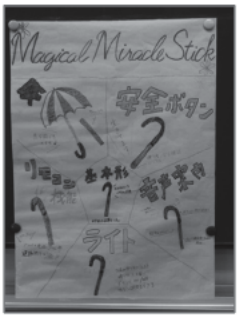
分かりやすい資料を作り、道具の使用実演等と合わせて、プレゼンテーションしているものをＢと判断した。Ｂに加えて、一方的に情報を伝えるのではなく、聞き手の反応にも気を配りながら効果的なプレゼンテーションのできているものをＡと判断した。

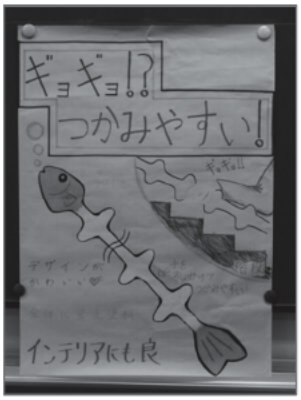
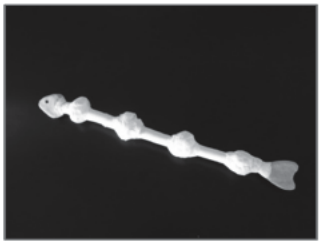
資料が作成され製品の意図や使い方の説明はしているが説明が十分ではないもの、また発表における発言がほとんどないものをＣと判断した。

⇩　〈個別の支援〉

Ｃと判断したものに関しては、聞く側の生徒たちや教師からいくつかの質問をし、質問に答えさせることにより、説明の不足しているところや発言量を補った。

【生徒の作品例】

班	生活上の課題　および　考案した製品	工夫点
2	○生活上の課題……利き手の右手がまひしている上、握力が弱くなり、普通のコップがうまく握れなくなってきた。 ○製品名　「おいしく楽しく飲めるぞうくん」 	・素材は軽く、壊れにくい。 ・取っ手が大きく持ちやすい。 ・飲み口があり、飲みやすい。 ・底を広くし、倒れにくい。 ・かわいいデザインで食事が楽しめる。
3	○生活上の課題……右ひざが悪く、歩行が困難。家の中で過ごすことが多いが、積極的に外出したい。 ○製品名　「マジカルミラクルステッキ」  	・一見、普通の杖だが変形して高齢者にとって便利な機能が６つ付いている。 ①傘…急な雨に対応 ②ライト…暗い所で役立つ ③音声案内…カーナビのように道案内する ④安全ボタン…具合が悪くなった時に周りに知らせる。 ⑤リモコン…室内で、テレビの

		リモコン代わりになる。 ⑥デザイン…カラフルな色で、服に合わせて装飾の役割になる。
6	○生活上の課題……パーキンソン症候群になって、歩きにくくなってきた。自分の部屋からトイレまで一日に何度も往復するが、時々転倒しそうになる。 ○製品名　「ギョギョ！！つかみやすい！」  	・階段や浴室などに手すりとして、簡単に取り付けることができる。 ・凹凸があり、握った時にすべりにくい。 ・蛍光塗料を塗り、暗いところでも分かりやすい。 ・デザインがかわいく、生活が楽しくなる。

（製作中の様子）

（プレゼンテーションの様子）

(ｲ) 成果と課題

折よく、東京オリンピック招致のプレゼンテーションがニュースで話題となっていた。このため、生徒たちはプレゼンテーションをイメージしやすく、スムーズに準備した。

発表に関しては、順番の早いグループは恥ずかしがっていた。しかし、次第に発表にも慣れてきて、より分かりやすく伝えるために原稿にないことを話したり、話し手側から聞き手側に質問を投げかけ考えさせたりするなど、言葉のキャッチボールを楽しみながら製品をアピールするグループもでてきた。

聞き手側としては、製品の使い方や使用する場面を積極的に質問するものも見られた。互いに評価したり、評価されたりすることを通して、自分たちのグループでの活動を振り返ることができた。

(ｳ) 生徒の自己評価及び授業の感想

６～９時間目の授業後に、生徒に自己評価を行わせた。前回と同様に、評価は、Ａ：良くできた、Ｂ：できた、Ｃ：あまりできなかった、Ｄ：できなかった　の４段階とした。

結果は次のとおりである。

評価項目	評価（人数）				関心意欲態度	思考判断表現	技能	知識理解
	A	B	C	D				
ユニバーサルデザインやバリアフリーについて理解できたか。	33	7	1	0				○
班員と協力して作業に取り組めたか。	31	9	1	0	○			
製品を作り、効果的にプレゼンテーションをすることができたか。	15	23	3	0		○	○	
高齢者の生活上の課題について考えを深められたか。	34	7	0	0		○		

全項目Ａをつけた生徒が 13 名であった。

「製品を作り、効果的にプレゼンテーションすることができたか。」という質問については、半数がＢであった。これは自由記述の内容から見ると、プレゼンテーションがうまくできなかったと考える生徒が多いためと思われる。今後、このような形で発表をする機会を増やしていく必要性を感じる。

「高齢者の生活上の課題について考えを深められたか。」については、ほとんどの生徒がＡをつけた。こちらは予想以上に良い成果が出た。道具を製作したことを通して、高齢者や高齢期への理解が深まったと考えられる。

【授業後の感想（抜粋）】
・高齢者が使用する道具について、いろいろ考えられた。（14 人）
・友達が初期の案よりもっと良いものを作ろうと頑張ってくれて嬉しかった。
・みんなで意見を出し合いながら取り組めた。
・考えたものが、実際に製品になって販売されれば良いなと思った。
・なかなかデザインどおりにできなくて大変だった。

【プレゼンテーションの感想（抜粋）】
・思ったよりもゆっくり話さないと、相手に伝わらないと感じた。
・模型を実際に操作しながら説明しているものが分かりやすかった。
・見やすく分かりやすい資料作りも大切だと思った。
・図や言葉で、ポイントを絞って説明すると良いと思った。
・資料作りに時間をかけてしまい、スピーチする内容を事前に考えられなくて失敗した。
・スピーチの練習も事前にすれば良かった。

(ｴ) 成果と課題

・製品を製作し、プレゼンテーション用資料を作成するために、予想以上に時間がかかった。そのため、生徒をせかすように授業を進めてしまった。指導の手順や時間配分等が計画的に進むよう、より細かなタイムスケジュールを組むなどの工夫が必要であると感じた。

・プレゼンテーション形式の発表を行うのは初めてだった。教師側も、効果的な発表に関する指導が不足していた。そのため、全体的に発表が中途半端になってしまったように感じた。しかし、他のグループの発表を見て、良いところを自分たちの発表の内容に加えたり、修正したりしているグループがあった。さらに伸びる可能性が見えたので、今

後は今回の結果を踏まえ、より効果的なものとなるような事前指導を行いたい。

カ　グループポイント制およびポートフォリオを活用した評価

(ｱ) グループポイント制による評価

生徒は仲間意識が強く、グループポイントを獲得しようと、積極的に学習に取り組んだ。また、その姿をアピールする言動も見られた。

【グループポイントの効果】

・個人のワークシートもグループポイントの対象になることで、提出率が上昇した。内容もできるだけ多く書き込み、分からないところはグループ内で助け合って記入する様子が見られた。

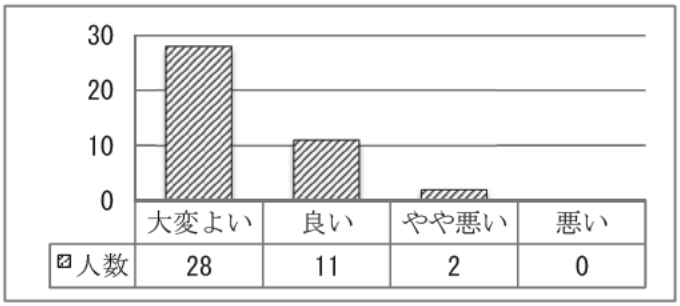
・グループごとの競争意識が働き、より良い成果を出そうと協力したり、多くの意見を出し合いながら学び合う雰囲気ができた。

・ポイントの評価項目をあらかじめ知ることにより、一人ひとりが授業の目的を意識しながら臨むようになった。

【グループポイントの課題】

・グループを構成する生徒の能力により、毎回高得点を出すグループとそうでないグループが明確になってしまった。今後はグループ編成を工夫し、個人評価とグループ評価をうまく組み合わせる必要性を感じた。

単元終了後、グループポイント制による評価について、**４：大変よい**、**３：良い**、**２：やや悪い**、**１：悪い**、の４択でアンケートを行った。結果を下に示す**【図 11】**。



【図 11】グループポイント制による評価

【４：大変よい、３：良い　をつけた生徒の感想（抜粋）**】**

・競争することによってやる気が出る。（23 名）

・とてもやる気が出て、みんなで協力して頑張った。

・どこを良くしたらいいか分かった。評価が分かりやすかった。

・自分たちのグループと他のグループの良かった点が分かる。

・みんなで協力して活動することで、達成感が倍になった。

・自分がプリントを出さないと、班の人に迷惑をかけるから、きちんと書いて出した。

・自分に責任感が生まれた。

【２：やや悪い　をつけた生徒の感想**】**

・ポイントがあまりよくなかったときにがっかりした。

・自分がものすごく頑張っても、他の人が適当だとポイントが下がってしまう。

・ポイントで順位が分かるのがこわい。

(ｲ) ポートフォリオを活用した評価

【ポートフォリオ作成の成果】

・高齢者に関する単元の学習を通して、生徒は小単元ごとのつながりを意識するとともに、学習の流れを常に確認できた。

・ポートフォリオを見ながら既習の学習事項を想起し、その時間の課題と関連付けながら解決法を探ることができた。

・生徒自身が生み出した具体的成果物を通して、学びを振り返り自信につながった。

・教師が生徒のつまづきを発見したり、生徒の考えをあらためて確認したりでき、次時の指導と評価の参考にできた。

これからも引き続きポートフォリオを作成していきたい。そして、学年末に１年間の家庭総合の学習を振り返り、すべての成果物の中から、自分にとって価値あるものを選び出し、目次をつけながらファイリングしていくベスト・ワーク・ポートフォリオにつなげていきたいと思う。

（生徒同士のポイント評価の様子）

（ポートフォリオ）

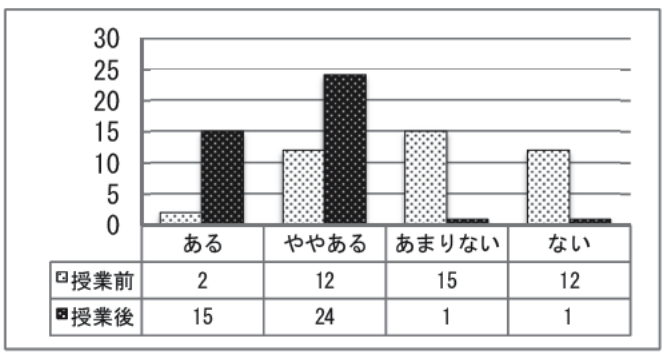
4　生徒の変容把握

(1)　アンケートによる調査

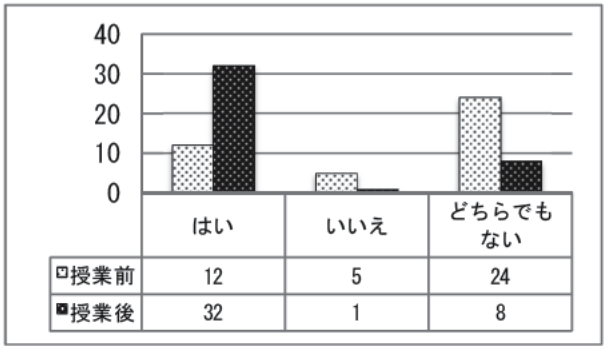
質問**「高齢者分野の学習に興味があるか」**については、授業後「ある」、「ややある」の生徒が増加した**【図12】**。質問**「高齢者と交流したいか」**については、「交流したい」と答えた生徒が増加し、授業前と比べて、確実な意識の変容が見られた**【図 13】**。

また、**「高齢者に対してのイメージ」**を複数回答で質問したところ、授業前と比べて、プラスイメージの言葉の割合が増加した**【図 14】**。回答数の変化を見ると、授業前は１～３個をあげる生徒が多かったのに比べ、授業後は３～５個とわずかではあるが増加し、７～９個あげる生徒もいた。記述内容では、プラスイメージ、マイナスイメージともに授業前より具体的になった。「孫が好き」「話好き」など、実際に高齢者インタビューなどを通して交流をもったからこそ出る回答もあった。

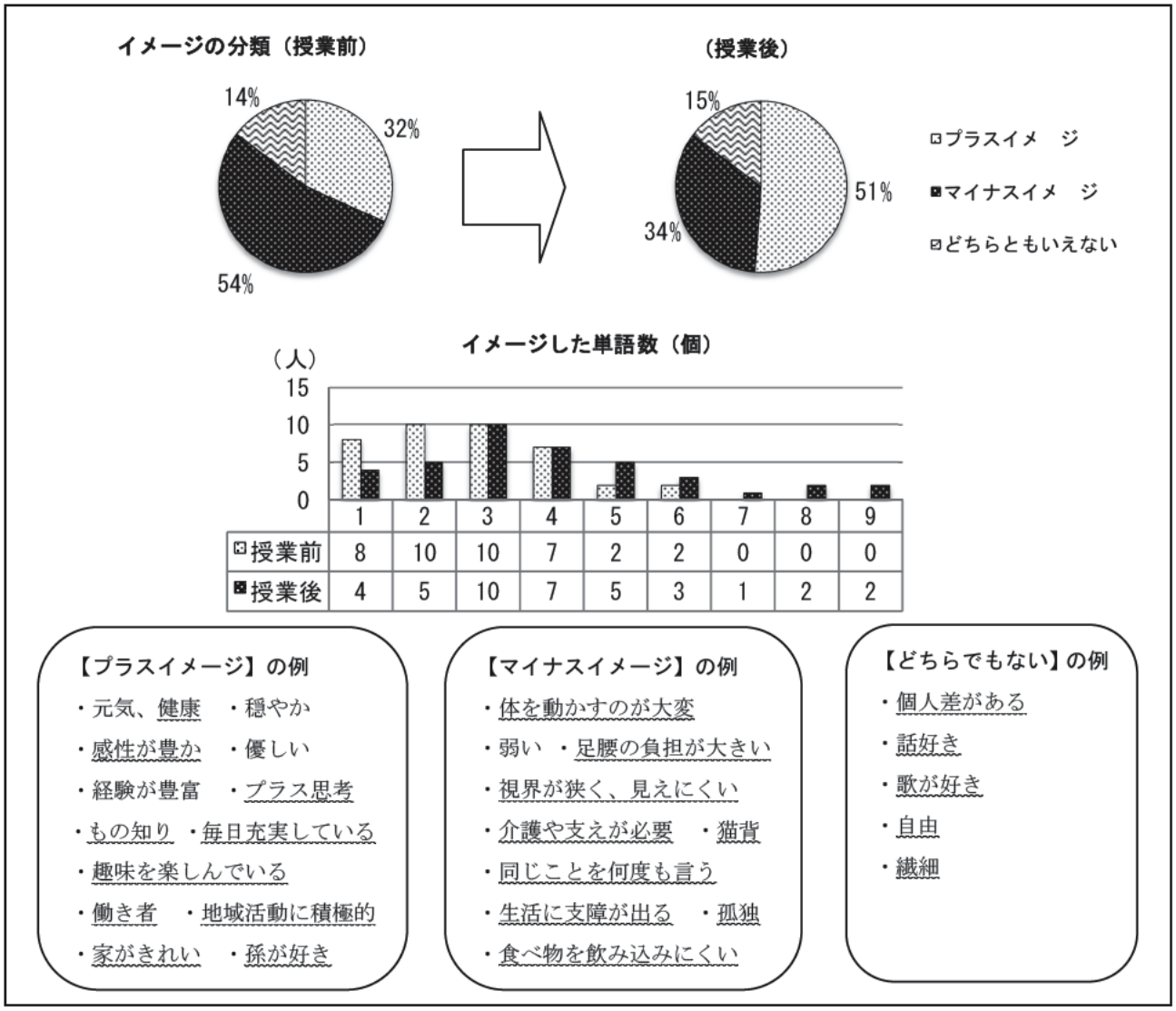
自由記述の感想では、授業前と後で、自分の意識の変化を記述したものが多かった。内容からは、生徒が高齢者や高齢期を肯定的に捉え、身近な問題として考え始めていることが確認できた。



【図 12】高齢者分野の学習に興味があるか



【図 13】高齢者と交流したいか



【図 14】高齢者に対してのイメージ

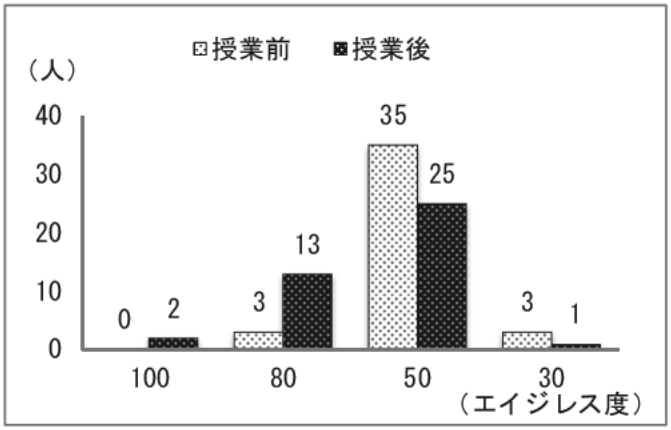
【高齢者分野の学習を終えての感想〈自由記述〉より（抜粋）】

・ほとんどの高齢者が病気なのかと思っていたけれど、本当はそうでないことが分かり驚いた。
・高齢者の人たちにもこれからの目標や楽しみなことがあるのだということが分かった。
・以前は、高齢者の歩くスピードが遅いのに対して、「もっと速く歩けないか」と思っていた。高齢者について学んでみて、歩くだけでもあんなに疲れるんだと分かり、イメージが変わった。
・私は高齢者に対して、マイナスなイメージが多かった。今回の学習を通して、そのマイナスイメージは高齢者が困っていることだということが分かり、手助けしたいと思うようになった。
・はじめはお年寄りって大変だな、年はとりたくないとか否定的なことばかり考えていた。けれど、今では年をとることも悪くないなって思うようになった。
・少しだけど、高齢者への考え方が変わった。前は会話も嫌だと思っていたけど、今ではたくさん交流して知識を得たいと思うようになった。
・シニア体験をしてみて、思っていたよりも体が重かった。今よりももっと高齢者を大切にしようと思った。
・弱々しいイメージだったけど、仕事や趣味をもって生き生きとしている人も多いと知り、興味がわいた。編み物を趣味にしている人が近くにいるので、交流したいと思った。
・年金は思ったより少なかった。自分の将来のためにもいろいろ知ることができて良かった。

・自由にのんびり暮らしているイメージだったけれど、体が思うように動かなくなったりして、寂しい思いをしていることを知った。
・自分の祖母のことしか知らなかったけど、みんなの祖父母の話を聞いて、共有できたことが良かった。
・もっと祖母の家に行って、たくさん話をしたり、一緒に料理をしたりして、関わっていきたいと思った。

(2) エイジレステストの実施

授業前に実施したエイジレステストと同じものを授業後に実施した。回答後、実施前と後のものを自己採点させ、変化を確認させた。わずかではあるが、授業後は高齢者に対する正しい知識が増えていることを確認できた。



【図 15】エイジレステストの結果

5　まとめ

(1) 成果

本事例では、家庭総合の高齢者分野の学習において、グループ学習や体験学習、課題解決型学習などを通して、具体的に学び合い、高齢期や高齢者への理解を深めることを目指した指導と評価の工夫を行った。この実践の成果は以下のとおりである。

① 評価を工夫することで、授業の反省・改善につながった。

生徒の学習状況を、観察・ワークシート・作品・定期テスト・ポートフォリオ・質問などの方法により、場面に応じた評価をすることを意識して授業を行った。また、生徒の自己評価や相互評価も取り入れた。これらすべての評価の項目や観点をあらかじめ生徒に伝えたところ、生徒も本時の授業のねらいを意識するように変化した。さらに相互評価は、生徒に気付きを与え、自分の活動をよりよく改善させるように働いたため、自己評価と同様に重要な評価であると感じた。このような相互評価は、生徒同士で互いに学び合おうとする姿勢を作っていくため、教師による一方的な評価よりも学習成果が得られた。

本事例では、すべての評価を授業改善の視点で捉えることを目指した。本時のねらいと照らして適切な場面で評価をすることで、指導の不足しているところを明確にし、次の時間に改善できるよう心掛けた。

授業形態に関しても、生徒からの意見を聞き、生徒の意欲を高める場合、知識の定着を図る場合など、ねらいに応じた授業形態をとるように努めた。

このように、生徒の学習成果を確かめながら、指導の軌道修正を行い、目標達成のための手立てを臨機応変に講じていくことで、授業の改善につながることが実感できた。

② 高齢者や高齢期を身近に捉えられるようになった。

授業前アンケートでは、高齢期に対して否定的なイメージが多かったのに対して、授業後には高齢者に対して肯定的な考えが増え記述も豊かになり、意識の変容が確認できた。これは、単元全体を通して、教師側が知識を伝えるだけでなく、生徒自身が直接高齢者にインタビューをしたり、疑似体験をしたりといった体験的な学習を通して、具体的に考えた結果であると思う。この学びを通して、生徒一人一人が、異世代の者を理解した上で、気配りや配慮ができるようになり、自分の将来を見通すことにつながってほしいと思う。

③ グループワークを通して、主体的に学ぶ意欲や表現力が高まった。

高齢者の現状や課題について、自分の考えをまとめ、作品を発表する機会を設定することで、プレゼンテーション能力を高められた。さらに、他の生徒の意見を受け止めることもでき、共に学ぶ意欲を高めることができた。また、課題解決型の授業を組み立てていくことで、生徒たちは学ぶ楽しさも味わうことができた。

④ ワークシートを工夫することで、言語で表現する力が付いた。

毎時間の学習内容や、感想、自己評価等をワークシートに記入させた。ワークシートには、簡単な質問をいくつか準備し、なぜそうなのか、なぜそう思うのかという視点で自然に考えさせ、記入できるように意識して作成した。また、まず絵で表現し、そこから言葉で説明させ、その後文章で記入するようにさせた。初めは面倒だと記入しなかったり、単語のみで記入したりする生徒もいた。しかし、積み重ねることにより、理解したことを文章で表現できる力が付いてきた。

(2) 今後の課題

① グループワークや実習を多く取り入れた授業は、生徒に主体的に考えさせる方法として適切であった。しかし、授業時数の関係上、時間が不足気味であった。数時間かけて実施するのではなく、1 時間あるいは 30 分程度で取り組めるものを研究する必要がある。また、家庭総合の授業だけではなく、学校家庭クラブ活動と結びつけ、連携して指導していくことも検討できるのではないかと考えた。

② 教師の評価や生徒の自己評価、相互評価と多方面からの評価を計画し実践した。しかし、実際に評価するのは予想以上に困難だった。評価項目が多く、評価に追われてしまった授業があった。評価項目の精選、また評価場面と内容が適切であるかについての十分な検討及び実践を重ねながら改善していく必要があると感じた。

事例３　科目「フードデザイン」における指導と評価の工夫

～　単元「食事の意義と役割」　～

１　生徒の実態把握

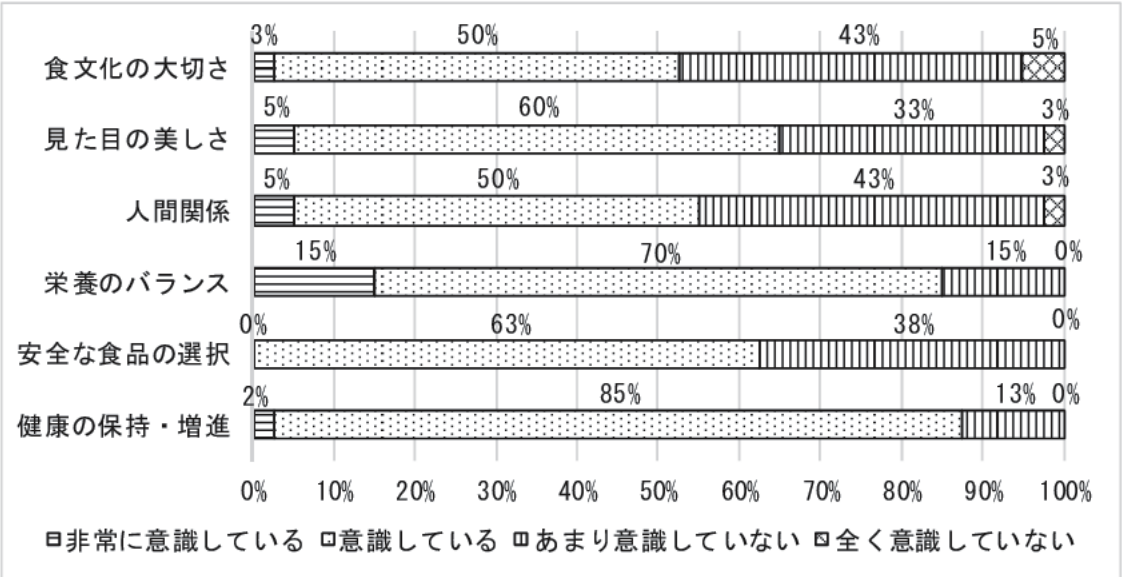
これから授業で扱う内容に関しての生徒たちの基礎的な知識及びこの分野への関心についてアンケート調査を行い、その実態を把握した。対象は、家庭系の専門学科で食生活分野について学んでいる第３学年の 40 名である。

質問１**「日常の食事で意識していること」**については、どの項目についても半数以上の生徒が、意識していることが分かった。特に、健康の保持・増進のために栄養バランスのとれた食事を心掛けていることが分かった**【図１】**。

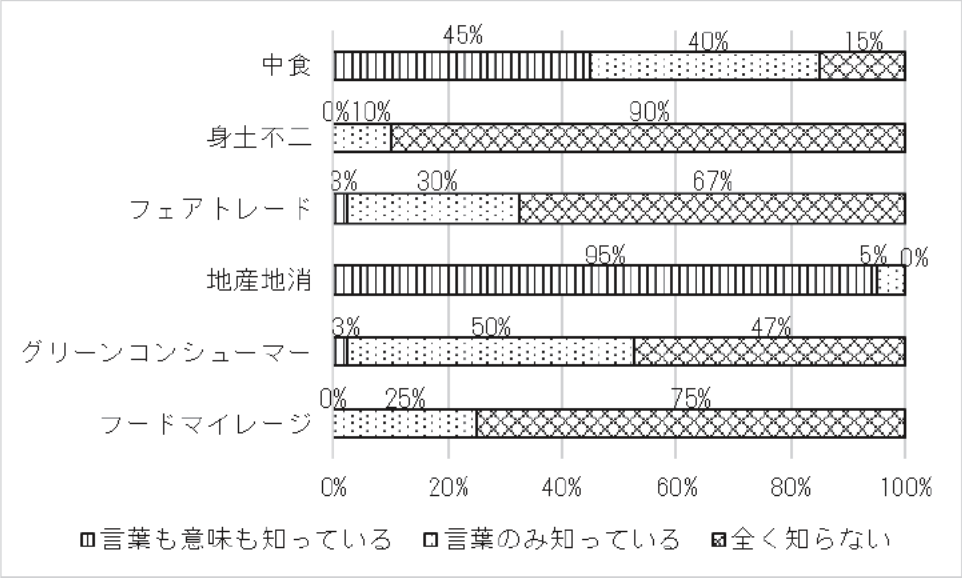
質問２**「語句の理解」**では、食生活に関する課題を表す言葉についての知識を確認した。すべての語句が「家庭総合」や「フードデザイン」で学習したものだったが、生徒に知識として定着していないことが分かった。この単元の学習の中で、再度確認する必要性を感じた**【図２】**。

質問３**「自分に当てはまる『こ食』」**については、複数回答をさせた。「孤食」、「個食」よりも「濃食」を感じている生徒が上回った結果となった。これは、常日頃の生徒が作った料理の味の濃さなどからも伺える結果であった。濃い味を好むのは、コンビニエンスストア等の総菜や加工食品の味に慣れているからと考えられる**【図３】**。

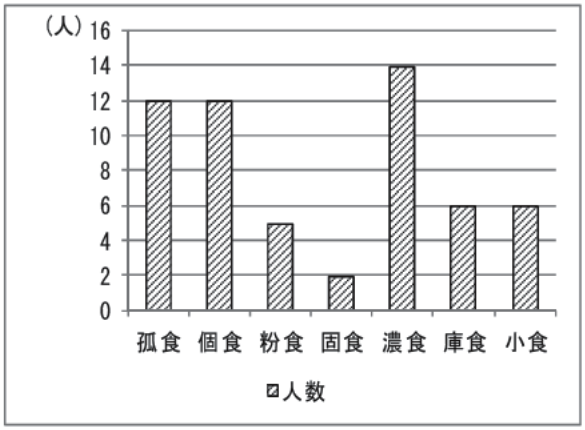
質問４**「食品を購入するときに考慮すること」**については、食品の**「新鮮さ」「おいしさ」「安全性」**も気になるところだが、自由に使えるお金に限りのある高校生は、やはり**「価格」**の安いものに手が伸びているようである**【図４】**。



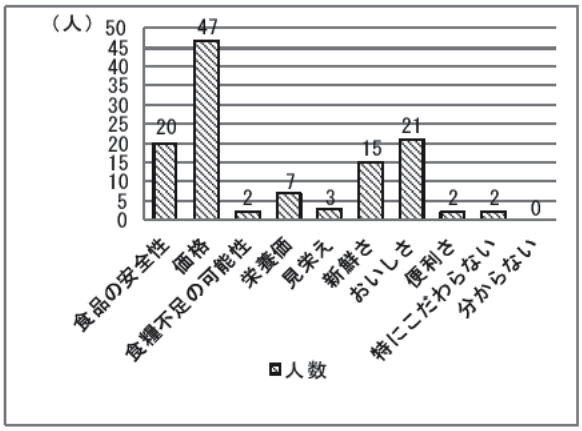
【図１】日常の食事で意識していること



【図２】語句の理解



【図３】自分に当てはまる『こ食』



【図４】食品を購入するときに考慮すること（複数回答）

２　本事例の概要

科目「フードデザイン」においては、栄養、食品、献立、調理、テーブルコーディネートなどに関する知識と技術を習得させ、食生活を総合的にデザインするとともに食育の推進に寄与する能力と態度を育てることが目標となっている。

ここでは、「食を取り巻く現状と課題」について生徒に意識させるとともに、課題の解決に近づくために自分たちにできることを考えさせることとした。そのために適切な場面で評価を行いフィードバックすることにより、生徒に主体的に行動する態度を育みたいと考えた。

そこで、「食事の意義と役割」の分野で 11 時間分の指導計画と評価計画を作成した。教師が一方向的に情報を伝える授業ではなく、生徒が調べた内容を発表したり、考えを絵や文章でまとめたりする活動を取り入れ、生徒が問題解決に向けて主体的に学習できるようにした。そして、本時のねらいと評価規準を明確に示し、生徒が目的をもって授業に取り組めるように工夫した。また、授業中の教師の評価の見取りにより、なかなか理解できない生徒、あるいは最初からある程度の理解を示している生徒に関しては、さらに伸ばしていくための手立てを加えるように工夫した。

3　授業実践

単元名：食事の意義と役割
「食事の役割」「食生活の現状とこれからの食生活」

(1) 単元の目標　　使用教科書（「フードデザイン」実教出版）

食事は基本的には栄養を供給し、生命の維持や健康の保持増進を図るものであるが、同時に嗜好を満たし人間関係の円滑化など精神的な役割や文化的な役割を果たしていることを理解させるとともに、望ましい食習慣形成に果たす日常の食生活の重要性に気付かせる。また、食育基本法の趣旨を理解させ、食育の重要性について認識させ、関心をもたせる。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
・現代の食生活に関心をもち、学習活動に取り組んでいる。 ・家庭や地域における食育推進活動を行おうとしている。	・自らの食生活を振り返り、課題に気付き、健康や安全に配慮した食生活について考えを深め、適切に判断し、表現している。 ・次世代に伝えたい「食の大切さ」についてまとめたり、発表したりしている。	・主体的に食生活を営むために必要な情報を収集・整理することができる。	・自分や家族の食生活を充実させるために必要な知識を身に付けている。 ・食育に関する基本的な知識を身に付けている。

(3) 単元の指導計画と評価計画（11 時間）

時間	学習内容 ねらい	評価 関	思	技	知	評価規準
1	食事の役割 ・食事の生理的・社会的役割を知り、自分や家族の食生活について考える。	○			○	・食事の社会的役割が、人間にとって大切なものであることを理解している。 ・日々の食生活を振り返り、反省点や改善点を考えようとしている。
2	日本人の栄養摂取状態の現状 ・日本人の栄養摂取状態とそれが身体に及ぼす影響を理解する。 ・食事バランスガイドにより、自分の食生活を見つめ直す。	○			○	・脂質の過剰摂取が、人体に及ぼす影響（メタボリックシンドローム等）を理解している。 ・日々の自分の食事の偏りに気付き、改善していこうとしている。
3	食事スタイルの変化と現状 ・中食の増加がもたらすものについて理解する。 ・さまざまな「こ食」について理解する。				○ ○	・中食の増加が、過剰な食料廃棄につながることを理解している。 ・さまざまな「こ食」の背景を理解している。
4	食料の供給と消費 ・日本の食料自給率の現状を確認し、よりよい食生活を目指した行動について考える。〈ペアワーク〉		○ ○			・日本の食料自給率が低下したことによるマイナス面について考えをまとめている。 ・よりよい食生活を目指して、自分たちにできることは何かを考え、まとめている。

5 ・ 6	「買い物ゲーム」をしよう ・1970年と現代の食品の購入方法や生活スタイルの違いを踏まえて、献立をを作成する。 ・これからの食品購入について考える。		○ ○	○		・与えられた条件に応じて、店、交通手段、食材に関する多くの情報を収集・整理している。 ・1970 年と現代の食品の購入方法や生活スタイルの違いを踏まえて、献立を考えている。 ・今後食品を購入する際に、どんなことに気を配ったらよいか考え、まとめている。
7 ・ 8	フードマイレージを減らすために私たちができること ・食と環境を関連付ける語句を理解する。 ・環境に負荷を与えない食生活とはどのようなものかを考える。		○		○	・食と環境を関連付ける用語の意味を理解している。 ・環境に負荷を与えない生活をするために、自分が市長として実行してみたいことを考え、まとめている。
9	よりよい食生活を送るために ・「食生活指針」や「食育基本法」を踏まえて、食生活に関する課題を具体的に見出し、その解決策を考える。	○	○			・「食生活指針」を踏まえ、自身の食生活について考えようとしている。 ・次世代の子どもたちに食の大切さを伝える時に、特に何に重点を置くかを考え、まとめている。
10 ・ 11	子供に伝えたい食の大切さ ・「食の大切さ」を伝えるため、「食育啓発ポスター」を作成する。		○			・次世代の子どもたちに特に何を伝えたいか考え、「食育啓発ポスター」を作成し、そのまとめを発表している。

(4) 授業の実際

本事例では、言語活動を取り入れた４～11 時間目を報告する。概要は以下のとおりである。

ア　４時間目「食料の供給と消費」

ねらい　日本の食料自給率の現状を確認し、よりよい食生活を目指した行動について考えよう。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	○日本の食料自給率について学習することを知らせる。
展開	○私たちの食べ物はどこから来るの？ ・食料自給率の定義 ・世界の先進国の食料自給率 ・日本の食料自給率の低下の理由 ・食料自給率の低下によるマイナス面 〈参考資料〉 『世の中まるごとガイドブック　応用編』 池上　彰著（小学館）	○世界の先進国と比較して、日本の食料自給率が低い理由を発問する。 ・解答が出にくい場合は、教師がキーワードを提示し、思考を促す。 ・再度発問し回答させる。 ・不十分な点は教員が補足説明する。 ○食料自給率低下によるマイナス面について、考えをまとめることを伝える。 **評価規準①**　日本の食料自給率が低下したことによるマイナス面について考えをまとめている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート） ・解答が出にくい場合は、参考資料を提示し、思考を促す。 ・参考資料を十分に読ませる。

		・フードマイレージに着目するよう伝える。 ・食料の輸送重量や輸送距離の増大が、環境に負荷を与えることになることに気付かせる。 ・よい意見は発表させ、他の生徒には参考とするよう伝える。
まとめ	○よりよい食生活を目指して自分たちにできることを考える。 【ペアワーク】	○よりよい食生活を目指して自分たちにできることを考え、まとめることを伝える。 **評価規準②**　よりよい食生活を目指して、自分たちにできることは何かを考え、まとめている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート） ・解答が出にくい場合は具体例をあげ、そのことについて話し合わせる。 ・食料の輸送距離を減らすためにできることを問いかけ、考えを促す。

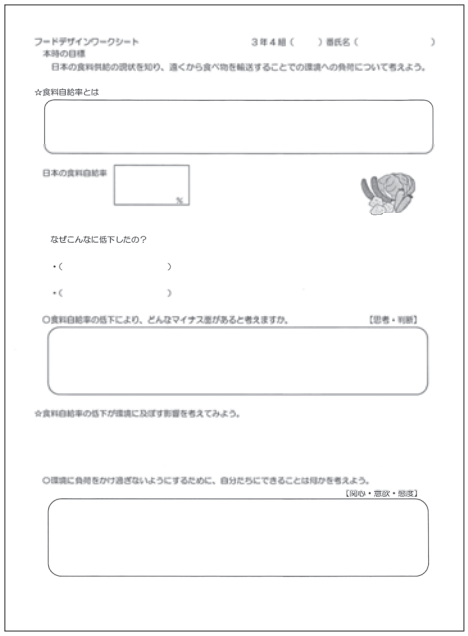
⑺ 指導と評価の様子

a　展開①

食料自給率については、「家庭総合」の授業でも扱ったため、生徒は、食料自給率という語句については知っている。しかし、日本の食料自給率が低い理由や、どのような計算で求めるのかを発問しても答えられない生徒がほとんどであった。

そこで、教師からキーワードを提示して、生徒のもつ知識を引き出しながら思考を促し、回答に導いた。数名に解答させた後、不十分な点を教員が補充した。

次に、日本の食料自給率低下によるマイナス面について考えさせた。


フードデザインワークシート　　３年４組（　　）番氏名（　　）
本時の目標
日本の食料供給の現状を知り、遠くから食べ物を輸送することでの環境への負荷について考えよう。
☆食料自給率とは
日本の食料自給率
%
なぜこんなに低下したの？
・（　　）
・（　　）
○食料自給率の低下により、どんなマイナス面があると考えますか。　【思考・判断】
☆食料自給率の低下が環境に及ぼす影響を考えてみよう。
○環境に負荷をかけ過ぎないようにするために、自分たちにできることは何かを考えよう。
【関心・意欲・態度】

【図５】展開①・② ワークシート

評価規準①
日本の食料自給率が低下したことによるマイナス面について考えをまとめている。
［思考・判断・表現］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

生徒たちは前述のような知識量のため、マイナス面を問いかけても、多くの生徒が自分たちの問題として捉えきれず、ワークシートへ記入できずにいた。

〈全体への支援〉

実践校においては、自分たちの問題として捉えられず、記入できていないものをＣと判断した。多くの生徒が該当したため、二人に一冊『世の中まるごとガイドブック』を配布した。この本は、イラスト豊富で分かりやすい表現で記載されているため理解が深まり、生徒は自分なりの考えをワークシートにまとめることができた。これをＢと判断した。一方、補助資料なしで意見を記入できたものもいた。この生徒たちには発表もさせた。これにより、教室内の理解度を高めることができた。この生徒たちをＡと判断した。

〈Ｃと判断した生徒への支援〉

Ａ評価の生徒の発表を参考に再度考え直して、ワークシートにまとめるように促した。

５名の発表を参考としたことにより、ワークシートにまとめることができ、Ｃ判断の生徒はいなくなった。

ｂ　展開②

次に、よりよい食生活を目指して自分たちにできることを考えさせ、まとめさせた。

評価規準②

よりよい食生活を目指して、自分たちにできることは何かを考え、まとめている。

［思考・判断・表現］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

初めは多くの生徒が取組に消極的だった。

「日本人の食の洋風化」や「フードマイレージ」などを具体例としてあげ、どのようなものかをペアワークで確認させた。その後、「食料の輸送距離を減らすにはどうしたらよいか」と問いかけ直した。

〈生徒の様子〉

多くの生徒がキーワードに気付き、自分なりの表現で、まとめ始めた。しかし、一部の生徒はまだ迷っている様子だった。

迷っている生徒たちへは、「スーパーマーケットの野菜売り場における販売の工夫で、目に付くことは何か」を問いかけ、意見を出させた。その結果、「地元でとれた食材がはっきりと分かる工夫がしてある。」との答えが返ってきた。そして、食材の輸送距離が短いほど環境にやさしい＝地産地消の推進が大切との考えを導くことができ、生徒なりの考えをまとめることができた。

実践校においては、地産地消、日本型の食事、輸送距離、といった視点をもって記入できたものをＢと判断した。全員が記入できたため、Ｃの判断はなかった。さらに、地産池消が鍵となることについて早い段階で気付いた生徒は、外国から輸入する食材には輸送の際のエネルギーの問題だけでなく、輸送時間が長いので保存性を高めるため農薬が使用されている可能性も指摘し、食の安全面を考慮して地産地消を推進していこうという記述が見られた。よりよい食生活を目指したこれからの行動について、具体的な考えを示した生徒たちをＡと判断した。

〖生徒の記述（抜粋）〗

・外国から野菜が運ばれてくるだけで二酸化炭素が排出されることなど考えたこともなかった。これからは、食材を買うときに気を付けたい。（Ｂと判断）

・「フードマイレージ」を知らない人たちがたくさんいると思うのでみんなに知ってほしいと思った。外国にたくさん影響されて、「日本らしさ」がなくなって欲しくない。まずは、自分も気を付けたい。（Ｂと判断）

・外国産の食材は安くてお財布に優しいと思っていた。でも、地球に大きな負担をかけていることになるということを初めて知った。これからは安いからといって無駄に買わないで、本当に必要なものを国産、地元産と見比べながら購入していきたい。（Ａと判断）

・外国の食材は、大量に生産し大量に輸出するために、多くの農薬を使用している可能性がある。私たちの体に及ぼす影響が心配である。これからは、できる限り地元で採れた農薬を使用していないものを購入したいと思った。（Ａと判断）

(ｲ) 成果と課題

食料自給率については２年次に学習していたので、知識として定着しているものだと思っていた。しかし、あまり定着していなかった。食料自給率について再度説明し、フードマイレージと関連付けて…と授業を進めたが時間が超過してしまった。語句そのものの説明をもう少し簡潔にし、日頃よく購入する食材のフードマイレージについての調べ学習を取り入れた方が知識の定着が図れると考えた。

イ　５・６時間目「買い物ゲームをしよう」

ねらい　・1970 年と現代の食品の購入方法や生活スタイルの違いを踏まえて、献立を考えよう。
　　・健康や安全に配慮して、今後食品を購入する際に、気を付けることを考えよう。

段階	学習活動	指導上の留意点 評価規準　［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	・「買い物ゲーム」を通して、環境負荷を与えない買い物方法について考えていくことを伝える。
展開	○買い物ゲーム ・グループごとに夕食の買い物のシミュレーションをする。 ・それぞれの食材のフードマイレージの計算をする。 ○グループごとに作成した夕食の献立や食材のフードマイレージの計算結果を発表する。 【グループワーク】	**評価規準③**　与えられた条件に応じて、店、交通手段、食材に関する多くの情報を収集・整理している。［技能］（発表、イラスト） **評価規準④**　1970 年と現代の食品の購入方法や生活スタイルの違いを踏まえて、献立を考えている。［思考・判断・表現］（発表、イラスト） ・買い物ゲームがスムーズに行えるように、机間指導をして、助言する。 ・夕食の材料を買うという具体的な場面から、食生活にまつわる消費行動と資源や環境とのかかわりを知らせる。 ・買い物に行く店や交通手段の選択によりフードマイレージが変化することに気付かせる。
まとめ	○フードマイレージを少なくして食料自給率を上げるためにはどうしたらよいか考える。	**評価規準⑤**　今後食品を購入する際に、どんなことに気を配ったらよいか考え、まとめている。［思考・判断・表現］（ワークシート）

(ｱ) 指導と評価の様子

a　展開③・④

〖ゲームを始める前の生徒たちの声（抜粋）〗
・1970 年の夕食の食材購入の予算が４人分で 550 円は少ない。この設定で夕食の食材は揃うのだろうか…？
・1970 年代の買い物に行く交通手段に自動車が無い。近所の店に買い物に行けば自動車に乗らなくてすむな。

簡単なルール説明ののち、グループごとに買い物ゲームを始めた。夕食の献立を作成し、その材料をカードで選び出していく。夕食の献立を図示し、グループごとにその献立と買い物にかかった費用を発表した。

生徒たちが、食材カードから旬を意識した献立を作成するであろうことは想定できた。発表の場面では「1970 年の献立作成は、生活スタイルの影響で自然と地産地消となっていた」ことに生徒が気付けるかどうかをポイントに生徒の発表を聞くことにした。

買い物ゲーム（「食と交通と環境」フードマイレージ買い物ゲーム　あおぞら財団）の手順は以下のとおりである。

(a) まず、一クラス 40 名を５名ずつの８班に分割し、各班に、以下のような条件を付けた。

1970 年代チーム（予算 550 円）	現代チーム（予算 1400 円）
１班　春の献立	５班　春の献立
２班　夏の献立	６班　夏の献立
３班　秋の献立	７班　秋の献立
４班　冬の献立	８班　冬の献立

【図６】お店選択カードと交通手段カード

(b) 買い物に行く。

カードから買い物に行くお店（近所のお店、郊外ショッピングセンター）と交通手段を選ぶ（自転車と徒歩、電車とバス、自家用車〈ただし、1970 年チームには自動車はない〉）【図６】。

(c) 夕食献立を考え、発表する。

予算内（4 人家族：1970 年代 550 円、現代 1400 円）で食材カードを選び夕食の買い物をする【図７】。（ただし、主食と調味料は家にある。）夕食の献立を絵に描き、食べたつもりで献立を発表する。

（表）　（裏）

【図７】食材カード

評価規準③

与えられた条件に応じて、店、交通手段、食材に関する多くの情報を収集・整理している。　［技能］（発表、イラスト）

評価規準④

1970 年と現代の食品の購入方法や生活スタイルの違いを踏まえて、献立を考えている。

［思考・判断・表現］（観察、発表、イラスト、ワークシート）

〈生徒の様子〉

多くの生徒が、献立に関するグループでの話合いに積極的に参加していた。

〈全体への補足説明〉

さらに関心をもってもらうために、1970 年は自分たちの親世代が子供の頃のことであることを伝えた。また、昭和とはどんな時代だったのだろうと問いかけた。自分の考えがまとまらない生徒には紙に書いてまとめるように指示した。

評価規準③の技能については、店、交通手段、食材に関する多くのカード情報から、与えられた条件に応じたものを収集・整理できたかをワークシートの記述で評価した。それぞれの条件に応じた店、交通手段、食材を選んでいるものをＢと判断した。その中で、旬の食材カードを意図的に複数枚選んでいるものをＡと判断した。

評価規準④の思考・判断・表現については、選んだ食材のカードから条件に応じた献立を考えることができているものをＢと判断した。献立について考えがまとまらない生徒もワークシートに書く作業とグループ内で他の意見を聞くことを通してまとめることができた。また、発表に向けて、イラストを描いているもの、グループのまとめ役となって原稿を考えているものをＡと判断した。

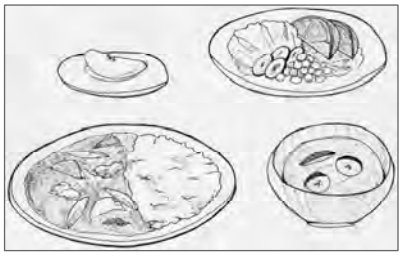
（生徒の話合いの様子）

（発表の様子）

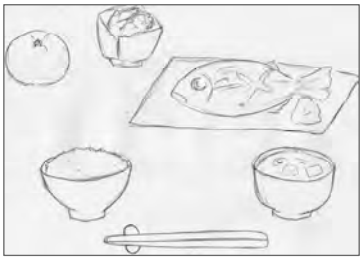
〖各班の夕食献立の内容〗

１班	1970 年（自転車・近所） 春の献立　　530 円	鯖の味噌煮、たけのこの煮物、あさりの味噌汁、きゅうりの漬物、果物（いちご）
２班	1970 年（自転車・近所） 夏の献立　　530 円	カレーライス、野菜サラダ、なすの味噌汁、果物（なし）
３班	1970 年（徒歩・近所） 秋の献立　　470 円	鯖の味噌煮、きんぴらごぼう、豚汁、果物（かき）
４班	1970 年（自転車・近所） 冬の献立　　530 円	鰺の塩焼き、野菜の煮物、あさりの味噌汁、漬物、果物（りんご）
５班	現代（車・ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ） 春の献立　　1290 円	肉じゃが、かぼちゃの甘煮、ほうれん草のおひたし、キャベツとだいこんの味噌汁、果物（オレンジ）
６班	現代（車・ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ） 夏の献立　　1360 円	オムライス、夏野菜サラダ、じゃがいものスープ、果物（すいか）
７班	現代（車・ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ） 秋の献立　　1240 円	カレーライス、野菜サラダ、かぼちゃのポタージュ、果物（バナナ）
８班	現代（車・ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ） 冬の献立　　1400 円	鰺の塩焼き、ほうれん草のごまあえ、豚汁、果物（みかん）

〖生徒による夕食献立のイラスト（例）〗



1970 年　夏の献立
カレーライス、野菜サラダ、
なすの味噌汁、果物（なし）



現代　冬の献立
鰺の塩焼き、ほうれん草のごまあえ、
豚汁、果物（みかん）

〖生徒の発表内容（抜粋）〗

・1970 年は特に魚類、野菜類が安価であり、魚を中心とした和食の献立が立てやすかった。特に意識しなくても日本型食生活ができているように思う。
・現代では手に入らない食材はほとんどないのに、1970 年の献立で使いたいと思った食材が季節の関係で手に入らないことがあった。
・1970 年は近所の店にエネルギーを使わずに買い物に行き、地元でとれた旬の食材を安価で調達して料理をしていた。意識しなくても食料自給率を維持しながら日本型食生活スタイルを維持することができていた。

b　展開⑤

(a) フードマイレージを計算する。

食材シールを産地別に地図に貼る。フードマイレージに応じたCO_2の量を計算する。交通手段ごとのCO_2の量を計算する。食材カードの裏面の★印（★一つがフードマイレージから計算したCO_2の量）を数え、グループごとに★の数を発表していく。

これまでの学習を踏まえて、フードマイレージが増大している要因をグループ単位で話し合い意見をまとめる。

(b) 食後の団らんをする。

1970 年のチームと現代のチームのフードマイレージを発表する。1970 年と現代の違いについて話し合い、これからの食品購入について考える。

評価規準⑤
今後食品を購入する際に、どのようなことに気を配ったらよいかを考え、まとめている。
［思考・判断・表現］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

1970 年と現代の買い物などのスタイルの違いを生徒が体験したことにより、現代の日本の食料自給率の低下について実感を伴って理解できた。全生徒が、今後食品を購入する際に自分なりに気を付けることを記入することができた。

ワークシートの記述から、これまでの「価格重視」から、「安全性」、「フードマイレージ」、「旬」、「地元産」を意識した購入をしていこうという考えに変化した様子が見取れた。また、なるべく「自家用車は使用しない」ように心掛けるといった記述も見られた。

実践校においては、上記のような行動変容を表すキーワードが四つ以上記入されているものをＡと判断した。一つから三つ記入されているものをＢと判断した。記入できていないものはいなかった。

〖生徒の意見（例）〗

・環境のことを考えると、今すぐにでも思い付いたことは実行しようと思うが、何から何までとなると窮屈ですぐに挫折しそう。だからできることから少しずつ始めていけたらなと思う。（Ｂと判断）

・今まで考えもしなかった買い物と環境の繋がりを今日は深く考えさせられた。これまでは、ただ何気なく安い物を買っていた。でもこれからは、買い物に行く交通手段や食材の産地を考え，必要ない食材を安いからという理由で買い過ぎないようにしようと思った。（Ａと判断）

(ｲ) 成果と課題

４時間目の反省を踏まえ、調べ学習的な要素をもったフードマイレージ買い物ゲームを用いた。これにより、生徒自らが日本の食料自給率低下の要因に迫り、これからの自分の行動について考えることができた。しかし、この活動を授業の中で実施していくために配分できる時間は限られている。内容を精選して、短時間で扱えるように工夫していく必要を感じた。

ウ　７・８時間目の授業　「フードマイレージ」を減らすために私たちにできること

ねらい　食と環境を関連付ける語句を理解し、環境に負荷を与えない生活について考える。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	・フードマイレージについての理解をさらに深めるために関連用語や「ダイヤモンドランキング」を通してフードマイレージと環境問題を結び付けて学習することを知らせる。
展開	○食と環境をつなぐキーワードについて学習する。 ・グリーンコンシューマー ・地産池消 ・身土不二 ・フェアトレード ○これまでの学習を踏まえ、ダイアモンドランキングを利用して、自分の住む市の市長だったとしたら、フードマイレージを減らし環境に負荷を与えないためどんな政策をとるか考える。 【グループワーク】	**評価規準⑥**　食と環境を関連付ける用語の意味を理解している。 ［知識・理解］（ペーパーテスト） ・グリーンコンシューマーに特に着目し、10 原則の中で特に自分が共感できる取組はどれか、そしてなぜそう思ったかをグループ単位で話し合う。 **評価規準⑦**　環境に負荷を与えない生活をするために、自分が市長として実行してみたいことを考え、まとめている。 ［思考・判断・表現］（ワークシート）
まとめ	○３～５時間の授業の振り返りをする。	・食料自給率低下の問題を扱った授業を振り返り、自分ができることは何かを考え、ワークシートにまとめる。

⑺ 指導と評価の様子

ａ　展開⑥

食料自給率の低下の原因には、外国からの食料輸入のほかに食料ロスなどの問題もある。フードマイレージの学習の中で環境のことにも触れ始めているので、さらに理解を深めるために食と環境をつなぐキーワードについて学習し、その後、一連の授業のまとめをすることとした。事前アンケートで知識を確認した用語について、集計結果を踏まえつつ授業を行った。

評価規準⑥
食と環境を関連付ける用語の意味を理解している。
［知識・理解］（ワークシート、ペーパーテスト）

⇩　〈生徒の様子〉

「グリーンコンシューマー」や「フェアトレード」などの語句に、生徒が非常に高い興味・関心を示し多くの質問が出た。また、「グリーンコンシューマーの 10 原則」において、どの項目に共感できるかなど反応が非常に良く内容が深まった。

⇩

語句の説明がワークシートにすべて記入できているものをＢと判断した。ワークシートの欄外に、授業中の教師と生徒とのやり取りの中から、大切だと思うことや参考になったことなどを工夫して記入している生徒もいた。これをＡと判断した。未記入部分があるものはいなかったので、Ｃはいなかった。

⇩

後日、定期試験の問題の中で、ここで扱った語句を説明させた。正答率が 88％であった。

b　展開⑦　　ダイヤモンドランキングの活用

右のＡ～Ｉの項目は、フードマイレージを減らすための手立てである。

まず自分が市長になったとして自分が住んでいる都市を変えていくためにはどの項目から変えていくかを考え、図の空欄に項目のアルファベットを記入した。次に、グループに分かれて自分が重要視している事柄を話合い、意見交換の中で考えを深めた〖生徒の考えたダイヤモンドランキング（抜粋）〗**【図８－１、８－２、８－３】**。

Ａ　農地の確保・整備
Ｂ　農業の担い手育成
Ｃ　物流のモダールシフト（鉄道輸送）
Ｄ　環境にやさしい車の普及
Ｅ　地元産の農産物の売り場の拡充
Ｆ　わかりやすい食品マークの提示
Ｇ　地産地消のライフスタイルの普及
Ｈ　買い物に徒歩・自転車を促進
Ｉ　コンパクトシティへ都市構造を改変

評価規準⑦

環境に負荷を与えない生活をするために、自分が市長として実行してみたいことを考え、まとめている。　［思考・判断・表現］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

項目Ａ～Ｉの表現が難しかったのか解読ができず、図式化できずにいる生徒が多数いた。

〈全体への支援〉

グループ内で意見交換をすることに切り替え、意見がよくまとまっている生徒から理解不足の生徒に伝える形をとった。多様な考えを知り、自分の意見をよりよいものとしていくことを伝えた。

〈生徒の様子〉

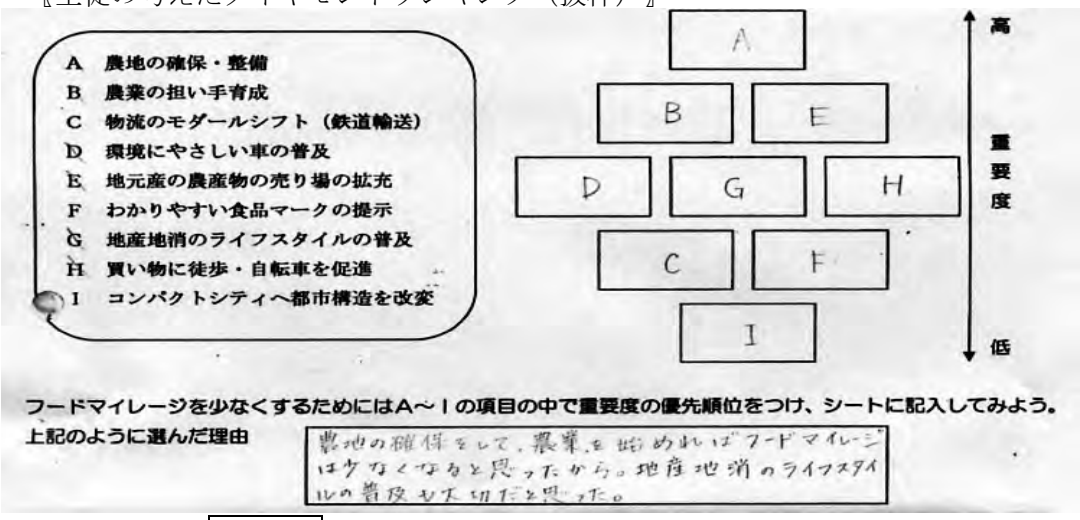
つまずき気味の生徒も、語句の意味を教えてもらい、また他の生徒の考え方を知ることができた。これにより、自分なりの意見をもち、図式化された他の意見を取り入れつつ自分たちにできることは何かを総合的に考えることができた。

実践校においては、ランキングが１～９位まで全て記入されていて、実行してみたいことが記入されているものをＢと判断した。実行してみたいことの記入があり、ランキングに不備があるものはＣと判断した。素早く記入でき、考えがうまくまとまっているものには、他の参考となるように発表をさせた。これをＡと判断した。

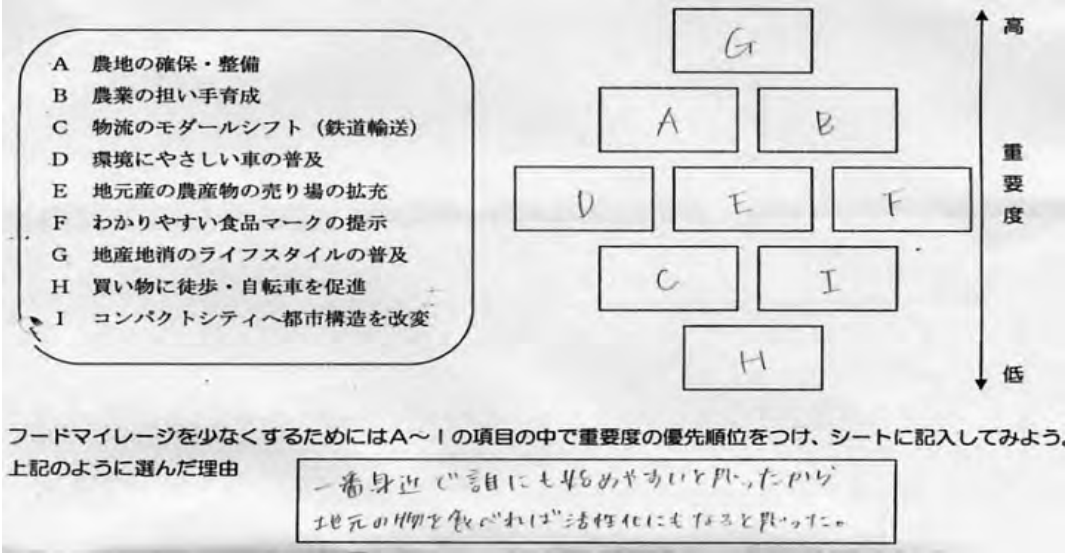
Ｃと判断した生徒には、宿題とし後日記入し再提出をさせた。

（ランキング記入の様子）

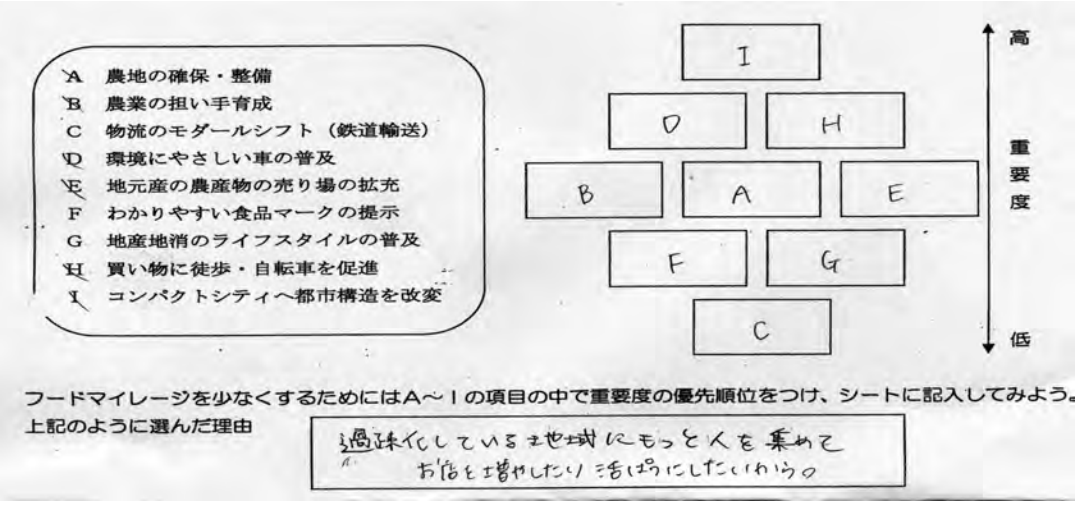
〖生徒の考えたダイヤモンドランキング（抜粋）〗



【図８－１】タイプ１　Ａ・Ｂが上位になる・・・「農業を守ろう」



【図８－２】タイプ２　Ｇが上位になる・・・「身近なところから変えていこう」



【図８－３】タイプ３　Ｉが上位になる・・・「都市計画から変えていこう」

生徒の意見としては、上記のタイプ１【図８－１】とタイプ２【図８－２】が大部分を占めた。

〖ダイヤモンドランキングを体験した生徒たちの感想（抜粋）〗

・この図を作成してみて自分とは違う考え方の人がたくさんいるなと思った。色々な考え方を知ることができてよかったと思う。
・どの政策からやり始めても、すべてにおいて結果が出る。私たちのできることは限られているが、小さなことでもやり始めることが大切である。まず実行するときには正しい情報や確実な知識を身に付けることが大事である。
・農家を増やすことは今の日本ではなかなか難しいことだと思う。土地があれば開拓し、建物をどんどん建ててしまっているからだ。現代は、農家をやりたいと思っている人がいても土地がなく、また土地代は高いので農家が減っているのだと思う。新しい建物をたくさん建て新しい日本を創るのではなく農家をもっと大切にする新しい日本を創るべきだと思う。
・それぞれに思いがあると思った。それぞれに良いところと難しいところがあるので、一概に「これが良い！これが悪い！」とは言えない。しかし、都市生活を変えていくには、どれかに絞って実施していかなければいけないと思う。

(ｲ) 成果と課題

この時間は、いつも以上に生徒が興味・関心を示し、多くの質問が出たり、意見が出るなど反応が大変良く内容が深まった。そのため、当初の計画より１時間分長く時間を割いてしまった。（本事例の中で掲載してある指導計画は、１時間分長い修正版となっている。）

エ　９時間目「今後の食生活をより良いものにするために」

ねらい　「食生活指針」や「食育基本法」を踏まえて、食の在り方を見つめ直す。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価規準［観点］（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	・「食育基本法」を学習し、次世代に伝えたい食の大切さは何かを考えることを知らせる。
展開	○「食生活指針」の振り返り ○「食育基本法」を学習する。	・１年次に学習した「食生活指針」を思い出し、現在の自分の食生活の現状をチェックシートにて振り返る。 ・学科で「食」について学び、自身の食生活に生かされた点、反省すべき点をワークシートにまとめる。 **評価規準⑧**　「食生活指針」を踏まえ、自身の食生活について考えようとしている。［関心・意欲・態度］（ワークシート） ・「食育基本法」の目的や意義を知らせ、ワークシートにまとめさせる。 ・「食育」といっても食の安全・しつけ・食料問題など多岐にわたることに気付かせる。 **評価規準⑨**　次世代の子どもたちに食の大切さを伝える時に、特に何に重点を置くかを考え、まとめている。［思考・判断・表現］（ワークシート）
まとめ	○次時の学習概要をつかむ。	・次世代の子供たちに伝えたいことを食育ポスターにすることを伝える。

(7) 指導と評価の様子

a　展開⑧

(a) 食生活指針を踏まえて、現在の自分の食生活の現状を振り返る。チェックシートに記入する【図９】。

(b) 次に「学科での食に関する学習を踏まえて、自身の食生活で改善して良くなった点、反省すべき点」をワークシートに記入する。

評価規準⑧

「食生活指針」を踏まえ、自身の食生活について考えようとしている。

［関心・意欲・態度］（ワークシート）

〈生徒の様子〉

生徒たちは、食生活のチェックに真剣に取り組み、自身の食生活の改善点、反省すべき点を記入することができた。

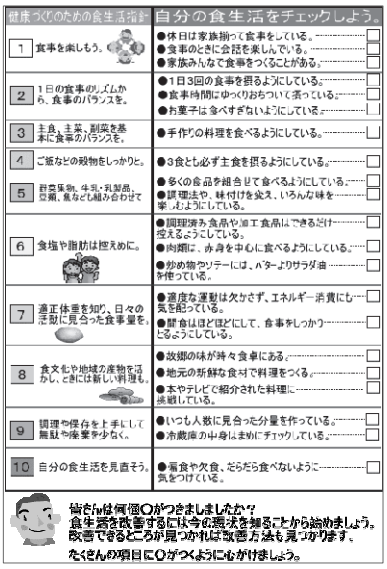
実践校においては､改善した点と反省すべき点の両方が記入できているものをＢと判断した。改善した点と反省すべき点が具体的に記入できており、分かりやすくまっているものに発表をしてもらった。これをＡと判断した。どちらか片方のみの記入のものを、Ｃと判断した。

〈個別の支援〉

Ｃと判断したものには、発表をよく聞き参考として、再度考えるように伝えた。発表を聞いたのち、すべての生徒が改善した点と反省すべき点を記入することができた。

〖改善して良くなった点（抜粋）〗

・食べ物の好き嫌いが減った。
・調理実習で料理の幅が広がり、家でも色々な料理を作ったりするようになった。
・見た目も楽しめる料理を作れるようになってきた。
・３食しっかり食べるようになり、間食が減った。
・食材や料理のカロリーや栄養などに目がいくようになり、バランスを考えるようになった。
・料理を通じて家族とコミュニケーションがとれるようになってきた。
・野菜をたくさん食べることを心がけるようになってきた。



健康づくりのための食生活指針	自分の食生活をチェックしよう。
1 食事を楽しもう。	●休日は家族揃って食事をしている。 ●食事のときに会話を楽しんでいる。 ●家族みんなで食事をつくることがある。
2 1日の食事のリズムから、食事のバランスを。	●1日3回の食事を摂るようにしている。 ●食事時間にゆっくりおちついて摂っている。 ●お菓子は食べすぎないようにしている。
3 主食、主菜、副菜を基本に食事のバランスを。	●手作りの料理を食べるようにしている。
4 ご飯などの穀物をしっかりと。	●3食とも必ず主食を摂るようにしている。
5 野菜果物、牛乳・乳製品、豆類、魚なども組み合わせて	●多くの食品を組合せて食べるようにしている。 ●調理法や、味付けを変え、いろんな味を楽しむようにしている。
6 食塩や脂肪は控えめに。	●調理済み食品や加工食品はできるだけ控えるようこしている。 ●肉類は、赤身を中心に食べるようにしている。 ●炒め物やソテーには、バターよりサラダ油を使っている。
7 適正体重を知り、日々の活動に見合った食事量を。	●適度な運動は欠かさず、エネルギー消費にも気を配っている。 ●間食はほどほどにして、食事をしっかりとるようこしている。
8 食文化や地域の産物を活かし、ときには新しい料理も。	●故郷の味が時々食卓にある。 ●地元の新鮮な食材で料理をつくる。 ●本やテレビで紹介された料理に挑戦している。
9 調理や保存を上手にして無駄や廃棄を少なく。	●いつも人数に見合った分量を作っている。 ●冷蔵庫の中身はまめにチェックしている。
10 自分の食生活を見直そう。	●暴食や欠食、だらだら食べないように気をつけている。

皆さんは何個○がつきましましたか？
食生活を改善するには今の状況を知ることから始めましょう。
改善できるところが見つかれば改善方法も見つかります。
たくさんの項目に○がつくように心がけましょう。

【図９】食生活チェック

〖反省すべき点（抜粋）〗

・自分でおかずの味を調節してしまって、素材本来の味を感じられなくなっている。
・家族で食事をすることが減った。
・中食が増えた。
・１日３食の食事をしていない。
・食に関して興味がわいたため、ついつい食べ過ぎてしまう。

b　展開⑨

(a)　「食育」について、どのようなものがあるのかを発表する。

(b)　右記の食べる力を参考に、子どもたちに伝えたいことをまとめる。自分が特に伝えたいと思う項目を選び、その理由をワークシートに記入する。

・感謝の心
・一緒に食べたい人がいる
・心と身体の健康を維持できる
・食事の重要性や楽しさを理解する
・食べ物の選択や食づくりができる
・日本の食文化を理解し伝えることができる

【参考：食育で育てたい食べる力
（内閣府食育ガイド）】

評価規準⑨

次世代の子どもたちに食の大切さを伝える時に、特に何に重点を置くかを考え、まとめている。　［思考・判断・表現］（ワークシート）

⇩

実践校においては、上記の【食育で育てたい食べる力】の中から特に伝えたいと思う項目を選び、その理由をワークシートに記入することができたものをＢと判断した。その中で、具体的な例を挙げて、選んだ理由を説明してあり、かつ他の参考として発表してくれたものをＡと判断した。

〖生徒の意見（抜粋）〗

「一緒に食べたい人がいる（社会性）」を育てたいです。

より良い食材を選んで食べることも大切ですが、より一層豊かな食事をするためには一緒に食べる人も大切だと思います。「この人とおいしいものを食べたい」「よりおいしいものを食べてもらいたい」という気持ちが他者と関わる力を育てることになると思うからです。

（Ｂと判断）

「食に関する感謝の心」を伝えたいです。

親に食事を用意してもらうのが当たり前、食材はなんでも手軽に手に入ることが当たり前と思ってほしくないからです。親には働いて稼いでもらって忙しい中食事を用意してもらい、作物や生き物の命をもらって自分の命を支えてもらい…という風にたくさんの支えにより日々の食事をしている。支えられているという自覚が芽生えれば、無駄も減るし、好き嫌いもなくす努力をするだろうし、温かい心も育つだろうし、人として成長できると思うからです。

（Ａと判断）

(ｲ)　成果と課題

教師が想定していた以上に「食育」に対する生徒の思い入れは深く、伝えたい内容は多岐にわたっていた。今回の取組に生徒からは、「日々の授業の中で反省点を考える機会は多くても、良くなった点を考える場面は意外に少ない。良くなった点を考えた今日の授業では、前向きな気持ちになれました。」というコメントが寄せられた。これからの授業づくりに生かしたい。

オ　10・11 時間目の授業「次世代の子どもたちに伝えたい食の大切さ」

ねらい　次世代の子どもたちに「食の大切さ」を伝えるために、「食育啓発ポスター」を作成しよう。

段階	学習活動	指導上の留意点　評価場面 [観点]（評価方法）
導入	○本時の学習内容を確認する。	・食育啓発ポスターを作成することを伝える。
展開	○ポスターのテーマについての話合い。 ○ポスターの作成。 ○グループごとの発表。 【グループワーク】	・ポスターのテーマは対象世代を明確にすることを伝える。 **評価規準⑩**　次世代の子どもたちに特に何を伝えたいか考え、「食育啓発ポスター」を作成し、そのまとめを発表している**【図10】**。 ［思考・判断・表現］（作品、発表） ・どのような趣旨でこのポスターを作成したのかが明確になるように、グループごとに発表させる。
まとめ	○授業の振り返り	・これまでの授業を振り返り、食に関する学びがさらに深まったことを確認する。

(7) 指導と評価の様子

a　展開⑩

(a)　これまでの９時間分の学びのまとめとして、食育啓発ポスターをグループで作成した**【図 10】**。前時に個人で考えた「次世代に伝えたい食の大切さ」を持ち寄り、話合いのもとにテーマを決めポスターを作成した。グループによる話合い活動にもすっかり慣れた様子で終始和気あいあいとした雰囲気で活動をしていた。

(b) 次にグループごとに作成したポスターの発表をした。「対象年齢」と「伝えたいこと」を明確にして発表させた。

評価規準⑩
次世代の子どもたちに特に何を伝えたいか考え、「食育啓発ポスター」を作成し、そのまとめを発表している。　［思考・判断・表現］（作品、発表）

〈生徒の様子〉
グループごとに、スムーズな話合いができ、作業を進めていた。

ポスターは予想以上によいものとなって仕上がった。細部にまで、これまでの学習の成果が描かれていた。また、グループの代表による発表を行った。そのため、学習したことが生徒にきちんと定着したと感じることができた。

〈生徒の行動〉
他のグループの発表を聞き、評価をした。

ポスターに描かれた内容はさまざまであった。対象も、幼児から全ての世代まであった。
内容は、感謝の気持ち、郷土料理、食事を楽しむ、残さず食べるなどであった。生徒にも、発表内容、発表態度、ポスターの印象について評価をさせた。
発表内容とポスターの表現が合致しているグループで、作成の趣旨が明確なものをＢと判断した。発表の際に、聞き手の反応を見ながら具体的な説明を付け加えているグループがあった。これをＡと判断した。発表内容とポスターの表現が合致していない、作成の趣旨が不明確のためＣと判断したグループはなかった。

作　品	（ⅰ）	（ⅱ）
対　象	すべての世代	中高生
伝えたいこと	栃木の郷土料理であるしもつかれを祖母→母→娘へと受け継ぎたい。	最近は電子レンジで温めて食べる料理が多いので、手作りの料理が一番であることを伝えたい。
作　品	（ⅲ）	（ⅳ）
対　象	幼児	小学生
伝えたいこと	食べ物の命を頂くことの大切さや携わる人たちへ感謝の気持ちをもって食べることが大切であることを伝えたい。	家族との会話を楽しみながら食事を楽しむことで心を豊かにしたい。

【図 10】作成されたポスター（抜粋）

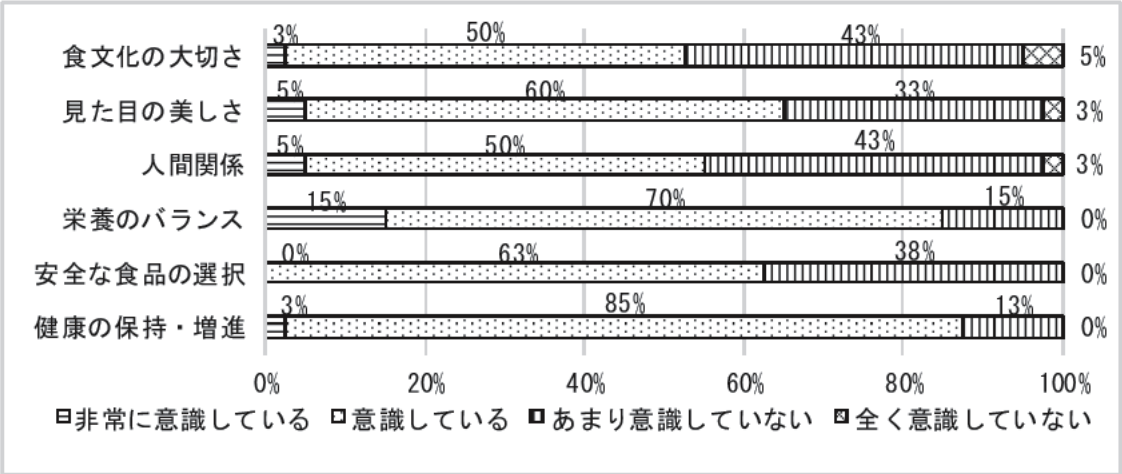
（グループごとの発表）

（生徒による評価の様子）

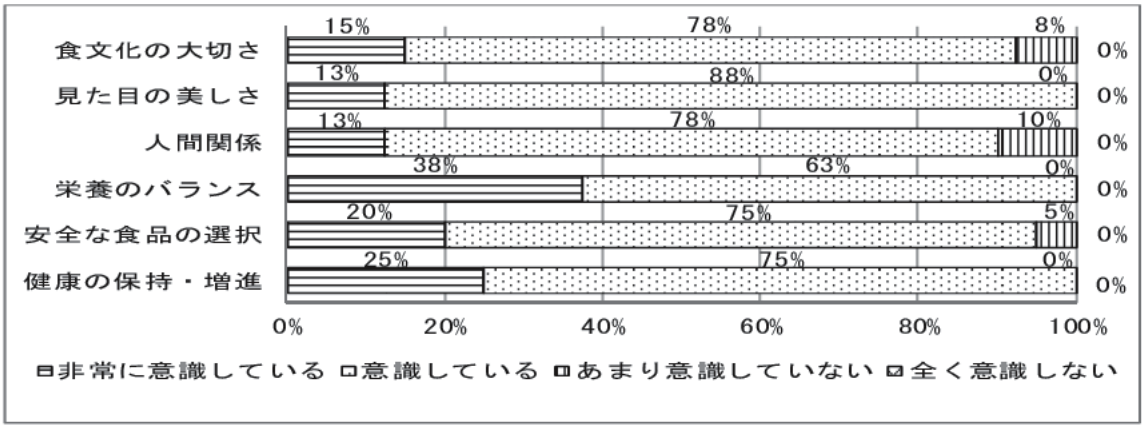
４　生徒の変容把握

11 時間目が終了した段階で事後アンケートを実施した。事前アンケートと同じ質問形式で、食に関する意識や知識の定着度を確認した。また自由記述形式で「食」に関する意識の変化や、話合いや発表を取り入れた授業に関する感想を書かせた。

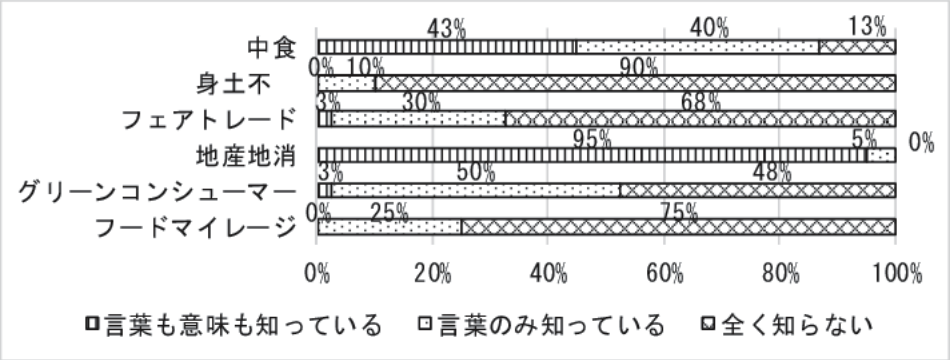
「日常の食事で意識していること（授業後）」【図 11−２】、**「語句の理解（授業後）」【図 12−２】**、**「食品を購入するときに考慮すること」【図 13】**のとおり、授業後のアンケートの集計結果は非常に良い結果となった。特に「**食品を購入するときに考慮すること**」では、事前では「**価格**」がトップであったが、事後では「**安全性**」が「**価格**」を上回る結果となった。定期試験にもこの分野の問題を出題したが正答率は 85%だった。自由記述でも食に関する意識が高まったことがうかがえた。



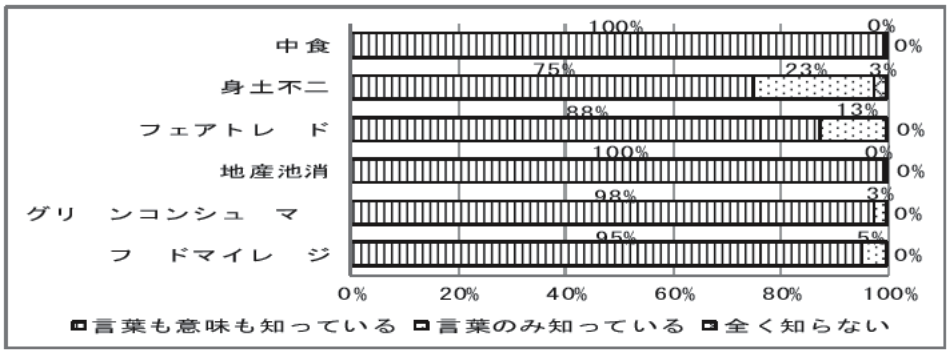
【図 11-１】日常の食事で意識していること（授業前）



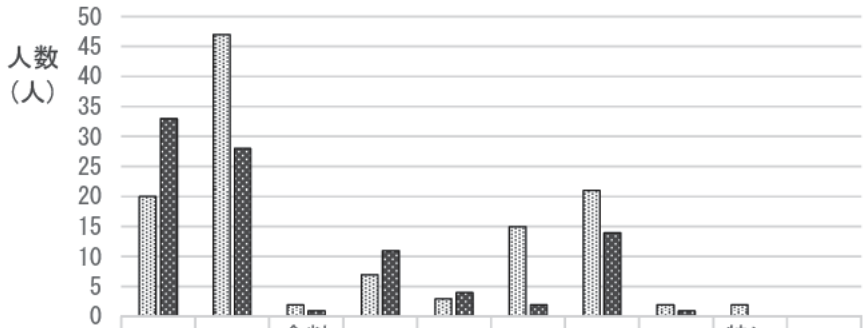
【図 11-２】日常の食事で意識していること（授業後）



【図 12-１】語句の理解（授業前）



【図 12-２】語句の理解（授業後）



	食品の安全性	価格	食料不足の可能性	栄養価	見栄え	新鮮さ	おいしさ	便利さ	特にこだわらない	分からない
授業前（人）	20	47	2	7	3	15	21	2	2	0
授業後（人）	33	28	1	11	4	2	14	1	0	0

【図 13】食品を購入するときに考慮すること（複数回答可）

〖生徒による記述（抜粋）〗

質問　「食」に関する意識について変化したこと

・何を買うにしても「価格が一番」という考えが変わりました。安さだけでなく安全性やおいしさなどの「心の満足感」を大切にしたいと思うようになりました。

・フェアトレードマークをファミリーレストランのドリンクバーやお菓子のパッケージなどで見付けた。こういう品物を購入するなど、少しずつだけど私は協力します。

・「フードマイレージ」や「グリーンコンシューマー」は、両親も知らない言葉だったので、内容や意味を教えてあげた。

・自分は、食の安全性を重要視していきたいと思う。今は栄養をバランス良く摂って健康に過ごせるように親が管理してくれている。これから自立していくということは、自分の健康を自分で管理しなければいけないなと感じた。

・「食」は人を良くすると習ったけど、食で苦しんでいる人は世界にたくさんいる。すべての人が幸せに笑顔で食を楽しむことができるように、自分にできることから実践してみたい。

質問　話合いや意見の発表などの授業についての感想

・自分の意見を述べるために考えたり、ゲーム形式の活動を楽しく行ったり、自ら動きながら学んだことは分かりやすく、そして頭にも入ってきやすいと思った。

・グループで話合いをすると自分の意見だけでなく友達の意見も聞くことができて、考えが変わったり参考になったりした。また他のグループの意見も聞けることは良いことだし、面白かった。

5　まとめ

(1) 成果

本事例は、家庭系の専門学科で食生活について学んできた３年生を対象に「フードデザイン」の授業で現代の食生活の現状と課題を自分や家族の食生活と関連付けて考えさせた。その上で、次世代の子どもたちに「食」の大切さを伝えていく能力と態度を育むことを目指した。

本事例の指導と評価の工夫においては、次のような成果があったと考える。

① 授業中の個別的な支援が容易となり、生徒の理解を促進することができた。

授業ごとに評価規準を設定し、それを見取る場面と見取るための評価の基準を事前に明確にした。これにより、授業中に「努力を要する状態（Cと判断）」の生徒の把握が容易になり、タイミングよく声をかけ手立てを加えることができた。さらに、理解度が高く意欲的な生徒には、力を付けるためのプラスαの手立てを加えることもできた。生徒の理解度に合わせた指導ができるという点で意見交換やグループ発表などの活動は有効であった。

② 個々の学びが、グループ単位、クラス単位で共有され、クラス全体で学びの達成感を味うことができた。

情報を一方向的に伝えるだけの授業にならないように、話合いやグループ単位の意見発表、シミュレーション形式の活動などを授業に盛り込んだ。また、生徒に毎時間授業を振り返らせ、その時間に考えたことなどをワークシートにまとめさせ、ペアワークで振り返らせるなどの仕掛けをした。このような活動の中で、生徒同士で意見や考えを伝え合い、他の異なる意見を自分の意見と合わせ、より良いものへと変えていくことができた。そして、良いものに変わっていくという実感がさらに意欲を高め、グループ単位、そしてクラス単位にまで波及し、クラス全体で学びの達成感を味うことができた。

③ 一連の学習活動が確実に生徒の学力の向上につながった。

学習したことが知識として定着しているかどうかを定期テストで確認した。食に関するキーワードについてその内容を説明させたり、「食料自給率を上げるために自分たちができる取組」について自分の考えを記述させたりした。正答率が85%と高いものとなった。

(2) 課題

グループ単位の活動やシミュレーション形式の活動を取り入れることは、予想以上に時間がかかる。年間の指導計画や単元の指導計画を作成する時点で十分な検討をする必要がある。

3　おわりに

今回の調査研究では、「家庭基礎」「家庭総合」「フードデザイン」における各分野において、指導と評価の一体化を図るための授業改善を試みた。

まず教師が、学習のねらいと評価規準・評価の観点を明確にし、本時の授業で何を学ばせるのか、本時の到達目標としての生徒の姿はどのような状態なのかをしっかりと意識した授業づくりを行った。これにより生徒にも、本時のねらいや到達目標が分かりやすく伝わり、教師も生徒も見通しをもって授業に取り組めるようになった。そして、生活の中で活用する視点を明確にした実践的・体験的な学習活動を意図的に組み込むことにより、教師も生徒も互いに学び合い高め合おうとする授業へと変容した。個々の生徒の主体的に学ぼうとする意欲を喚起することができた。

以下に各事例の成果や課題を振り返り、授業を改善していく上で留意したいことを述べる。

①　本時のねらいに即した評価規準と評価場面を明確にしておくことにより、適切なタイミングで生徒に指導ができる。

評価規準・評価場面・評価方法そして評価基準が明確になっていると、ねらいに対して努力を要すると判断される生徒に対して、適切なタイミングで声掛けすることが容易となった。そして、個に応じた指導を行いやすくなった。また、おおむね満足できる状況の生徒の中から、プラスαのアドバイスを行い十分満足できる状況に引き上げることもできるようになった。これにより、生徒たちの理解が十分に図られるとともに、一人一人の生徒が、自信をもって学習に取り組むことができるようになった。

②　生活の中で活用する視点を明確にした実践的・体験的な活動をペアやグループ単位で行うことにより、授業の中で教師も生徒も互いに学び合おうとする意識が高まる。

授業の仕掛けとして、生活の中で活用する視点を明確にした実践的・体験的な活動を様々な人数構成で組み込んだ。意見や考えを伝え合う思考力・判断力・表現力等の育成を意識した活動を多く設定したことで、他の異なる意見を自分の意見と合わせ、より良いものへと変えていくことができた。さらに、その良い意見がグループ単位、そしてクラス単位にまで波及し、クラスの生徒が学びの達成感を味うこともできた。これにより、教師も生徒も互いに学び合い高め合おうとする意識を高めることができた。そして、主体的に学ぶ楽しさと学ぶ姿勢を体感することができ、主体的に学ぶ態度を育むことができた。

③　教師が変われば生徒も変わる。

本研究を通して、評価の重要性を改めて確認した。三つの事例とも生徒の主体的に授業に取り組む態度に変容が見られた。指導計画と評価計画に基づく授業づくりを行うことで、生徒の力・可能性をより一層引き出し伸ばすことができると考える。生徒を変えようと考えるならば、まずは教師が基本に立ち返り、授業づくりに励むことが必要である。

これからの家庭科教育の構築に向けて、これまでの指導と評価の現状を見つめ直し、指導と評価の一体化を目指した工夫改善を行うことが大切であると考える。本調査研究における事例を、学校や生徒の実態に合わせてアレンジしたり考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

◇平成 25 年度高等学校における教科指導の充実　研究協力委員・研究委員（家庭科）

研究協力委員

栃木県立宇都宮白楊高等学校	教　諭	吉 村　英 子
栃木県立那須拓陽高等学校	教　諭	豊 島 真規子
栃木県立黒磯南高等学校	教　諭	佐々木 優 子

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	鈴 木　秀 子

高等学校における教科指導の充実
家　庭　科
指導と評価の一体化
～生徒の主体的な学びを促すために～
発　行　　平成26年3月
栃木県総合教育センター　研究調査部
〒320-0002　栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204　　FAX 028-665-7303
URL http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/